

Jミルク国際委員会 ニュースレター

Newsletter of J-milk International Committee No.11 2026

■ 巻頭言：国際組織との関わりが変えた人生

Jミルク国際委員会特別委員/国際規格専門分科会長 齋藤 真人

■ 国際組織（IDF、GDP、DSF、IFCN）の活動報告

IDFファクトシート（「乳糖の理解：消化から健康への影響まで」、ほか）

■ 国際会議の報告

GDP-IMP会議2026（モントリオール）、IFCNデューリーカンファレンス2026



上左：IDFワールドデューリーサミット2026開催予定地（オークランド） 上右：2025年度 日本の持続可能な酪農研究会
下左：IDFワールドデューリーサミット2026開催予定地の近郊の酪農場 下右：GDP-IMP会議2026（モントリオール）



一般社団法人 Jミルク
Japan Dairy Association (J-milk)

巻頭言：国際組織との関わりが変えた人生

J ミルク国際委員会特別委員/国際規格専門分科会長 齋藤 真人	1
1. 国際委員会活動報告と主な国際情報提供	
I 国際委員会実施報告	3
1) 国際委員会	
2) 分科会長・広報委員会議	
3) 国際組織活動連絡会議	
II 専門分科会活動報告	11
1) コーデックス関連活動	
2) 持続可能性関連活動	
3) IDF/ISO 分析法関連活動	
III ISO/TC34/SC5 国内審議委員会活動報告	12
IV 日本の持続可能な酪農研究会の実施報告	13
V 国際情報提供	18
2. 国際組織の活動報告	
I I D F 関連	23
1) I D F チームアップデート（最新活動状況）から	
2) I D F 質問状の概要と結果	
3) I D F ファクトシートの紹介	
4) ワールドデーリーサミット 2026（オークランド）の予定	
5) その他の国際会議の報告・予定	
II G D P 関連	73
1) G D P 見解書、ウェビナー	
2) 国際会議の報告・予定	
III D S F 関連	84
1) 年次進捗報告	
2) 国際会議の予定	
IV I F C N 関連	85
1) 国際会議の報告・予定	
V I S O（乳・乳製品）関連	88
1) 国際会議の開催および質問状の発行	
2) A O A C 情報の収集・提供	
3. 国際会議等の日程および出版物の紹介	
I 国際会議等の日程一覧表	92
II 国際組織関連の出版物	94

巻頭言：国際組織との関わりが変えた人生

Jミルク国際委員会特別委員/国際規格専門分科会長
株式会社 明治 海外事業本部 海外商品開発・レギュラトリ一部
齋藤 真人

現在、国際委員会の国際規格専門分科会長および GDP 特別委員を務めております、株式会社明治の齋藤です。会社の研究所でスポーツ飲料、流動食、ドリンクヨーグルトなどの商品開発を担当していた私が、なぜ今このような立場にいるのか、自分でも不思議に思うところがあり、今回、改めてこれまでの経緯を振り返ってみました。



転機となった横浜サミット

私と国際組織との関わりは、2013 年 10 月末に横浜で開催された IDF ワールドデューリーサミットに遡ります。そのちょうど 1 年前の 2012 年 10 月、22 年ぶりとなる日本開催に向けて準備が進められている中、社内で声がかかり、サミット組織委員会の準備会合に参加するようになりました。当時の私はサミットのことも IDF のことも何もわかっておらず、着任してすぐに南アフリカのケープタウンで開催された 2012 年のサミットへ海外出張しました。そこで、酪農乳業界においてこのように大規模で華やかな国際イベントが毎年国を変えて開催されていることを知り、驚いたのを覚えています。

私が担当となったプログラム小委員会では、明治の小出常務（当時）が委員長を務められており、サミットの肝とも言える特別講演会についてプログラム全体の調整をしていました。出演者交渉のために単身で韓国 IDF を訪問した際、先方から「韓国でもサミットを開催したい」という相談を直接持ち掛けられ、図らずも国を挙げたイベントの橋渡し役となり、身震いもしました（その後、2018 年 10 月に韓国のテジョンで無事開催され、成功を見届けました）。

特に印象に残っているのはファーマーズディナーの企画に関わったことです。J ミルクの前田専務（当時）の発案で横浜港のディナークルーズを借り切り、小出氏の紹介によって船上アトラクションに「阿波踊り」を取り入れました。高円寺の東京葵連さんとは何度も打ち合わせを重ね、流れを綿密に練り上げ、ディナーの最後には屋外デッキで参加者が輪になって踊りました。私自身、海外の人々がとにかくダンスを楽しみ、屋外空間を好むという独特の文化を初めて実感しました。ダンスと屋外デッキ、そして祭囃子という日本らしい要素の組み合わせが参加者の心をつかみ、下船後も皆さんが小躍りしながら帰路についていたのが印象的でした。

このように準備を重ねて開催された横浜サミットは、これまでとは比べ物にならないほど多くの人々と一体感を共有することができ、私にとってかけがえのない経験となりました。それまでの自分の世界が大きく広がり、価値観や人生観まで変わる大きな転機でした。

二度目の転機となった J ミルクへの出向

横浜サミットが終了し、国際的な業務からしばらく離れ、その経験も良い思い出になりつつあった 2021 年 7 月、私は J ミルク国際グループへ出向となりました。グローバル・デューリー・プラットフォーム（GDP）との橋渡し役を担い、再び国際舞台に身を置くことになったのです。当時、酪農乳業は温室効果ガス（GHG）排出などの環境への影響に対する厳しい視線が向けられるようになっており、GDP の活動もサステナビリティの推進が活動の中心テーマとなっていました。SDGs と

という言葉は以前から見聞きしていたものの、実際に業務として関わることで、改めて身近なものとして実感するようになりました。

折しも新型コロナウイルスの世界的流行があり、海外渡航できたのは最後の1年くらいでしたが、それでもJミルクでの約3年間は、日本だけでなく世界の酪農乳業界全体を俯瞰し、バリューチェーンの各段階が抱える課題について、より高い視点と広い視野で考える貴重な機会となりました。また、酪農関係者、政府関係者、同業他社をはじめ、会社にいるだけでは出会えない多様な人々との交流を通して、利害関係を越えたフラットな人間関係を築くことができました。こうして得られた人脈は、私にとってかけがえのない財産であり、Jミルクで過ごした時間は人生の中でも極めて価値のある経験であったと感じています。

現在の役割と新たな挑戦

2024年4月に明治へ帰任してからは、海外食品法規を担当する部門に所属し、会社からの委員として引き続き、IDFおよびGDPの活動に関わっています。国際規格専門分科会では、食品の国際規格を統括するコーデックス委員会のうち、特にCCFA（食品添加物部会）とCCFL（食品表示部会）の動向について、IDFを通してフォローしています。食品法規という新たな守備範囲は、私にとってこれまで以上に未知への挑戦であり、日々是勉強です。一方で、国際的な活動を通して培ってきた広い視野やネットワークは、現在の業務にも大いに活かされていると感じています。

近年、GDPの活動は世界的な認知度を高め、酪農乳業界を取り巻く環境も、かつては環境負荷ばかりが取り上げられていた状況から変化しつつあります。現在では、GHG排出の議論に加え、栄養価値の高い食品を安定的に供給する産業として、世界的な食料安全保障への貢献が重要なテーマとなりつつあり、GDPもまた新たなステージへ向かおうとしています。そのような中、GDP特別委員については、前述の小出氏より引き継がせていただきました。小出氏は長年にわたってGDPとIDFの両面において、日本と世界の酪農乳業界をつなぐ重要な役割を果たされ、昨年、両団体から合同で特別表彰を受賞されました。そのような小出氏の後を引き継ぐのはプレッシャーですが、比較などしても仕方ありません。私は私なりの強みを生かし、自分らしいやり方で日本と世界をつなぐ架け橋としての役割を果たしていきたいと思います。

最後に、これまでの自分を振り返ってみて、気づいたことがあります。人も仕事もその場限りではなく、巡り巡って必ずどこかでつながっているということです。私自身、多くの人との出会いに支えられ、ここまで歩んでくることができました。いま振り返れば、人生を変えたのは仕事そのものではなく、その過程で出会った人々との縁だったように思います。もし海外の仕事に挑戦する機会が訪れたら、ぜひ臆することなく踏み出してみてください。その一歩が思いもよらない出会いや経験につながり、自分でも想像していなかった景色を見せてくれることでしょう。出会いを大切にすれば、未来は必ず拓けるものと信じています。



初めて参加した2012年のケープタウンサミット
背後にランドマークのテーブルマウンテンを望む



2013年の横浜サミットでのファーマーズディナー
「輪になって踊ろう」は世界共通言語であった

1. 国際委員会活動報告と主な国際情報提供

I 国際委員会実施報告

1) 国際委員会

① 2025 年度第 3 回国際委員会

日時：2026年2月19日（木）14:00-15:40

場所：御茶ノ水安田ビル4階ワイム D 会議室＋ウェブ（Zoom ハイブリッド形式）

議題：

（1）協議事項

- ① 2026年度国際関連事業計画（案）

（2）報告事項

- ① 専門分科会、小分科会の活動状況
- ② ISO/TC34/SC5国内審議委員会の活動状況
- ③ 国際委員会ニューズレター第10号発刊など
- ④ 2025年度日本の持続可能な酪農研究会の開催
- ⑤ 国際会議出席報告会の開催
- ⑥ 2026年度国際会議情報

上記の協議事項および報告事項について資料に基づく説明が行われ、異議なく了承されました。

② 2026 年度第 1 回国際委員会

日時：2026年6月1日（月）14:00-15:50

場所：御茶ノ水安田ビル4階ワイム D 会議室＋ウェブ（Zoom ハイブリッド形式）

議題：

（1）協議事項

- ① 2026年度国際委員会活動計画（案）

（2）報告事項

- ① 特定賛助会員の加入状況および国際関連事業負担金拠出 J ミルク正会員の状況
- ② 専門分科会委員の状況
- ③ IDF 常設委員会委員等の状況
- ④ 2026年度 ISO/TC34/SC5国内審議委員会活動
- ⑤ 「2025年度日本の持続可能な酪農研究会」開催結果および次回予告
- ⑥ IDF ワールドデューリーサミット2026

上記の協議事項および報告事項について資料に基づく説明が行われ、異議なく了承されました。

2) 分科会長・広報委員会議

① 2025 年度第 2 回分科会長・広報委員会議

日時：2026年3月9日（月）14:00-16:15

場所：御茶ノ水安田ビル5階 J ミルク B 会議室＋ウェブ（Zoom ハイブリッド形式）

議題：

（1）協議事項

- ① 専門分科会活動の概要報告について（広報委員）
- ② 海外文献翻訳・提供（案）について（事務局）
- ③ 2026年度国際情報勉強会（案）について（事務局）

（2）報告事項

- ① 国際委員会ニュースレター第10号発刊など（事務局）

（3）その他（各分科会からのご意見等）

上記の協議事項および報告事項について資料に基づく説明が行われ、異議なく了解されました。

上記（1）-①の各分科会での活動概要報告について、以下に紹介します。

経済市場専門分科会 （中野 貴史 広報委員）

IDF ワールドデリーサミット 2025

① 世界の酪農情勢 （松塚委員）

2034 年までのグローバル・マーケット（OECD：経済協力開発機構）：南アジアでの消費の中心は牛乳などの生鮮ものであるが、欧米諸国ではチーズなどの加工品となる。機械化、遺伝的改良、デジタル化などの技術的な発展が生産量を増やすが、環境や家畜福祉などが制約要因となる。GHG 排出低減に当たっては測定の公平性に課題がある。多くの測定機器や計算手法があるが、それらの整合性と透明性の向上が不可欠である。牛乳乳製品の不足と余剰を繋ぐ貿易の役割は重要。地域の需要に合致したプロダクトミックス（牛乳、粉乳、チーズ等）、生産性とサステナビリティへの投資、GHG 排出低減と排出測定の改善が強靱性の要となる。

8 つの消費者トレンド（IPSOS：仏調査会社）：世界 20~50 カ国の 2~5 万人が対象のインタビューをもとにとりまとめた 8 つの消費者トレンドを紹介した。(1) コミュニティ化、(2) 認証化、(3) 再ローカル化、(4) ノスタルジア、(5) 気候変動不安、(6) 価値訴求、(7) 安心とくつろぎ、(8) 変化するジェンダーの役割と Z 世代。

② 酪農政策と経済 （松塚委員）

経済強靱化と生乳生産システムの進展（IFCN：国際酪農比較ネットワーク）：酪農乳業界は 4 つのピースからなるパズルである。

- | | |
|----------|---|
| 〔酪農家〕 | コスト上昇、効率と持続性のバランス、需要に応じた生産 |
| 〔乳業者〕 | 供給の確保、輸出リスクと持続可能性、ハイエンドと機能性市場の需要 |
| 〔小売・消費者〕 | 持続可能性にかかるコスト、環境基準を満たす商品、変化する嗜好と高まるタンパク質需要 |
| 〔マーケット〕 | EU 市場： 環境への配慮、高品質、持続可能性（GHG、水、AW）への対応、トレーサビリティと透明性の向上
国際市場： 競争力・コスパ、サプライチェーンの生産性、品質の確保、市場と競合、相手の把握 |

これらの要素を持つ各ピースを組み合わせて、競争力と強靱性をともに築くパズルを完成させる。

酪農生産専門分科会（齋藤 淳 広報委員）

① IDF 農場管理常設委員会(SCFM) 2025 年 10 月 18 日開催（森田委員）

ISO モニタリング：搾乳機と搾乳方法に関する試験方法の 4 つの関連規格を統合した内容については、委員不参加のため報告なし。

IDF 農場管理ポッドキャスト：第 1 話（テーマ：農場の移行と継承）、2 話（テーマ：暑熱対策）に加え、第 3 話（テーマ：メタン）が 25 年 10 月 24 日に公開された。

酪農家ラウンドテーブル：2026 年のテーマ候補は「労働」で決定。

各国の報告（ラウンドテーブル）：米国：乳価下落と牛肉価格上昇。南部での新世界ラセンウジバエの影響。気候変動対策への資金拠出の減少・移民政策等の政治的圧力。NZ：10 年以上ぶりの乳牛価格の上昇と後継雌牛の不足が深刻化。後継者不足。GHG 排出に関連したインセンティブは地域間公平性への懸念。ドイツ：牛価格高騰。乳価高騰。ブルータング病。豪州：干ばつ傾向で飼料不足→舎外・部分放牧へ移行。ヨトウムシによる虫害。労働力不足と酪農家減少。南アフリカ：DESTINY モデルで口蹄疫対応。口蹄疫蔓延で輸出制限とコスト増加、検疫、ワクチンコスト等が課題。仏：気候変動への継続的な取り組み。遺伝、飼料、添加物、牛群管理によりメタン 50%削減を目指す。ブルータング病、ランピースキン病。英国：カーボンフットプリント測定方法の不一致から業界で調整中。オランダ：窒素・アンモニア規制危機。窒素規制 250kgN→170kgN/ha。生乳生産量は 10 年以内に 10%減少との長期予想。メキシコ：新世界ラセンウジバエの影響大きく深刻な脅威。米国との牛の移動制限。カナダ：コロナ禍後の移民流入により、牛乳乳製品の需要が増加。生産コストも上昇。イタリア：生乳生産が増加する一方で環境負荷は過去 30 年間で 30%減少。疾病蔓延。ノルウェー：40%は繋ぎ飼いだいが、2034 年から禁止予定。生産枠 20%引き上げ+乳価上昇。チリ：価格好調。灌漑設備の利用困難から水利用のリスク。スラリー規制により環境評価提出義務化。堆肥化による資源循環に期待だが EU 並みの厳格な規制に対する酪農家の懸念。日本：猛暑の影響。23 年に国が AW 飼養管理指針を施行。

② IDF 家畜の健康・福祉常設委員会(SCAHW) 2025 年 10 月 19 日開催（近藤分科会長）

ヨーネ病フォーラム：26 年 6 月にドイツ・ドレスデンで第 10 回フォーラムを開催予定。

アニマルヘルスレポート：「バイオセキュリティ」をテーマに 25 年 12 月発行。

センサーデータを活用した群管理と乳用牛の育種による家畜の健康と福祉の向上：SENSTAR working、Sensor data cleaning、PLF data for sustainable breeding programmes などのプレゼンテーション。

IDF 出版物の戦略と管理：IDF 出版物に関して、SPCC の作業グループが設立され、査読付き雑誌への出版を促進することでそれら雑誌との協力関係や学術への参加を強化する。

IDF Sheep, Goat and Non-bovine milk：26 年 2 月 9~11 日にインドのアーナンドで開催。

IDF Mastitis and Milking Technology Symposium 2026：26 年 3 月 11~13 日にスウェーデンのストックホルムで開催。

栄養健康専門分科会（小林 俊二郎 広報委員）

2025 年度第 2 回栄養健康専門分科会を 2026 年 1 月 27 日に開催した。議題としては、IDF ワールドデューリーサミット 2025 出席報告、IDF 栄養・健康常設委員会 (SCNH) の出席報告があった。本委員会では下記の 2 つの話題について報告する。

① 環境と栄養に関する議論について

- ・健康と環境の両面において持続可能性を両立させることを目的とした「protein transition（タンパク質の移行）」と呼ばれる、動物由来タンパク質の摂取を控え、植物由来タンパク質

の摂取を増やす流れが欧州を中心に広がっている。

- ・動物タンパク質の摂取を控え、植物タンパク質を摂取することを食事ガイドラインで推奨する国もある。
- ・これに関連する話題として、2019 年に「プラネタリーヘルスダイエット」を提唱して世界的に大きな反響があった EAT-Lancet 委員会より、昨年 10 月に新たな報告書 EAT-Lancet 2.0 が公表されたことが共有された。IDF では EAT-Lancet 2.0 の精査を進め、科学的反論を纏めているとのことであった。
- ・分科会では、極端な植物由来食品への偏りはカルシウムなどいくつかの栄養素の欠乏に繋がる懸念があることや、これらの考え方が日本にどのような影響を与えるかなどの議論があった。
- ・日本は「和食」を基本としており、動物と植物のバランスについても、北欧を含む欧米の国々と比べると、大きく心配する必要はないかもしれないという意見がある一方で、環境や持続可能性という観点からのみ捉えられている欧米の植物由来食品を推奨する考え方が、日本の消費者に対してさまざまな影響を及ぼす可能性も否定できないため、注意深く見守る必要があるとの意見があった。

② 学校給食に関わる内容について

- ・IDF より「学校給食プログラムにおける牛乳乳製品の経済性と栄養充足性の評価」のブリテンが昨年の 12 月に公表された。
- ・同報告書には、日本の学校給食に関する情報も掲載されており、常葉大学の野末先生（栄養健康専門分科会委員）が、89 施設の学校給食の献立を調査し、そのデータを元に算出した栄養素摂取量のデータを提供したこと、また報告書の表現の修正に多大な貢献をされたことが共有された。
- ・米国の給食に関する動きが共有された。米国では約 10 年前から、学校給食で提供される牛乳乳製品は無脂肪乳または 1%以下の低脂肪乳に限定されていた。しかし、昨年 11 月に「健康な子供のための全乳法案」（Whole Milk for Healthy Kids Act）が上下院で可決され、今年の 1 月 14 日に大統領が署名した。これにより、全脂肪牛乳が再び学校給食で提供可能になったとのこと。

乳業技術専門分科会 （白庄司 宣明 広報委員）

① チリ WDS 講演「ホエイ：新興市場と先進市場における付加価値の追加」（丸山 SCDSPT 委員）

- ・チリサミットでの加工技術に関する講演の報告。乳業副産物であるホエイを起点とした高付加価値化の先進事例として、① 微細藻類を用いたバイオマス転換技術と、② ブラジルにおける液体ホエイ飲料の社会実装事例が紹介された。
- ・微細藻類は高タンパク質（60~70%）かつ種々の栄養素を網羅する未利用バイオリソースであり、閉鎖型・垂直型培養により水・土地使用量や温室効果ガス排出を大幅に削減できる。乳業副産物、とりわけホエイ中の乳糖とミネラルを栄養源とすることで、タンパク質やオメガ3 脂肪酸等の機能性成分を効率的に生産することが可能である。Whey2blue プロジェクトでは、酸性条件下での培養順化や副産物組成に応じた培地設計に成功し、将来的な食品素材開発への展開が期待されている。
- ・ブラジルでは、年間 83 億 L に及ぶホエイを背景に、1990 年代の経済危機を契機としてホエイ飲料が普及し、現在では UHT 品や高タンパク質飲料を含む多様な乳飲料市場を形成している。特に Z 世代において「ホエイ」自体がポジティブな価値として認識されており、世代特性を踏まえた商品開発が乳業の競争力強化につながることを示唆された。両講演を通して、酪農

は環境・栄養・社会課題の解決手段となり得るという共通の視座が示された。

- ・ 専門部会発表後の質疑では、ブラジルの Z 世代のホエイ嗜好は国内の経済危機による影響であり、必ずしもタンパク質訴求ではない点が確認された。また、藻類培養では低 pH は生育に厳しい条件であり、順化技術の意義や、酸パーミエイト利用、遺伝子改変を含む精密発酵的手法による機能成分標的化が議論された。

② チリ WDS「気候変動への適応と酪農乳業の未来」(遠藤 SCENV 委員)

- ・ サミットでの環境に関する講演の報告。酪農乳業分野における気候変動対応とネイチャーポジティブ生産ならびに温室効果ガス削減に向けた国際的な取り組みが多角的に紹介された。
- ・ WWFからは、食料システムが地球環境に与える負荷の大きさを示した上で、酪農乳業は世界人口の約 8 割が利用する重要産業である一方、温室効果ガス排出や水利用、ホエイ廃棄による環境リスクを抱えていることが示された。これに対し、自然生態系の回復と経済性向上を両立する「ネイチャーポジティブ農業」への移行は、収益面でも有効であるとされた。
- ・ 気候変動リスクについては、世界の牛の約 77%が熱ストレスにさらされ、生乳生産量の減少が予測されていることが報告された。耐熱種の導入や飼養管理改善などの適応策は不可欠であるとされたが、コストや限界も指摘された。
- ・ オーストラリアおよびネスレ・チリの事例では、地域特性に応じたリスク評価、再生農業の導入、土壌保全や植林などの生産性と環境配慮を両立する実践が紹介された。
- ・ 低排出酪農では生産量当たりの排出削減が鍵で、飼料添加物、遺伝的選抜、ワクチンなどの多様なメタン削減技術が検討されているが、飼養形態や副次的影響を考慮した慎重な導入が必要とされた。
- ・ 専門部会では、ネイチャーポジティブ農業は資源循環や生物多様性を重視する再生農業と整理され、日本でも実行可能との認識が示された。また、メタン削減技術は生産性への影響は限定的とされる一方で、将来の生乳需給や微生物制御への負の影響も留意が必要との指摘があった。

分析技術・衛生専門分科会 (久保田 哲夫 広報委員)

① IDF 試験室統計・品質保証常設委員会 (横田 SCLSQA 委員)

- ・ 「S18 乳一体細胞数の測定法ーパート 2: フローサイトメトリー法」の改訂について、ほぼすべての編集上および技術上のコメントが受理された。常設委員会会議中の議論により、ヤギ乳中の体細胞は牛乳中の体細胞に比べてはるかに小さく、細胞質粒子のような細胞物質が加わるとノイズが増える可能性があることを第 10 章に導入する方針となった。過去の検討データをもとに、標準に記載する併行精度および室内再現精度の標準偏差の案が提出され、承認された。
- ・ 新規取り組みとして「S21 MIR パラメーターの使用に関するガイドラインの改訂」、「S22 生物検査の比較を改善する戦略 (CFU vs IBC)」が提案され、承認された。S22 では、CFU-IBC 間の換算方法が国や地域によって異なることに課題があるため、解決策をフォローアップする目的でプロジェクトが開始されることとなった。これらの国際動向は規制にも関係する内容のため、注視していきたい。

② IDF 成分分析法常設委員会 (大野 SCAMC 委員)

- ・ 「C57 乳・乳製品ーラクトフェリンの定量」について、2 つの分析法を候補としていたが、AOAC 2021.10 (ヘパリン法)を採用することとなった。また、ヘパリン法は加水分解物の検出に問題があるため、AOAC は 2026 年に本法のさらなる最適化をすることを予定している。
- ・ 「C58 乳製品ー成分分析のための試料調製に関するガイドライン」について、2026 年の規格

発行を目指している。試料調製に関する内容を含む規格も複数存在することから、既存の規格との調和について検討しているとのことであった。今後の動向に注視したい。

- ・ 前回の SCAMC 会議（4 月）から進展の見られないプロジェクトも多く、全体的に専門家が不足しているような印象を受けた。プロジェクトを完遂することの難しさを感じた。

③ IDF 食品添加物・汚染物質分析法常設委員会（坪井 SCAMAC 委員）

- ・ 「A22 硝酸塩の定量および濃度に関するコーデックス委員会へのインプット」では、提案された亜硝酸イオンの基準値が非常に低く、基準値を満たす方法が特定できない。そのため、2026 年 4 月の会議では、現状の非常に厳しい低濃度の基準値を採用して分析方法の開発を進めるか、利用可能な方法に合わせるために基準値（残留基準値の上方修正）を改訂するか、の議論がされると説明があった。今後の動向に注視したい。
- ・ 新規取り組みとして「試験方法の「バリデーション」要件におけるギャップ（分析対象物質が非特異的な場合の選択に関するファクトシート作成）」の説明があった。分析法の検証ガイドラインには、他の潜在的な妨害物質に対する特異性（選択性）を有することが求められている。一方、他の化合物による干渉を受ける可能性がある非特異的分析は、誤って測定対象物質が存在するとみなしてしまう「偽陽性」の結果を招く可能性がある。例として、ホウ素は防腐剤としてのホウ酸使用の指標だが、牛乳自体に元々ホウ素が含まれているようなケースが該当する。このような誤った判断が生じないように、試験方法のバリデーションに関するファクトシートを作成することを目的とした活動を開始する。

④ IDF 残留物質・化学汚染物質常設委員会（久保田 SCRCC 委員）

- ・ 乳・乳製品に関連する新たなハザードに関する情報の監視と報告（円卓会議）では、今回は全ての参加国から広く情報収集するのではなく、特定国（フランス、スイス、カナダ）より国内状況の詳細について説明があった。
- ・ 化学汚染物質に関するナレッジプラットフォームと酪農場から加工までの新興リスクの積極的な管理に関するガイダンスについて進捗報告された。SCRCC では合計 6 化合物（メタン削減添加剤、有機酸、ミネラルオイル炭化水素（mineral oil hydrocarbons: MOH）、第四級アンモニウム化合物（QAC）、PFAS、マイコトキシン）を課題と捉え、解決に向けて進捗させている。新興化学汚染物質リスクに新規追加の化学物質はなかった。

微生物・衛生専門分科会（渡邊 正行 広報委員）

① IDF ワールドデューリーサミット2025

「セッション13B 食品安全：対応に代わる予防」において、デンマークから報告があった。1995 年に乳からアフラトキシン M1 が検出され、飼料供給業者、政府、酪農関係者が一堂に会して解決策を協議し、飼料供給業者に透明性の高い監視プログラムの実施などが義務付けられた。この取り組みにより、年間数千件あった規格値を超えるサンプルが、年間200件程度まで減少し、「確認のための検査」から「実施しているマネジメントシステムの検証」へと段階が移行したということで、30 年にわたる予防投資と産官学の協力が、事後対応コストを回避し、強固な食品安全基盤を築く実証例であった。

② IDF 食品衛生常設委員会（SCFH）

2025年10月に開催されたワールドデューリーサミットのビジネスミーティングとして10月17日に開催された。食品への使用履歴を記録した微生物リストについて、第5版となるブリテンの更新作業では500以上の新しい菌種の登録を行っている。ブリテンには ISO27205で提案されている食品発酵を組み入れる。また、従来の食品発酵プロセスと合成微生物（いわゆる精密発酵）で使用される菌

種の違いを再確認する章を追加する。

③ IDF 酪農微生物学的手法常設委員会 (SCMDM)

2025年11月5日に開催された。プロバイオティクスの生菌数測定法は主に培養法（単位はCFU）が用いられているが、より簡便に実施できるフローサイトメトリー法（単位はAFU）との相関に関するプロジェクトの進捗報告があった。最終目標はIDF広報の発刊である。2025年9月にプロジェクトリーダーのスー・ヤオ氏が中国で開催した「AFUとCFUの相関性研究および標準化探索技術セミナー」の様子が紹介された。本セミナーでは、中国の乳業会社や分析会社などから発表があり、比較データおよびフローサイトメトリー法の課題について発表された。今後、フローサイトメトリー法を広く導入するには、培養法とのさらなる比較データや妥当性の確認が必要であることが認識された。純粋な菌サンプル（フレッシュな菌、凍結乾燥処理した菌）および食品中の菌の加速試験サンプルを用いてフローサイトメトリー法と培養法で測定し、結果を比較する。

国際規格専門分科会（小松 恵徳 広報委員）

① IDF ビジネス会議

IDFはコーデックスGSUDT牛乳乳製品用語の使用に関する一般規格を拠り所とする牛乳乳製品用語の保護に力を入れている。GSUDTについて解説するIDFブリテンの第5次改訂、各国におけるGSUDTの活用についての調査準備、ISOなどの国際規格（案）がGSUDTに抵触していないかの監視を行っている。IDF食品規格・表示常設委員会では日本で上市されている「あたらしいミルク」と容器前面に表示した酵母飲料製品「LIKE MILK」を紹介した。

国際規格専門分科会では、委員から農水省・消費者庁からのオブザーバーに対して、カタカナ表記の非乳系の「ミルク」や「ヨーグルト」に対してGSUDTの考えを当てはめていくような方向かとの質問があり、農水省からは、いまのところ議論になっていない旨、将来的な課題や業界の考えも聴きながら進めたい旨の回答があった。JIDF事務局からは、乳等命令における乳の定義が基本だが、GSUDTの定義と異なるので難しい旨のコメントがあった。

IDFでは食品添加物常設委員会を解散し、食品規格・表示常設委員会内の専門アクションチームを設けて食品添加物関連の主要業務を引き継がれた。

② IDF ワールドデューリーサミット2025

ワールドデューリーサミット2025の規格セッションでもGSUDTに関する講演が行なわれた。その中で、環境に良い食品を推奨するアプリについて、豪州ではヨーグルト製品のバーコードにスマホをかざすと、自動的に植物ベースヨーグルトの方が「環境に良い」旨の推奨をするとの説明があった。環境アプリについてバーコード読取りで表示されるものが各種出ているようである。

例えば、ecoSwitchは包装食品の地球の健康への影響の評価を示すととともに、地球への害が少なく、地球健康評価に基づく少なくとも健康的な代替品を特定する。起源国情報やNOVA分類による加工度の情報、持続可能性強調表示のような持続可能性情報とともに健康栄養情報などをワンクリックで示す。

持続可能性表示については、コーデックス食品表示部会でも議論されたが、評価基準を定めるのが難しいので、とりあえず検討は棚上げとなった。

コーデックス栄養・特殊用途食品専門小分科会（高橋 啓次 広報委員）

次回コーデックス栄養・特殊用途食品部会 (CCNFSDU) の開催予定

- ・ CCNFSDU45は、2026年11月2日～6日にニュルンベルク（ドイツ）で開催予定。
- ・ 想定される主な議題：後期乳児と年少幼児用食品の規格に関する新規作業、6～36カ月齢NRVs-

R（栄養所要量）策定、添加物の技術的妥当性、新規作業提案のレビューと優先順位付け、CXS234 の分析方法。

6~36カ月齢 NRVs-R 策定：協議文書 Consultation Paper 2（CP2）に対する政府意見の確認

- ・ CCNFSDU では 6~36 カ月齢 NRVs-R を策定中。EWG から出された CP2 では、各 RASBs（Recognized Authoritative Scientific Bodies：認められた権威ある科学機関）の基準値（日本人の食事摂取基準（2020 年版）含む）を用い、規定プロセスに基づいて議論中の 10 栄養素（VC、VK、VB12、葉酸、Mg、Fe、Se、Mn および P）の値を提案。
- ・ 11/6 に農水省から日本政府コメント案の事前共有が当分科会にあり（内容：日本人の食事摂取基準（2020 年版）の引用値の誤りを修正、その他提案値に異論なし）。
- ・ 各社から異論のない旨を確認、当分科会として農水省に回答。

新規作業提案：回覧文書 Circular letter CL 2025/77-NFSDU

- ・ 12/1 に農水省から依頼：新規作業および新たに発生した問題に関する提案。
- ・ 当分科会からは特に提案なし。

添加物の技術的妥当性：第一次質問状

- ・ CCNFSDU では Infant Formula 用添加物の技術的正当性の評価を進行中。EWG から出された質問状では、以下添加物の使用有無および使用量、12 週未満の乳児に対する安全性評価データの提供意思を確認：乳酸（L-、D-、DL-）（INS 270）、レシチン（INS 322i）、クエン酸およびクエン酸塩（INS 330、331(i)、331(iii)、332(i)、332(ii))、モノおよびジグリセリド脂肪酸（INS 471）、メタクリレートコポリマー、ベーク（BMC）（INS 1205）
- ・ 12/26 に農水省から回答提出の依頼が当分科会にあり。
- ・ 各社回答を集約、当分科会として農水省に回答。これが政府意見として採用された。
- ・ 使用状況を回答。クエン酸について質問記入：配合する一般乳原料（例：カゼイン（CXS 290-1995））で助剤として使用される分（キャリアオーバーとして）も対象か。

② 2026 年度第 1 回分科会長・広報委員会（予定）

2026 年 10 月 7 日に開催する予定です。

3）国際組織活動連絡会議

① 第 21 回 GDP 日本会員連絡会議

日時：2026年7月14日（火）15:00-17:30

場所：御茶ノ水安田ビル4階ワイム B 会議室＋ウェブ（Zoom ハイブリッド形式）

議題：

- （1）開会挨拶、新メンバー/参加者挨拶
- （2）第20回会議以降の GDP・DSF 関連情報の整理
- （3）GDP 理事会（4/22）の報告
- （4）GDP 運営委員会（3/10-11、5/18）、科学ワーキンググループの報告
- （5）GDP-IMP グローバルコミュニケーション会議（5/10-5/13）の報告

上記議題（2）～（5）について、資料に基づく情報共有をするとともに、意見交換が行われました。

Ⅱ 専門分科会活動報告

1) コーデックス関連活動

① 2026 年度第 1 回国際規格専門分科会

日時：2026年9月9日（水）14:00-15:40（予定）

場所：御茶ノ水安田ビル5階 J ミルク B 会議室＋ウェブ（Zoom ハイブリッド形式）

議題：

- （1）第56回コーデックス食品添加物部会（CCFA）出席報告
- （2）IDF 規格・表示常設委員会（SCSIL）出席報告
- （3）その他（IDF ワールドデューリーサミット2026の情報、他）

2) 持続可能性関連活動

① 2026 年度第 1 回酪農生産専門分科会

日時：2026 年 8 月 7 日（金）15:00-17:00

場所：御茶ノ水安田ビル5階 J ミルク B 会議室＋ウェブ（Zoom ハイブリッド形式）

議題：

- （1）IDF ワールドデューリーサミット2025出席報告
- （2）IDF 乳業科学・加工技術常設委員会会議出席報告
- （3）IDF 環境常設委員会会議出席報告
- （4）その他（IDF ワールドデューリーサミット2026開催概要、他）

② 2026 年度第 1 回経済市場専門分科会

日時：2026 年 8 月 19 日（水）14:00-17:00

場所：御茶ノ水安田ビル5階 J ミルク B 会議室＋ウェブ（Zoom ハイブリッド形式）

議題：

- （1）IDF 酪農政策・経済常設委員会（SCDPE）出席報告
- （2）IDF マーケティング常設委員会（SCM）出席報告
- （3）GDP-IMP 会議出席報告
- （4）その他（IDF ワールドデューリーサミット2026の情報、他）

③ 2026 年度第 1 回乳業技術専門分科会

日時：2026年8月25日（火）14:00-15:40

場所：御茶ノ水安田ビル5階 J ミルク B 会議室＋ウェブ（Zoom ハイブリッド形式）

議題：

- （1）IDF 乳業科学・加工技術常設委員会（SCDSPT）出席報告
- （2）IDF 環境常設委員会（SCENV）出席報告＋直近の環境情報
- （3）その他（IDF ワールドデューリーサミット2026の情報、他）

④ 2026 年度第 1 回栄養健康専門分科会

日時：2026 年 9 月 15 日（火）14:00-16:00（予定）

場所：御茶ノ水安田ビル5階 J ミルク B 会議室＋ウェブ（Zoom ハイブリッド形式）

議題：

- （1）IDF 栄養健康シンポジウム2026出席報告

- (2) IDF 栄養・健康常設委員会 (SCNH) 出席報告
- (3) その他 (IDF ファクトシート、IDF ワールドデューリーサミット2026の情報、他)

3) IDF/ISO 分析法関連活動

① 2026 年度第 1 回分析技術・衛生専門分科会

日時: 2026 年 8 月 26 日 (水) 14:00-17:00

場所: 御茶ノ水安田ビル 4 階ワイム会議室 B+ウェブ (Zoom ハイブリッド形式)

議題:

- (1) IDF 分析ウィーク2026シンポジウム出席報告
- (2) IDF 試験室統計・品質保証常設委員会 (SCLSQ) 出席報告
- (3) IDF 成分分析法常設委員会 (SCAMC) 出席報告
- (4) IDF 食品添加物・汚染物質分析法常設委員会 (SCAMAC) 出席報告
- (5) IDF 残留物質・化学汚染物質常設委員会 (SCRCC) 出席報告
- (6) その他 (IDF ワールドデューリーサミット2026の情報、他)

② 2026 年度第 1 回微生物・衛生専門分科会

日時: 2026 年 9 月 2 日 (水) 14:00-16:00 (予定)

場所: 御茶ノ水安田ビル 5 階 J ミルク B 会議室+ウェブ (Zoom ハイブリッド形式)

議題:

- (1) IDF 分析ウィーク2026シンポジウム出席報告
- (2) IDF 酪農微生物学的手法常設委員会 (SCMDM) 出席報告
- (3) IDF 食品衛生常設委員会 (SCFH) 出席報告
- (4) その他 (IDF ワールドデューリーサミット2026の情報、他)

III ISO/TC34/SC5 国内審議委員会活動報告

① ISO/TC34/SC5 国内審議委員会委員構成

ISO/TC34/SC5 国内審議委員会委員は、(2026 年 2 月 27 日発行第 10 号) でお知らせした以降に 2 名の交代 (渡邊正行氏→上西寛司氏 (雪印メグミルク)、神田真軌氏→酒井奈穂子氏 (東京都健康安全研究センター)) があり、2026 年 7 月 31 日時点で次のとおりとなっています。

ISO/TC34/SC5 国内審議委員会委員名簿 (敬称略)		
	氏 名	所 属 機 関
委員長	五十君 静信	東京農業大学 食品安全研究センター長/総合研究所教授
副委員長	岡田 由美子	国立医薬品食品衛生研究所 食品衛生管理部 第三室長
副委員長	渡邊 敬浩	国立医薬品食品衛生研究所 安全情報部 第一室長
委 員	上西 寛司	雪印メグミルク (株) ミルクサイエンス研究所 課長
同	久保田 哲夫	森永乳業 (株) 生産本部 品質管理部 マネージャー
同	酒井 奈穂子	東京都健康安全研究センター 食品化学部 食品成分研究科 統括課長代理

同	佐々木 進	公益財団法人日本乳業技術協会 事業部 課長
同	下島 優香子	東洋大学 食環境科学部 教授
同	竹内 幸成	(株) 明治 研究本部 衛生微生物研究ユニット 検査品質保証 G 長
同	山口 菜美	農林水産省畜産局牛乳乳製品課 畜産専門官

② ISO/TC34/SC5 質問状の回答（投票）

ISO/TC34/SC5 国内審議委員会の主たる活動は、ISO 事務局より発行される ISO/IDF 合同分析法に関わる質問状に対する回答（投票）です。同委員会は、質問状の内容に応じて諮問委員会である分析技術・衛生専門分科会と微生物・衛生専門分科会に意見（回答）をそれぞれ求め、提出された意見（回答）をもとに委員会としての回答を作成し、ISO に投票しています。

2026 年 7 月 31 日時点で、ISO が発行した 2026 年度（2026 年 4 月 1 日～2027 年 3 月 31 日）内に投票期限のある ISO/TC34/SC5 質問状（計 20 件（ISO/TC336 の 1 件（下記 CD）を含む））に対しての投票状況は次のとおりです。これら質問状の ISO/IDF 分析番号や分析法名は本誌「V ISO（乳・乳製品）関連」（88～91 ページ）をご参照ください。

質問状カテゴリー	質問状数	投票済	分析技術・衛生 専門分科会	微生物・衛生 専門分科会
新規活動（NP）	2	2	1	1
作業原案（WD）	0	0	0	0
委員会原案（CD）	2 ^{*1}	1	2	1
規格原案（DIS/DTS）	3 ^{*2}	1 ^{*3}	3 ^{*3}	0
最終規格案（FDIS）	0	0	0	0
定期見直し（SR）	13	4 ^{*4}	11 ^{*4}	2
合計	20	8	17	4

^{*1} 1 件は ISO/TC336（Laboratory design）における乳製品に係るラボラトリー要件の質問

^{*2} IDF においても質問状 0326/SCAMAC、0426/SCLSQLA および 0526/SCLSQLA として発行

^{*3} 2 件未投票（投票期限：9 月 7 日と 8 日、2 件とも分析技術・衛生専門分科会分野）

^{*4} 9 件未投票（投票期限：9 月 2 日と 12 月 2 日、9 件とも分析技術・衛生専門分科会分野）

IV 日本の持続可能な酪農研究会の実施報告

J ミルクでは、日本の持続可能な酪農の取り組みを加速するための活動の 1 つとして、2023 年度より「日本の持続可能な酪農研究会」を年 1 回開催しています。2025 年度には、3 回目となる「2025 年度 日本の持続可能な酪農研究会」を、「国内外の“サステナ”を知り現場での実践につなげるために」をテーマとして実施しました。

① 2025年度 日本の持続可能な酪農研究会

開催日： 2026 年 3 月 2 日（月）10:30-19:00（交流会を含む）

開催地： アルカディア市ヶ谷（私学会館）＋ウェブ（Zoom ハイブリッド形式）

参加者： 250 名以上（登壇者 9 名、J ミルク 17 名を含む）

所属	会場参加	オンライン申込	オンデマンド希望
酪農乳業関係団体	18	26	10
酪農生産者	7	7	4
乳業企業	32	69	17
畜産関係団体・企業	5	6	8
大学・研究機関	9	14	5
行政関係者	10	14	5
報道関係者	7	4	2
その他	6	11	5
小計	94	151	56

「搾乳の自動化と酪農の未来」

講演

森田 茂 氏（酪農学園大学 教授）

2025 年 10 月にサンティアゴ（チリ）で開催された IDF ワールドデューリーサミット 2025 の内容を含めながら、搾乳ロボットや生成 AI に関する情報を紹介した。

現在、日本国内では約 1,600 台の搾乳ロボットが導入されている。自動搾乳は、労働時間の削減だけでなく、生活の質の向上にもつながっており、大量のデータも取得できる。近年は、酪農経営への AI の導入が進み、疾病リスクの予測や飼養管理の最適化など、より高度な意思決定に役立っている。ChatGPT や Gemini などは、酪農家が日常的に使える「普段使いの AI」であり、データ分析や飼養管理のアドバイスを得ることができる相談相手として活用できる。

「Animal Welfare に関する国際的な状況－IDF サミット 2025 から」

講演

近藤 誠司 氏（北海道大学 名誉教授）

IDF ワールドデューリーサミット 2025 を通して明らかになったアニマルウェルフェアの国際的動向について報告した。

各国で進展状況に差が見られる。カナダでは科学的根拠と透明性に基づく評価制度が整備されているが、一方で消費者との認識ギャップが課題としてある。イスラエルでは、法制度に基づく具体的な飼養改善が進められている。アニマルウェルフェアは、家畜の健康だけでなく、人の健康や環境とも関係する「ワンヘルス」の観点から、その重要性が増している。

「飼料自給構造の国際比較－IFCN データが示す持続可能性の視点」

講演

日向 貴久 氏（酪農学園大学 教授）

世界 100 カ国以上の研究者が参加し、各国の酪農経営データを収集・共有して国際比較分析等を行う IFCN の活動について報告した。また、オランダでの現地調査から、複数回刈り取った牧草を層状に重ねて発酵させるラザニアサイレージによる飼料の安定確保、副産物を活用した循環型飼料体系、インセンティブ乳価制度、環境規制対応型の持続モデルなどについて紹介した。

コロナ禍や紛争といった外的ショック下においても酪農生産が維持されているのは、酪農の高い強靱性を示している。一方、世界的には生乳生産は少数の大規模経営に集中する傾向があり、供給の脆弱性がある。近年は、気候変動や環境規制、資材価格の高騰によって EU などの従来の生乳供給地域では生産生産の伸びが鈍化しており、将来的な国際需給のひっ迫が懸念されている。生乳生産コストの面では、日本は高コスト構造であり、価格競争による国

際競争力の確保は困難である。

日本の酪農が目指すべき方向性として、飼料で重視すべきは「自給率」だけでなく「国産率」であること、飼料・技術・販売をつなぐ中間支援組織の強化が必要であること、環境対策をコストから収入に変える制度設計が必要であることの3点が重要である。

「“サステナ”で変わる世界の酪農乳業～GDPの取り組みと日本へのメッセージ」

報告

木ノ内 俊 氏 (Jミルク)

Jミルクの7つのマテリアリティのうちの、GHG、飼養管理、労働条件の進捗状況について説明するとともに、2025年8月に開催したドナルド・ムーア氏（GDP）の講演会の内容を紹介した。

GDP「ファクト一覧」では、牛乳乳製品はカルシウムやタンパク質などの主要な供給源であり、食品が十分にありながらビタミンやミネラルが不足している「隠れた飢餓」にも役立つことなどがまとめられている。

酪農でのGHG排出量の8割は途上国由来で、日本を含む個体乳量が高い国ではGHG排出強度が十分に低いが、それでも対応の取り組みが必要となっている。アーラ・フーズやフォンテラなどでは、持続可能性の取り組みの実績を数値化して酪農生産者にインセンティブを与えるプロジェクトをそれぞれ推進している。

日本の酪農乳業界には、マテリアリティの取り組みの一層の推進、GHG削減の取り組みでは酪農生産者の収益を損なわない仕組みづくり、バリューチェーン全体での連携強化、酪農乳業や乳の価値・魅力を業界内外に広く発信すること、などを期待している。

「IDF酪農家円卓会議（2025）」

報告

栗原 丈治 氏 (Jミルク)

2025年10月にチリで開催されたIDF酪農家円卓会議の内容を報告した。

水、メタン削減、経営継承の3つのテーマについて議論があった。水については、気候変動によって乾燥地域が拡大する中で限られた水資源を最大活用することが必要になっていること、社会からの批判に対して水質検査やモニタリングなどによる証明が必要になっていることなど、メタン削減については、消費者から常に対策や改善を求められる一方で費用は酪農生産者の負担となっていることなど、経営継承については、第三者への継承も含めた計画的な対応が必要であることなどが議論された。

チリの酪農場への技術視察に関しては、水資源が乏しい地域においても、下水処理水を牛舎等の洗浄から耕作地への灌漑水として再利用することで、大規模かつ持続可能な酪農経営が実現されている事例を紹介した。また、佐藤衛保氏（酪農家 北海道）が現地参加したことについて感想を述べた。

「酪農を持続可能に～Meiji Dairy Advisoryによる経営支援～」

事例紹介

木村 康行 氏 ((株)明治)

同社が推進する持続可能な酪農経営支援プログラム「MDA (Meiji Dairy Advisory)」の取り組みについて紹介した。

日本の酪農は、後継者不足や働き手不足などの様々な問題によって酪農経営の持続可能性が課題となっている。MDAは、酪農現場の人材マネジメントに焦点を当てながら人の成長を支援する活動である。現在は全国で68戸の酪農場の方々と取り組んでおり、同社の専門スタッフが現場を直接見たり聞いたりしながら酪農生産者と共に課題の改善策を考えている。酪農

経営の課題解決の鍵は「人」であり、働く人の問題解決力が向上し、酪農場に自ら改善を続ける文化が根付くことが必要である。今後も、酪農場に寄り添いながら活動が続けていく。

「酪農場から進める GHG 削減への道～GHG 算定シートを活用した排出源の見える化～」

事例紹介

内藤 健憲 氏（森永乳業（株））

酪農場における温室効果ガス（GHG）削減のための「見える化」の重要性について紹介した。

気候変動は酪農生産やコストに影響を及ぼしており、対応が急務となっている。日本は 2050 年カーボンニュートラルを掲げており、酪農業界も対応が求められている。同社の場合、サプライチェーン上の CO₂ 総排出量のうち、酪農場など自社以外から排出されるスコープ 3 が 89%を占めており、そのうち 57%が生乳生産に起因している。酪農場での GHG 削減は身近にあり、例えば個体乳量を増やすことで、生乳 1kg あたりの GHG 排出量は低減される。日本では、乳牛頭数減少の中でも個体乳量増加によって GHG 削減が既に進んでいる可能性がある。また、糞尿処理方法を堆積発酵から強制発酵に変えるだけで、75%以上の削減が可能になる。生乳 1kg 当たりの排出量などは、農林水産省が提供する GHG 簡易算定シートを用いることで算出することができる。

GHG 排出量の「見える化」を行わないリスクとしては、GHG 削減に取り組んでいないと思われる、生乳生産の GHG 削減が進まない、酪農乳業界のコスト負担、などが挙げられる。「見える化」を行うメリットとしては、環境改善に貢献していることを実感して仕事の誇りに繋がる、データを示すことができれば酪農への信頼やイメージ向上に繋がる、ミルクサプライチェーン全体の GHG 削減になって需要の維持拡大に役立つ、といったことが考えられる。

「リジェネラティブな酪農」とは～北海道の事例より～」

事例紹介

越智 成東 氏（雪印メグミルク（株））

「リジェネラティブな酪農」の概念とその実践事例について紹介した。

同社が目指すリジェネラティブな酪農とは、環境再生、資源循環、地域共生を重視する持続可能な酪農モデルであり、食の持続性の実現に向けた解決策の 1 つとなる。北海道の馬場牧場では、放牧への転換や化学肥料に依存しない土壌管理、土壌エアレーション（固結土壌を粉砕して通気性や排水性を改善する技術）に取り組んでいる。放牧に転換したことで労働時間が減り、学びや交流の機会が増えた。GHG 削減については、2023 年にカシューナッツ殻液を使用したルミナツプ P の効果検証を行い、サーモニメタン CO₂ プラス（メタンと CO₂ の同時測定が可能な簡易システム）を用いての測定を実施した。酪農場においても環境負荷低減の取り組みを進めようとしており、まず現場でどの程度 GHG が排出されているかを把握するために米オルテック社のツール「E-CO₂」の活用に向けた調整を進めている。

リジェネラティブな酪農において最も重要なのは「人」であり、学びや交流を通して知見を共有し、現場に笑顔を生み出し、繋いでいくことが重要である。

「良質な牛乳と高い生産力を生み出す酪農経営に向けて」

事例紹介

丸山 純 氏（酪農家 朝霧メイプルファーム）

クレド（信条や行動指針を示す概念）を軸とする経営実践と生成 AI の活用について紹介した。

同酪農場では、経営理念とともに従業員の行動指針であるクレドを定めており、「牛乳は愛」、「酪農は楽しい」、「朝霧高原が好き」という 3 つの価値観を掲げている。牛本位の経営を重視し、牛のためにならないルールは作らないという価値観が現場の行動指針となっている。クレドは採用や評価制度にも反映され、価値観に共感する人材の確保や、評価の透明性向上にも寄与している。さらに、Gemini（生成 AI）を積極的に活用し、従業員全員が日常的に利用している。日々蓄積したデータを Gemini に提示することで、データに基づく分析とアドバイスが可能となっている。一方で、生成 AI の活用には、長期的なデータ蓄積、現場での観察力、明確な目的設定、判断の検証能力が必要である。AI やデータはあくまで手段であり、根底にある牛に対する愛情や情熱といった価値観が働き方の質を高める要因である。

「J ミルクにおけるアニマルウェルフェアへの取り組み」

報告

関 芳和 氏（J ミルク）

J ミルクは、昨年度改訂した戦略ビジョンにおいて日本の酪農乳業におけるマテリアリティを 7 項目設定した。その 1 つとして掲げた「アニマルウェルフェアに配慮した飼養管理」においては、取り組みを酪農乳業関係者全体で推進し、生産性の向上と、安全で信頼される牛乳乳製品の供給を図るために、「酪農乳業アニマルウェルフェアポリシー」を制定した。本ポリシーに関しては、正会員等の協力やウェブサイトでの呼び掛けにより、酪農乳業関係の団体や企業に対してパートナーシップの協力を依頼している。団体や企業とのパートナーシップ構築に基づいて関係者全体で取り組みを進めるとともに、消費者や流通関係者との対話を通してより良いアニマルウェルフェアの実現を目指していく。

「「海外」の取り組みから“サステナ”を知り酪農現場での実践につなげる」

パネルディスカッション

司会：生源寺 眞一 氏（東京大学 福島大学 名誉教授）

森田 茂 氏（酪農学園大学 教授）

近藤 誠司 氏（北海道大学 名誉教授）

日向 貴久 氏（酪農学園大学 教授）

日本の酪農の持続可能性をめぐり、AI やデータの活用、アニマルウェルフェア、飼料効率と付加価値などの観点から、海外の情報がどのように活かせるかについて議論が行われた。

オンライン参加の青沼光氏（酪農家 富山）が、経済、人材、資材などの制約の中で少しずつ積み上げていく地道な取り組みが必要であるとコメントした。また、酪農は生産だけでなく、資源循環や地域、教育、福祉との連携など多面的な価値を持っており、社会課題の解決に貢献できる可能性があるとした。AI などの技術も活用しつつ、酪農を社会に必要とされる産業として発展させる必要性があるとも述べた。

「「国内」の取り組みから“サステナ”を知り酪農現場での実践につなげる」

パネルディスカッション

司会：清水池 義治 氏（北海道大学 准教授）

木村 康行 氏（（株）明治）

内藤 健憲 氏（森永乳業（株））

越智 成東 氏（雪印メグミルク（株））

丸山 純 氏（酪農家 朝霧メイプルファーム）

日本の持続可能な酪農の実現に向け、経営改善、環境対応、人材育成などの観点から多面的な議論が行われた。労働環境や育児環境に関する課題についても議論された。

五味英介氏（酪農家 長野）が、酪農体験の参加者からアニマルウェルフェアに関する通報を受ける事例が出始めていることをコメントした。

オンデマンド配信は、[こちらをクリック](#)

② 2026 年度 日本の持続可能な酪農研究会

2027 年 3 月 1 日（月）に、4 回目となる「2026 年度 日本の持続可能な酪農研究会」をアルカディア市ヶ谷（私学会館）にて開催する予定です。

V 国際情報提供

① 国際委員会定期刊行物

国際委員会では、本誌「J ミルク国際委員会ニュースレター」のほか、「[国際酪農連盟年次報告](#)」、「FAO/WHO 合同食品規格計画 CODEX 栄養・特殊用途食品部会会議 会議資料・報告書」、「[国際会議出席報告書](#)」、「世界の酪農情況」などの定期刊行物を発行しています。

② 国際 Dairy レポート

出 版 物	内 容
国際 Dairy レポート第 19 号 2026 年 7 月 	変化する世界のサプライチェーン バイオセキュリティー新たな局面へ？ 米国で牛寄生虫確認、「脅威が進化」と指摘も 持続可能な酪農乳業の新しい試み 酪農乳業セクターの気候目標への貢献 －欧州と米国の最新サステナビリティ戦略－ 乳牛の暑熱ストレス管理 科学的知見に基づく飼養・育種・栄養管理による総合的アプローチ 最新 国際組織の活動 GDP: 「持続可能性」の活動「デリー・サステナビリティ・フレームワーク」の進捗と日本からの報告 IFCN: 2025 年の世界生乳生産量、過去 10 年で最大の伸び～ 「長期的な構造変化」を考慮し生産量を分析～ IDF: 2024 年の世界の酪農乳業を振り返る ～世界の酪農情況 2025 より～ COLUMN: 海外で高い評価を受ける日本の地元の乳を使用した職人技の乳製品 (全文 24 頁)

③ J ミルクインテリジェンス

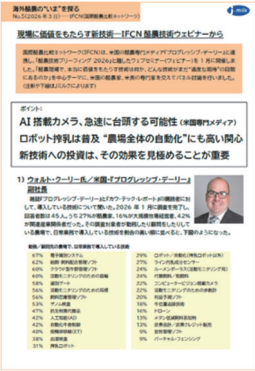
発 信 日		標 題
1	2026 年 2 月 25 日	アジアの酪農乳業の構造的転換ー需要拡大と輸入依存の狭間で 2025 年のアジア各国の酪農生産と牛乳乳製品市場 米国農務省 GAIN レポートから
2	2026 年 3 月 18 日	乳タンパク質が乳価を動かす時代へ ～米国：乳脂肪の飽和と乳タンパク質の台頭～
3	2026 年 4 月 15 日	2026 年食品・乳製品市場の展望： 価格回復と中東情勢による地政学的リスクが交錯する不透明な局面
4	2026 年 4 月 22 日	米国、「全脂肪」推奨の新食事ガイドラインで示唆された 3 つの 視点： フードマトリクス、人生を通じた健康への貢献、高度加工食品
5	2026 年 5 月 20 日	NZ フォンテラが有機酪農プログラムを南島へも拡大、アジア市場 にも期待： フォンテラの有機部門責任者アンドリュー・ヘンダーソン氏に聞く
6	2026 年 5 月 27 日	生乳増産によって価格は低下に転じたものの、乳製品価格は比較的 安定： 欧州委員会「牛乳乳製品市場観測サイト」2026 年 3 月会合報告より
7	2026 年 7 月 29 日	北米および欧州の乳業経営層にとっての最優先事項 2026 年はコスト削減と利益確保が課題： 米マッキンゼー・アンド・カンパニーの報告書から
8	2026 年 8 月 5 日	世界の生乳生産、2026 年は引き続き緩やかに成長 乳製品貿易量 もプラス： FAO「食料アウトルック」2026 年 6 月号より

④ ACADEMIC RESEARCH Update -ミルクに関する国内外の最新研究-

号・発 信 月		標 題
1	Vol. 61 2026. 02	ギリシャヨーグルトの摂取は筋力トレーニングの炎症抑制効果を さらに高める
2	Vol. 62 2026. 03	全脂肪乳製品の摂取は将来的な冠動脈石灰化リスクの軽減と関連 する
3	Vol. 63 2026. 07	朝食を欠かさず、卵・牛乳乳製品を多く摂る食事習慣が青少年の 体力向上と関連する

⑤ Jミルクウェブサイト

Jミルクウェブサイトでは、お知らせ（ニュース）のほか、「[国別データ](#)」、「[世界の酪農家・乳業統計](#)」、「[製品生産量統計](#)」、「[フランスの酪農乳業事情](#)」、「[海外酪農ニュースレター](#)」、「[国際酪農乳業ファクトシート](#)」などの国際情報を掲載しています。

情報発信	標 題 お よ び 概 要
1 海外酪農ニュースレター #5 2026 年 3 月 10 日 	現場に価値をもたらす新技術—IFCN 酪農技術ウェビナーから IFCN が米国の酪農専門メディア『プログレッシブ・デリー』との連携でウェブセミナー（ウェビナー）「酪農技術ブリーフィング 2026」を 1 月に開催しました。「酪農現場で、本当に価値をもたらす技術は何か、どのような技術がまだ“過度な期待”の段階にあるのか」を中心テーマに、米国の酪農家、米英の専門家を交えてパネル討論を行いました。
2 海外酪農ニュースレター #6 2026 年 5 月 29 日 	人工知能(AI) の可能性—IDF ウェビナーから IDF が、2026 年 4 月に「酪農乳業における人工知能 (AI)」をテーマとするウェビナー（オンラインセミナー）を開き、エストニア、アイルランド、オランダの研究者や専門家が講演しました。AI の基本的な仕組みや関連技術を含めた広がり、頻繁に指摘される「データ」の活用事例や望ましい運用のノウハウなど、現在研究中的の内容を含めた説明がされました。

⑥ 報告書翻訳（仮訳）

発 信 日	標 題 お よ び 概 要
1 2026 年 3 月 23 日 	IDF 酪農乳業における女性に関する報告書 第 3 号（仮訳） この報告書では、女性たちが支援を受けながらどのように活躍し、変革をもたらす食料システムの課題に取り組んでいるかについての世界各地から寄せられた 14 の記事を掲載しています。今回のハイライトは新セクション「酪農乳業における先駆的な女性たちに対する賞賛」で、その先見性、不屈の精神、リーダーシップによって業界を形作り、世代を超えて人々を鼓舞してきた歴史的先駆者たちを称えています。 (40 ページ)
2 2026 年 3 月 24 日 	IDF 酪農乳業の持続可能性見通し 第 9 号（仮訳） 「IDF 酪農乳業の持続可能性見通し 第 9 号」では、6 カ国（フランス、メキシコ、オランダ、南アフリカ、スペイン、米国）と 1 企業（テトラパック社）の報告を掲載しており、世界の酪農乳業界がどのように各国の気候コミットメントに沿った取り組みを行い、国連の持続可能な開発目標を推進し、持続可能性に関するデーリー・パリ宣言（PDDS）を実行に移しているかを紹介しています。 (30 ページ)
3 2026 年 3 月 25 日 	IDF 年次報告書 2024-25 年度（仮訳） 「アニュアルレポート 2024-2025」には、過去 12 カ月間の IDF の活動と成果の全体像が示されています。 (49 ページ)
4 2026 年 3 月 30 日 	DSF 2025 - 2030 戦略プラン（仮訳） 本文書は、デーリー・サステナビリティ・フレームワーク（DSF）の第 2 次 5 カ年戦略プランをまとめたもので、「DSF 2020-2025 戦略プラン」に代わるもので、世界の酪農乳業の持続可能性のための DSF の 2025 年から 2030 年までの活動方針を示しています。DSF の 11 の持続可能性の評価項目とそれぞれの指標測定基準の一部は、酪農乳業セクターの持続可能性に関する取り組みの進捗や持続可能性に関する測定技術の進歩に合わせて改定されています。 (16 ページ)

5	2026 年 3 月 31 日 	IDF アニマル ヘルス レポート No. 19（仮訳） 本報告書は、疾病予防と家畜福祉促進のための最も効果的な科学的戦略の 1 つであるバイオセキュリティに焦点を当てています。家畜や訪問者の移動管理、飼育環境と衛生の改善、群れの監視強化といったバイオセキュリティ対策は、感染脅威に対する第一防衛線を形成します。予防は発生リスクを低減し、病原体の拡散を抑制し、最終的に抗菌薬治療の必要性を減少させます。これにより、バイオセキュリティは責任ある抗菌薬管理を支援し、人・動物・環境の健康の相互依存性を認識するワンヘルスアプローチを推進します。 (70 ページ)
6	2026 年 4 月 24 日 	GDP 業績報告書 2025（仮訳） グローバル・デリー・プラットフォーム（GDP）が作成した 2025 年の年次業績報告書（仮訳）で、2025 年の活動計画の「酪農乳業の物語を伝える」については、EAT 財団とのコラボレーション、栄養科学関連の各種イベントでのプレゼンテーションやディスカッション、国連関連組織との連携などの実績が、「エビデンスを提供する」については、栄養、持続可能性、社会経済的影響のそれぞれの領域で得られたエビデンスや、ファクト一覧を作成したことなどが記載されています。 (24 ページ)
7	2026 年 7 月 2 日 	酪農乳業のナラティブ（物語）と世界的なメッセージ伝達 2026 GDP が作成した、酪農乳業の役割や貢献についてのメッセージ集で、栄養と健康、環境への影響、土地管理と飼養管理、社会経済的影響、味・文化・多用途性、の 5 つの面でのファクトに基づくメッセージを整合性をもって統合しています。 世界の酪農乳業セクターのコミュニケーションを一貫させて強化させるためのもので、酪農乳業関係の企業、団体が様々な場面で使用することを意図しています。地域の事情に合わせて修正変更して使用することも可能で、「酪農乳業ファクト一覧」や「解決型メッセージ伝達」とともに、各国において業界全体で活用することが勧められています。 (17 ページ)

2. 国際組織の活動報告

I IDF 関連

1) IDF チームアップデート（最新活動状況）から

IDF チームアップデートは、IDF がコミュニケーション強化のために、各国の国内委員会、IDF 常設委員会委員、IDF 特別作業部会委員に定期的にメール送付しているものです。今回は 2026 年の 4 月号と 7 月号を紹介します。



① IDF チームアップデート - 2026 年 4 月号

事務総長からのご挨拶

各国委員会事務局長各位

2026 年第 1 四半期を終えるにあたり、IDF が取り組んできたことに加えて、より重要な点として、連盟の会員である皆様にとってこのことがどのような意味を持つのかをお伝えしたいと思います

IDF は、会員の皆様に対して、より大きな価値、明確性、そして影響力をもたらす新たな戦略的段階に入りました。第 120 回総会で満場一致で承認され、現在実施されている IDF 戦略は、単なる抽象的な取り組みを示したのではなく、継続的かつ適切な事業プログラム、より明確な優先事項、そして現在の世界的な議論における酪農乳業のより強力なポジショニングを通して、IDF が皆様にどのように支援するかを強化するように設計されています。

では、これは具体的にどのような意味を持つのでしょうか？

第一に、整合性と可読性の向上です。先般インドで開催された理事会では、段階的かつ体系的な戦略的作業計画の必要性について強い合意が得られました。この計画により、各国委員会が関与し、専門知識を提供し、個々の作業項目が長期目標とどのように結びついているかを把握しやすくなります。このアプローチは、皆様の専門家の時間と意見が最大限の価値を生み出すことを確実にするためのものです。

第二に、専門家同士の知識共有のための継続的なプラットフォームです。第 1 四半期を通して、IDF のチームと常設委員会は、6 つの戦略分野全体で深く関与し続けてきました。さらに、IDF は、FAO、WHO、コーデックス、ISO などの組織との公式な連携を通して、ネットワークからの科学に基づく提言が、国際的な政策・技術フォーラムにおいて可視化され、信頼性が高く、かつタイムリーなものとなるよう引き続き取り組んでいます。そこでは、加盟国が指名した専門家たちが基準の策定に関与し、グローバルな指針への貢献を行い、国際的な議論において科学に基づいた乳業の視点が確実に反映されるよう努めています。この協調的なアプローチにより、各国の専門知識は国境を越えて広がり、具体的な影響力と成果へと結びつきます。

第三に、戦略を具体的な利益へと結びつけるプロジェクトです。新たな作業項目プロセスを通して、現在いくつかの新規イニシアチブが進行中です。これらのプロジェクトは、IDF ネットワーク全体での協力を強化し、関与の機会を拡大するとともに、科学的、技術的、あるいは政策主導のいずれであれ、各国の優先事項に対する IDF の関連性を高めるよう設計されています。

第四に、皆様にとって重要な課題に対するより強力な普及活動です。今後数ヶ月間、私がインドネシア、ジンバブエ、シンガポールで行う活動は、強靱な食料システム、栄養安全保障、そして持

持続可能な成長における乳業の役割に焦点を当てます。これらのミッションは、加盟国が一貫して価値を認めている 2 つの具体的な優先事項、すなわち「学校牛乳制度」を強化し、「酪農乳業における女性」も推進させます。どちらの分野も、各国の認知度向上、パートナーシップ構築、そして影響力発揮のための具体的な機会を提供します。

最後に、今後の展開を形作る皆様の役割についてです。今年 6 月にブリュッセルで開催される中間会議は、戦略的作業計画を精緻化し、次期優先事項のサイクルに備えるための重要な機会となります。参加、フィードバック、専門知識、そしてリーダーシップなどによる皆様の関与は、依然として不可欠です。より強固な IDF は、活発な各国委員会に依存しており、本戦略は皆様がその役割を果たすことを支援するために策定されましたものです。

私たちは共に、IDF の使命を推進するだけでなく、世界中の会員に対してより明確な価値、より強い影響力、そしてより大きな意義をもたらす連盟を築き上げています。

皆様と共にこの取り組みを続けていけることを楽しみにしております。

ローレンス・ライケン IDF 事務総長

ガバナンス

IDF 本部

2026 年 3 月 16 日、14 名の候補者の中からアンナ・ミルジャム・ハラシュ氏が、クリエイティブな文章作成能力を評価されて IDF コミュニケーションチームにコミュニケーション・オフィサーとして加わりました。ハラシュ氏は、欧州連合理事会などでデジタル・ストーリーテリングの経験を持っており、IDF のデジタルプレゼンスの強化とコミュニケーションの一貫性向上という目標に合致しています。職務に慣れるにしたがい、ニュースレター、デジタルコンテンツ、ソーシャルメディア、イベント支援、デジタル最適化といった分野において徐々に責任範囲を広げていく予定です。アンナさん、ようこそ。

IDF 理事会

IDF 理事会のインド訪問

IDF 理事会は、世界的な連携の強化と連盟の戦略的優先事項の推進に重点を置く幅広いミッションの一部として、インドで特別会議を開催しました。ムンバイでは、理事会メンバーが「IDF ワールドデーリーサミット 2027」の開催地であるジオ・ワールド・コンベンション・センターを訪問し、世界最大規模のイベントに向けた準備状況を確認しました。その後、アーナンドに移り、理事会は「IDF 2026-2030 年 戦略」の進捗状況を検証するとともに、インドの酪農乳業のパートナーと意見交換を行い、ウシ系および非ウシ系の酪農乳業システムについて直接的な知見を得ました。

会議中、理事会は次期戦略作業計画の進捗状況を検討し、年次中間会議に向けた段階的かつ体系的なアプローチについて合意するとともに、ガバナンス、プログラムの優先事項、およびコミュニケーションの間の連携強化を強調しました。

各国委員会

国際酪農連盟（IDF）は、ポルトガルを新しい各国委員会メンバーとして迎えることを嬉しく思います。ポルトガルの同僚の皆様を心から歓迎するとともに、IDF の科学的、技術的、政策的な活動全般において、皆様が積極的に関与されることを期待しています。ポルトガルの酪農乳業界は、貴重な専門知識と視点をもたらし、私たちのグローバルな協力をさらに豊かにし、科学に基づいた持続可能な酪農システムへの共通の取り組みを強化するでしょう。中間会合には、IDF ポルトガル国内委員会事務局長のマリア・スサナ・ロペス博士をお迎えできることを願っています。

科学・計画調整委員会（SPCC）

IDF 科学・プログラム調整委員会（SPCC）は、2026 年 1 月 28 日に会合を開き、IDF 作業計画への組み込みが提案されている新規作業項目（NWI）の検討および評価を行いました。

本会議の主な論点は、IDF 常設委員会および特別作業部会から提出された 10 件の NWI 提案の審査でした。事前の書面による協議および会議中の議論を経て、実質的なコメントのないいくつかの提案は効率的に承認され、委員会は範囲、リソース、スケジュール、承認プロセスに関する明確化が必要な提案により多くの時間を割くことができました。

SPCC は、内部向け成果物と対外向け出版物の区別、およびそれに対応する承認レベル（常設委員会、SPCC、または各国委員会）を含め、新規業務の承認手続きについて詳細に議論しました。IDF ブリテン、ファクトシート、査読付き出版物など、異なる種類の成果物においてこれらの承認区分が一貫して適用されるよう、明確化が行われました。

いくつかの提案は、戦略的に重要であると同時に、その範囲が広範かつ挑戦的であると認識されました。こうしたケースにおいて、SPCC は、明確な優先順位付け、現実的なリソース配分、成果の慎重な定義が必要であることを強調しました。必要に応じて、提案内容を精査し、既存の知見との整合性を高め、業務の重複を回避し、提案されたスケジュール内での実現可能性を確保しました。

委員会はまた、IDF の優先プロジェクトを特定・管理するプロセスについて検討し、IDF の戦略的目標との整合性を確保しつつ、影響力の大きい優先事項を限定的な数に留めることの重要性を指摘しました。委員らは、優先順位付けの基準や透明性についてさらに議論することが有益であり、今後の会合で取り上げるべきであるとの見解で一致しました。

全体として、本会議を通して SPCC は提案された新規作業項目について明確な提言を策定することができ、それらは IDF の手続きに従って IDF 各国委員会へ送付され、検討、専門家の指名、最終承認が行われることとなりました。

2026 年度新規作業項目（NWI）提案に関する投票

2026 年 1 月 28 日の会議において、IDF 科学・プログラム調整委員会（SPCC）による新規作業項目（NWI）提案の審査を経て、IDF の手続きに従い、10 件の提案が IDF 各国委員会に諮問および投票のために提出されました。

提案された NWI は、IDF の科学的、技術的、およびコミュニケーション活動の幅広さを反映するもので、世界の酪農乳業の現在および新たなニーズに応えるものです。これらは IDF 常設委員会および特別作業部会によって策定され、SPCC による審査を経て、その関連性、範囲、実現可能性、IDF の戦略的目標との整合性が評価されました。

10 の NWI トピックの概要

各国委員会の投票に付された 10 件の提案は、以下のトピックを含んでいます：

1. 乳および乳製品のサンプリングに関する IDF/ISO 規格の改訂
2. 搾乳管理に関するガイドラインの ISO 規格から IDF ガイドラインへの移行
3. 乳および乳製品における口蹄疫の ROHA ルールの適用に関するガイダンス
4. 乳の分析における中赤外分光法の適用に関する IDF/ISO ガイダンスの改訂
5. 健康的な高齢化における乳・乳製品の役割
6. 植物主体の食生活における乳・乳製品の役割の位置づけ
7. 酪農乳業界の温室効果ガス報告のためのマスバランス・チェーン・オブ・カストディ
8. ヨーネ病コントロールプログラムに関する査読付き論文
9. 低メタン排出乳牛：遺伝的変異の定量化と緩和策への示唆
10. ミルクライン、エアライン、真空ポンプの選定ガイドライン

投票結果に関するコメント

投票結果は、全体的に、提案された作業計画に対する各国委員会の強い支持を示しています。10件の新規作業項目すべてが実施を進めるのに十分な支持を得ており、提案されたトピックの妥当性と、この作業を主導する委員会および専門家に対するメンバーの信頼が裏付けられました。

いくつかの提案は挑戦的なものと認識されており、協議中に寄せられたコメントでは、作業の進展に伴い、明確な優先順位付け、現実的なスケジュール、十分なリソースの確保が重要であることが強調されました。これらの考慮事項は、プロジェクトの計画および実施段階において対応される予定です。

作業計画

食品規格運営グループ（FSSG）会議、2026年1月13日、オンライン開催

2025年12月に開催されたコーデックス基礎ウェビナーの成功に基づき、2026年11月のオーストラランド会合において、できれば対面形式で実施する、より高度で実践的なコーデックス研修セッションの計画が進められています。最終的な手配の指針とするため、関心度や形式の希望を把握するアンケート調査を実施します。

FSSGは、世界食品安全デー（6月7日）や世界標準化デー（10月14日）といった主要な国際的な記念日に合わせ、コーデックス規格とその影響に重点を置いたテーマ別ウェビナーを含むコミュニケーション活動の強化を検討しています。

FSSGはコーデックス会議のスケジュールを検討し、CCFA、CCFL、CACへのIDF代表団を承認しました。

FSSGは、コーデックスおよびWHOの最近の動向を踏まえ、IDFが超加工食品（UPF）の問題にどのように取り組むべきかについて議論しました。FSSGは、解散したUPF特別作業部会によるIDFのこれまでの取り組み、および乳業加工に関する関連技術的作業を評価しました。FSSGは、IDFが主導的役割を担うことなく関与を継続し、適切な場合には他の最適な国際機関を支援すべきであることに合意しました。現段階では新たな作業部会の設置や新規リソースの開発は不要であるとの合意が形成され、今後の進展に応じて本テーマを引き続き注視し、FSSGの議題として維持すべきです。

会議後の注記：理事会は、UPF（超加工食品）の問題に対処するための総合的な計画を要請しました。そのため、4月から5月にかけて、関連する常設委員会（SCDSPT、SCFH、SCSIL、SCM、SCDPE）間でUPFに関する体系的な議論を行い、事前に背景資料を配布することとしました。これらの議論からのフィードバックは、SPCC向けの報告書にまとめられ、その後、SPCCにおいて専用の議論を行い、調整された一貫性のある今後の方向性について合意します。

食品規格運営グループおよび試験法規格運営グループ合同会議、2026年3月5日、オンライン開催

両運営グループの初の合同会議が、連携を強化し、進行中の作業に関する相互理解を深め、重複するトピックを特定し、常設委員会レベルでの重複を回避しつつ調整を改善することを目的として開催されました。

本会議では、液状の高温殺菌ラクダ乳に関するコーデックス作業、トランス脂肪酸（TFA）に関するコーデックス/WHOの議論、牛乳乳製品用語の保護、IDF/ISOのビフィズス菌測定法およびそのコーデックス乳児用調製乳規格への関連性など、規制業務と分析業務が密接に連携している具体的な横断的な事例が取り上げられました。

参加者は、調整を強化するための仕組みについて議論し、早期の整合、情報共有の改善、そして効果的な連絡役として機能するための委員会横断的な専門家の関与拡大の必要性を強調しました。

本会議では、両作業分野の重要性が確認され、2つの運営グループ間のより緊密かつ体系的かつ定期的な協力の必要性について合意に達しました。

アクションチーム AT-MDM-D18（酪農微生物学的手法常設委員会）

ISO 10932 | IDF 223「抗生物質の最小発育阻止濃度」の改訂作業を進めており、試験所間共同研究への参加機関を募集しています。

このマルチラボ共同研究は、対照株の性能基準を確立することを目的としています。その後、本手法の妥当性を検証するためのインターラボ共同研究が実施される予定です。

詳細については、カジャ・シセ氏（kcisse@fil-idf.org）およびギッテ・クヌッセン氏（gikn@novonesis.com）までお問い合わせください。

「牛乳乳製品用語の使用に関するコーデックス一般規格（GSUDT）」の保護・推進に関するアクションチーム（規格・表示常設委員会）

GSUDT の各国における実施状況に関する IDF 調査を更新中です。本調査は、本年 5 月から 7 月にかけて各国委員会に配布される予定です。

持続可能な食料システムにおける学校給食プログラムの一環としての学校牛乳に関するアクションチーム（栄養・健康常設委員会）

[IDF 学校牛乳ナレッジハブ](#)向けの学校牛乳の事例研究を募集しています。各地域からの、経験、優良事例、得られた教訓を紹介するため、新たな学校牛乳プログラムの事例研究の報告を募集しています。ご協力いただける場合は、アナベル・ミュレ氏（amulet@fil-idf.org）までご連絡ください。

特別作業部会

酪農乳業における女性に関する特別作業部会

「IDF 酪農乳業における女性に関する報告書 2026」への寄稿募集は 5 月に開始しており、同年後半の刊行を予定しています。本号は、国連が定めた「女性農家の国際年」を記念する特別号となります。

「[IDF 酪農乳業における女性ナレッジハブ](#)」にも新たな記事を掲載する予定です。ご関心のある方は、アナベル・ミュレ（amulet@fil-idf.org）までご連絡ください。

温室効果ガス削減戦略特別作業部会（TF GHGMS）

IDF 温室効果ガス削減戦略特別作業部会が、IDF 科学・プログラム調整委員会の決定に基づいて正式に発足しました。同グループは組織体制が整い、初期メンバーが選出されました。

本タスクフォースの目的は、IDF 内および他組織における温室効果ガス関連の取り組みを整理・検討し、IDF の観点から課題を特定するとともに、この分野における IDF の総合的な目標を定義することです。これには、非競争的なベストプラクティスの共有、緩和策の特定、乳業加工・牛乳乳製品の安全性・家畜の健康への影響の評価、消化管由来の排出のみにとどまらない酪農乳業バリューチェーン全体を見据えた主要なコミュニケーションメッセージの策定が含まれます。

特別作業部会の権限範囲は、内部提言、新規作業項目の提案、広報活動に限定されます。ジェイミー・ジョンカー氏が特別作業部会の議長に任命されました。

持続可能性の行動・調整・推進に関するデーリー・パリ宣言特別作業部会（TF PDDS）

特別作業部会は 2 月に今年度初の会合を開催しました。現在、同グループは専用のコミュニケーション戦略の策定に取り組んでいます。

各国委員会は、持続可能性に関するデーリー・パリ宣言（PDDS）の枠組みに沿った、酪農乳業界における地域の持続可能性イニシアチブやコミットメントに関する情報の収集を支援し、その情報を文書に盛り込むよう要請されました。この情報は、現在進行中の「[定量化されたコミットメントの現状把握](#)」文書に反映されます。

2026 年 3 月 31 日から 4 月 2 日までジンバブエで開催される「IDF アフリカ地域酪農会議 2026」の開会式において、「持続可能性に関するデーリー・パリ宣言」の署名式が別途行われます。これに先立ち、ジャカルタで開催される FAO-BRIN 酪農乳業開発フォーラム（2026 年 3 月 25~31 日）の一環として、半日間の「持続可能性に関する酪農乳業フォーラム」が企画されています。このフォーラムは、IDF の「持続可能性に関するデーリー・パリ宣言」および IDF の広範囲にわたるサステナビリティ活動を紹介する重要な機会となります。

アドボカシー

コーデックス分析・サンプリング法部会（CCMAS）、2026 年 3 月 9~13 日

IDF は、ハンガリーのブダペストで開催されたコーデックス分析・サンプリング法部会の第 45 回会合に参加しました。IDF は、牛乳乳製品の取引に関するコーデックスが推奨する基準が消費者にとって安全であることを、オブザーバーとしての立場から確保しました。

会期中に議論された主要な議題のうち、酪農乳業界に特に関連するトピックとしては、予防的アレルギー表示のための分析法や、コーデックス推奨分析・サンプリング法（[CXS 234](#)）に記載されている分析法の原則に関する名称の調和などが挙げられます。

詳細はこちら：[DRAFT_REP26_MASe.pdf](#)

今年の会合には 65 カ国が参加しました。IDF 代表団は、フィリップ・トロサ氏（IDF 分析法・規格運営グループ議長）、リチャード・ジョンソン氏（成分分析法常設委員会議長）、カジャ・シセ氏、オーレリー・デュボワ氏（IDF 本部）が参加しました。

コーデックスへの貢献

IDF は、以下の委員会に対してコメントを提出しました。

コーデックス油脂部会：工業的に製造されたトランス脂肪酸（iTFA）を制限することを目的とするコーデックス規格の改正案に関する作業について、回覧文書（[こちら](#)を参照）および会議室文書（[こちら](#)を参照）への回答として。

コーデックス食品残留動物用医薬品部会およびコーデックス残留農薬部会：動物由来食品に関する食品表示用語の調和について（[こちら](#)を参照）。

コーデックス食品表示部会：予防的アレルギー表示の使用に関するガイドライン案に関する第 2 回協議に関連して（[こちら](#)を参照）。

WOAH-OECD AMR フォーラム

OECD との共催により、2026 年 3 月 23 日から 24 日にかけてパリで WOAH 抗菌薬耐性（AMR）フォーラムを開催しました。この対面式フォーラムには、主要なパートナーからなる少人数のグループが集まり、AMR に関する WOAH の戦略的方向性を策定するための意見交換が行われました。

IDF からは、「家畜の健康・福祉」担当の SPCC 代表であるイルカ・クラス氏に参加し、AMR に関する IDF の取り組みと立場を提示するとともに、酪農乳業セクターの視点が適切に反映されるよう努めました。

OECD 商品市場グループ

IDF は、2026 年 3 月 31 日および 4 月 1 日に開催された OECD 商品市場グループの第 18 回会合に招待されました。IDF からは、酪農政策・経済常設委員会（SCDPE）の委員長であるヘレ・フセビー氏が代表として出席しました。

今後の予定

第 79 回世界保健総会、2026 年 5 月 18～23 日、ジュネーブ（スイス）

本総会では、WHO 加盟国が一堂に会し、世界の保健政策を形作る決定事項について議論し、採択を行います。酪農乳業界に関連するトピックとしては、栄養および食事に関連する非感染性疾患、食料システム、そして健康の商業的決定要因への関心の高まりなどが挙げられます。こうした状況に基づき、IDF は、各国の WHO 代表との対話において IDF 各国委員会事務局長を支援するため、「健康の商業的決定要因に関する WHO の取り組みに関する意見書」を作成しました（[こちら](#)をご覧ください）。

WHO および FAO の今後の刊行物

今後数年間で、栄養および食料システムに関連する WHO および FAO の刊行物がいくつか予定されています。WHO は 2026 年に、動物由来食品の最適摂取量に関するガイドラインと、「超加工食品」の運用上の定義を公表する見込みです。これと並行して、FAO は 2026 年に、食料システムに基づく食事ガイドラインに関するモジュールおよび初の「健康的な食事の現状（State of Healthy Diets）」報告書を発行する予定です。

WOAH の家畜の健康フォーラム（2026 年 5 月 18～22 日開催）に向けた IDF の提言

2026 年 5 月 18～22 日に開催予定の [WOAH 年次総会](#) のテーマは「すべての人の未来を守るための家畜の健康への投資」です。本フォーラムでは、意思決定者が家畜の健康・福祉への投資がなぜ重要なのか、これらのメッセージやエビデンスを誰に伝えるべきか、そしてその理解をどのように持続可能な投資につなげるかを理解できるよう、実践的かつ政治的に説得力のある解決策を紹介します。

WOAH は、このテーマに関連するいくつかの質問について、IDF に知見を求めました。家畜の健康・福祉の専門家（SCAHW 議長デビッド・ケルトン氏、SCAHW 共同議長ステファニー・ブレン氏、SPCC AHW 代表イルカ・クラス氏、元 SPCC 委員長ジェイミー・ジョンカー氏）との協力により、IDF は知見を収集し、提供しました。

出版物

IDF ファクトシート No. 48/2026	IDF 乳牛福祉フォーラム：2025 年会議での主要な知見
ISO 7889 IDF 117: 2026	ヨーグルトー特徴的な微生物の計数ーコロニーカウント法
ISO 16958 IDF 231: 2026	乳・乳製品・乳児用調製乳・成人用栄養食品ー脂肪酸組成の定量ーキャピラリーガスクロマトグラフィー法
IDF ブリテン No. 539/2025	学校給食プログラムにおける牛乳乳製品の経済性と栄養価値の評価

ウェビナー

2026 年 1 月 21 日	ICAR-IDF 合同ウェビナー 遺伝的改良プログラムにおけるセンサーデータの活用可能性と提言
2026 年 2 月 12 日	米国の食品ベースの食事ガイドライン
2026 年 3 月 11 日	酪農乳業の未来を牽引する女性たち：国際女性農業者年を称えて
2026 年 3 月 24 日	酪農家円卓会議ーアニマルケア
2026 年 3 月 31 日	総合的な食料システムの持続可能性に向けて：ライフサイクルアセスメントにおいて栄養はなぜ重要か
2026 年 4 月 13 日	酪農乳業界における AI：農場から加工までの実践的応用

イベント

第9回 羊・山羊・ラクダ・その他の非牛種乳に関するシンポジウムー2026年2月9～11日ーアーナンド（インド）

本イベントは、インドの酪農乳業界の発展を支援するアーナンドの全国酪農開発委員会（National Dairy Development Board）で開催されました。

シンポジウムでは、農場管理、持続可能性、加工技術、栄養・機能特性、バイオセキュリティ、非牛種の乳に関する国際基準などのトピックを網羅した7つの技術セッションが行われました。

100名以上の参加者が集まり、25名の専門家講演者がプログラムに貢献しました。

発表の抄録集は[こちら](#)からダウンロードできます。

IDF 乳房炎・搾乳技術合同会議 2026、2026年3月11～13日、ストックホルム（スウェーデン）

2026年3月10日から13日にかけて、スウェーデンのストックホルムにて「IDF 乳房炎・搾乳技術合同会議 2026」が成功裏に開催され、世界中の乳房炎および搾乳技術のコミュニティが一堂に会するユニークな合同イベントとなりました。

IDF スウェーデン、デラバル、LRF Mjölkl、スウェーデン農業科学大学（SLU）が主催した本会議では、乳房炎の予防、検出、管理、搾乳システムと技術、乳房および乳頭の健康、乳質、そして持続可能な酪農生産を支える実用的なイノベーションを網羅した、質の高い科学的・技術的プログラムが提供されました。

本イベントは、研究者、獣医師、業界の専門家、酪農実務者の間で活発な交流を促進しました。大会は大成功を収めたと広く評価され、今後の IDF 合同イベントにおける強力なベンチマークとなりました。

今後のイベント

IDF ワールドデリーサミット 2026ー2026年4月1日より登録受付開始

酪農乳業界の最大級の国際会議である「IDF ワールド・デリー・サミット 2026」の参加登録が開始されました。本サミットは、2026年11月15日から20日まで、ニュージーランド・オークランドのニュージーランド国際コンベンションセンターで開催されます。「Healthy People, Healthy Planet, Healthy Economies（健全な人々、健全な地球、健全な経済）」をテーマに、本サミットでは世界中の酪農家、乳業者、科学者、政策立案者、業界リーダーが一堂に会し、科学、持続可能性、イノベーション、そしてグローバルな協力を通して酪農乳業の未来を探求します。

参加者は、ハイレベルな全体会議、専門家パネル、技術視察、そして世界の酪農乳業バリューチェーン全体にわたるネットワーキングの機会を期待することができます。登録および詳細については、www.idfwds2026.com をご覧ください。

IDF/ISO 分析ウィーク 2026、2026年5月5～7日、ベルン（スイス）

「分析ウィーク」は、IDF と ISO が共同で開催する年次イベントで、分析法やサンプリングを専門とする酪農乳業分野の世界的な専門家が一堂に会し、知見を交換し、この分野における最新の進歩について議論する場です。

本イベントの焦点は、微生物学、成分分析、添加物、汚染物質、実験室統計学、その他の関連分野など、幅広いトピックに及びます。参加者は、業界の発展に向けた議論に参加したり、メーカー展示会を通して牛乳乳製品の分析に関する最新技術を発見・学習したり、同業者とのネットワーキングを行ったり、乳タンパク質を扱う専門シンポジウムに参加したりする機会を得ることができます。

メインプログラムに加え、本イベントでは3つの無料技術見学ツアーが実施され、参加者は以下

の施設を訪問する機会が得られます:

- ・ リーベフェルトにあるアグロスコープ研究センター
- ・ 乳分析・試験研究所「スイスラボ・ツオリコフェン」
- ・ チーズ工場「ラ・メゾン・デュ・グリュイエール」

詳細および参加登録は[こちら](#)をクリックしてください。

第6回 IDF 栄養・健康シンポジウム、5月21日、オンライン開催

IDF 栄養・健康シンポジウムが5月21日にオンラインにて参加無料で開催されます。

テーマ: 乳糖 360 度ー生物学から新たなベネフィットまで

同じ録画プレゼンテーションとライブパネルディスカッションを行う2つのセッション

- ・ セッション1: 07:00-09:00 CEST (視聴は[こちら](#)から)
- ・ セッション2: 16:00-18:00 CEST (視聴は[こちら](#)から)

詳細情報は[イベントのウェブページ](#)をご覧ください。

ご協力のお願い: 本イベントへの国家認定および/またはライブ通訳によるご支援にご関心のあ
る方は、アナベル・ミュレ氏 (amulet@fil-idf.org) までご連絡ください

ICAR2026 年次総会およびインターブル会議、2026年5月29日～6月5日、ヴェローナ (イタリア)

**ICAR-IDF 合同ワークショップ: 乳牛の健康と福祉のモニタリングおよび管理におけるセンサーデータ
の活用。** ICAR 2026 年次総会およびインターブル会議期間中に開催される本ワークショップは、
「酪農乳業バリューチェーンにおけるセンサーデータの活用」に関する ICAR-IDF 共同イニシアチ
ブの一環です。ワークショップの詳細は[こちら](#)。

IDF ヨーネ病フォーラム、2026年6月7日、ドレスデン (ドイツ)

地域レベルまたは国レベルで実施されるヨーネ病対策の経験を共有し、その後の議論から得られ
た教訓を活用して、現在使用されている対策方法をさらに改善することを目的とする招待制イベン
ト ([第17回ヨーネ病国際コロキウム](#)のサイドイベント)。

応募募集

IDF デーリー・イノベーション賞/2026年3月2日/オンライン応募/授賞セレモニー

IDF デーリー・イノベーション賞は、世界の酪農乳業界における卓越したイノベーションを称え、
持続可能性、効率性、栄養、社会への好影響を促進する取り組みを表彰するものです。テトラパッ
ク社の協賛、国際酪農連盟 (IDF) の主催により、本賞は、農業や乳業加工から製品、人、そして
地球に至るまでの酪農乳業バリューチェーン全体にわたる革新的な実践を紹介し、科学、技術、そ
して協働が世界中の乳業の未来をいかに形作っているかを示します。

2026 年版の応募受付は、2026 年 3 月 2 日から 6 月 19 日までです。ファイナリストは 2026 年 10
月 5 日に発表され、受賞者は 11 月中旬、ニュージーランドのオークランドで開催される「IDF ワー
ルドデーリーサミット」の一環として行われる授賞式で発表されます。主要な乳生産国であるニュ
ージーランドでの IDF ワールドデーリーサミット開催は今回で 3 回目となります。サミットの詳細
および登録は[こちら](#)。

IDF パベル・イエレン教授若手科学者賞、2026年6月1日、オンライン応募

IDF パベル・イエレン教授若手科学者賞の応募受付を開始しました。本賞は、若手科学者による
乳業分野への貢献を称えるものです。

応募資格のある候補者 (学生または卒業後 3 年以内の卒業生) は、2026 年 6 月 1 日までに申請書
を提出してください。応募書類は、[IDF ウェブサイト](#)に記載されているガイドラインに従い、

info@fil-idf.org まで送付してください。

受賞者には、ニュージーランド・オークランドで開催される「IDF ワールドデーリーサミット 2026」への参加機会が与えられ、最大 700 ユーロの旅費補助と 300 ユーロの謝礼が支給されます。詳細については、[こちら](#)をクリックしてください。

プレス

「スウェーデンが世界酪農会議を主催」－Mejerimedier（北欧の酪農乳業メディア）

本記事は、2026 年 3 月にストックホルムで開催される「IDF 乳房炎・搾乳技術合同会議」のスウェーデン開催を発表し、世界の酪農乳業界におけるその重要性を強調するとともに、組織委員会のメンバーのコメントを引用しています。

<https://mejerimedier.dk/dairy-nordic-news/sweden-to-host-global-dairy-conference/>

「スウェーデンが世界酪農会議を主催」－Mejeritekniskt Forum (SE)

同発表を取り上げたスウェーデンの酪農技術プラットフォーム。スウェーデンの酪農科学とイノベーションにおけるリーダーシップ、および IDF イベントの国際的な規模を強調しています。

<https://mejeriteknisktforum.org/2024/10/sweden-to-host-global-dairy-conference/>

大学/研究機関の公開情報

IDF 乳房炎・搾乳技術合同会議 2026－会議録 (SLU)

スウェーデン農業科学大学 (SLU) が発行する公式のオープンアクセス・プロシーディングスで、本会議に高い学術的認知度と長期的な被引用価値をもたらします。

<https://publications.slu.se/?file=publ/show&id=146421>

コペンハーゲン大学研究ポータル－学会参加

2026 年 IDF 乳房炎・搾乳技術合同会議への学術参加一覧。欧州の主要研究機関による積極的な関与が示されています。

<https://researchprofiles.ku.dk/en/activities/idf-mastitis-and-milking-technology-joint-conferences-2026/>

IDF 公式ソーシャルメディア (IDF チャンネル)

IDF LinkedIn－「IDF 乳房炎会議 2026 の模様」

IDF 事務総長の開会の辞、基調講演者、科学セッション、パートナー企業の展示ブースの様子を特集した、高いエンゲージメントを獲得したソーシャルメディア記事。

https://www.linkedin.com/posts/international-dairy-federation_scenes-from-the-idf-mastitis-conference-2026-activity-7437559745370095616-yuv6

IDF LinkedIn－初日のレポート (#IDFMastitis2026)

初日の詳細なまとめ記事。基調講演のテーマ、全体会議の講演者、パートナー企業の出展状況（デラバル、テトラパック、IDEXX、サーモフィッシャーサイエンティフィックなど）、会議の科学的範囲について記載しています。

https://www.linkedin.com/posts/international-dairy-federation_fika-idfmastitis2026-dairyscience-activity-7437613904786030592-AxpC

- ・第9回 羊・山羊・ラクダ・その他の非牛種乳に関するシンポジウム（インド・アナンドで開催）

主要メディアおよび全国紙（インド）

「IDF シンポジウム、気候変動に強い非牛種に焦点を当てる」－タイムズ・オブ・インディア

気候変動に強い酪農システムにおけるヤギ、ヒツジ、ラクダの乳の役割を強調した報道。IDF の主導的役割、FAO の参加、および政策への関連性について言及。

<https://timesofindia.indiatimes.com/city/vadodara/idf-symposium-spotlights-climate-resilient-non-bovine-milk/articleshow/128172470.cms> [timesofindia.indiatimes.com]

MSN ニュース（インド）－イベント報道

NDDB アーナンドで開催された IDF シンポジウムの開幕を報じる全国ニュースのまとめ記事。一般の関心の高まりを反映している。

<https://www.msn.com/en-in/news/world/idfinternational-symposium-on-sheep-goat-camel-and-other-non-bovine-milk-commences-at-nddbanand/ar-AA1W6Baa> [[msn.com](https://www.msn.com)]

業界・貿易メディア

「IDF アーナンド・シンポジウムで羊、山羊、ラクダの乳が主役に」－ジラート・タイムズ

シンポジウムのテーマ、IDF 幹部・FAO・NDDB・政府代表者の参加、持続可能性・栄養・農村の生計が論点となったことについて詳述した詳細な業界報道。

<https://ziraattimes.com/2026/02/sheep-goat-and-camel-milk-take-centre-stage-at-idf-anand-symposium/>

「インド、第 9 回 IDF シンポジウム『非牛種乳システムの拡大』を主催」－DairyNews. today

インドが非牛種乳システムの発展において果たす役割、IDF の優先事項、国際基準、およびイノベーションについて報じる国際的な乳業ニュースプラットフォーム。

<https://dairynews.today/global/news/india-hosts-9th-idf-symposium-on-expanding-non-bovine-milk-systems.html>

機関および開催国による報道

全国酪農開発委員会（NDDB）－公式プレスリリース

開会式、IDF 会長・IDF 事務総長・FAO・インド政府の参加、シンポジウムの科学的範囲について詳述した機関関連の報道。

<https://www.nddb.org/node/2470>

公式ページとイベント情報

IDF イベントページ－第 9 回 IDF 羊、山羊、ラクダおよびその他の非牛種乳に関するシンポジウム

シンポジウムの目的、テーマ、非牛種乳用家畜の国際的な重要性を記載した IDF 公式ページ。

https://fil-idf.org/idf_events/sheep-goat-camel-and-non-bovine-milk/

シンポジウム公式ウェブサイト（INC-IDF/NDDB）

シンポジウムのプログラムや開催背景に関する情報を提供する専用イベントウェブサイト。

<https://idfnon-bovine2026.com/>

動画視聴

[第 9 回 IDF 羊・山羊・ラクダ・その他の非牛種乳に関するシンポジウム](#)

② IDF チームアップデート - 2026 年 7 月号

事務総長からのご挨拶

各国委員会事務局長各位

今月初めにブリュッセルで開催した年次中間ガバナンス会議にこれほど多くの方をお迎えできたことを大変嬉しく思います。議論を通して、当業界全体でますます明らかになりつつある事実が再確認されました。すなわち、私たちが直面する課題は国によって異なるかもしれませんが、今後の機会はますます共通のものになりつつあるということです。議論の過程で、今後数年間の IDF 活動を形作る上で重要な 3 つの優先事項が明らかになりました。

第一に、AI が主導する世界において、乳業科学の存在感と影響力を維持し続けなければなりません。人工知能は、情報の発見、利用、共有の方法を急速に変革しています。政策立案者、ジャーナリスト、学生、研究者、消費者は、疑問に答え、意見を形成するために、AI を活用したツールへの依存度を高めています。酪農乳業界にとって、これは機会であると同時に課題でもあります。確かな科学も、見つけられなければ意思決定に影響を与えることはできません。つまり、IDF とその各国委員会は、質の高い科学的・技術的な成果を生み出すだけでなく、将来の議論が行われるデジタルエコシステムにおいて、私たちの知識がアクセス可能であり、発見され、参照され、引用されるようにすることも考慮しなければなりません。

第二に、私たちは、会員や業界にとって最大の影響をもたらす課題に、組織全体の資源を集中させなければなりません。栄養、持続可能性、基準、食品安全、家畜の健康、新技術の各分野において変化のペースが加速している一方で、専門家や組織の資源には限りがあります。「IDF 戦略計画 2026-2030」の実施に着手するにあたり、重要な優先事項の一つは、グローバルな連携が最大の価値をもたらし、科学に基づくリーダーシップが最も必要とされ、かつ IDF が最大の影響力を発揮できる分野に、私たちの専門知識を確実に注ぐことです。

第三に、私たちは引き続き、世界的な専門知識を各国の影響力へと転換していかなければなりません。IDF の最大の強みのひとつは、どの組織も単独では解決できない課題に取り組むために、世界中の専門家を結集させる能力にあります。国際基準の策定、コーデックス (Codex) の議論への貢献、実践的なガイダンスの開発、あるいは AI、気候変動に対する強靱性、食料システムといった新興分野の推進など、IDF の価値は、こうした活動が各国レベルで加盟団体をいかに効果的に支援できるかに最終的に帰着します。各国委員会はこのプロセスにおいて極めて重要な役割を果たしており、知識、ツール、専門知識が政策立案者、業界リーダー、研究者、酪農家に確実に届くように確保すると同時に、各国の視点を私たちのグローバルな活動にフィードバックしています。

本ニュースレターに掲載された最新情報は、これらの優先事項がすでに IDF の作業計画全体においてどのように具体化されているかを示しています。また、分野を超えた連携の重要性がますます高まっていることも明確に示しています。超加工食品や持続可能性から、国際基準やデジタルコミュニケーションに至るまで、当業界が直面する課題は、異なる分野の専門家による協働をますます必要としています。こうした視点を結びつける IDF 独自の能力は、依然として私たちの最大の強みの 1 つであり、会員であることの最も価値あるメリットの 1 つです。

皆様の継続的なご尽力とご関与に心より感謝申し上げます。IDF ワールドデリーサミット 2026 のテーマが的確に示しているように、私たちは力を合わせ、牛乳乳製品が確かな科学に裏付けられ、国際的な議論の場においてその存在感を示し、人々の健康、地球の健全性、そして経済の活性化に貢献できる立場を維持できるよう努めてまいります。

ローレンス・ライケン IDF 事務総長

ガバナンス

食品規格運営グループ（FSSG）会合、2026 年 6 月 2 日、オンライン開催

ニック・ガードナー氏（米国）が率いる FSSG は、IDF 加盟国がコーデックスおよび国際食品規格活動への関与を強化できるよう、引き続き支援を行いました。加盟国からのフィードバックを踏まえ、同グループは、より幅広いアクセスを確保し、各地域の国内委員会や専門家による参加を促進することを目的として、2027 年にブリュッセルでハイブリッド形式によるコーデックスに関する上級研修を実施することを提案しました。

同グループは、FSSG と試験法・規格運営グループ（MSSG）との緊密な連携の重要性を再確認し、協調的な意見提出がコーデックスに対する IDF の科学的・技術的貢献を強化することを認識しました。メンバーは、年 2 回の合同会議を維持し、両グループ間の継続的な交流を強化することに合意しました。連携の強化が特に価値をもたらす分野としては、トランス脂肪酸、牛乳乳製品用語、液体殺菌ラクダ乳に関するコーデックス規格の策定などが挙げられます。

ウェビナー活動も引き続き進めており、知識の共有や能力開発を通して会員にさらなる価値を提供しています。計画中の 10 月 14 日開催予定のウェビナー「世界標準の日」では、コーデックスに対する IDF の貢献を紹介し、会員の関与の機会に対する認識を高め、連盟全体における規格関連業務に関するコミュニケーションを強化する予定です。

FSSG は、今後のコーデックス日程を検討し、コーデックス食品輸出入検査・認証システム部会（CCFICS）およびコーデックス栄養・特別用途食品部会（CCNFSDU）への IDF 代表団を承認しました。これにより、食品偽装や乳幼児用食品など、国際規格や貿易に影響を与える可能性のある議論において酪農乳業界の代表性が継続的に確保されることとなります。

現在進行中のコーデックス関連の動向（例：食品表示委員会（CCFL）で議論されている「超加工食品」や、一般原則委員会（CCGP）の手続きマニュアルにおける IDF への言及など）を注視しており、対象を絞った関与や準備措置を計画しています。

IDF 理事会、2026 年 6 月 9～12 日、ブリュッセル（ベルギー）

IDF 理事会は、2026 年 6 月 9 日と 12 日に会合を開催しました。理事会は、2026 年 3 月 25 日から 31 日にかけてジャカルタ（インドネシア）で開催された FAO-LEAP/BRIN 国際戦略会議のフォローアップとして、インドネシアのステークホルダーからなる代表団を招き、インドネシアの酪農乳業界の動向と優先事項について発表を行ってもらい、インドネシアのリーダーと IDF 理事会との間で意見交換を行い、将来の協力の機会を特定しました。また、理事会は同日遅くに開催された第 121 回 IDF 総会に向けた文書についても検討を行いました。2026 年 6 月 12 日の理事会会議は、IDF にとって戦略的な転換点となるものであり、2026~2030 年戦略の実施、組織能力の強化、ガバナンス体制の見直し、長期的な財政的持続可能性への対応に重点を置きつつ、IDF の「会員主導かつ科学に基づく」という使命を維持することに注力しました。

第 121 回 IDF 総会、2026 年 6 月 9 日、ブリュッセル（ベルギー）

第 121 回 IDF 総会では、2025 年 12 月 31 日までの期間の年次決算、会計年度の決算の処分、2025 年度の監査報告書と免責が承認され、2026 年度予算案が最終予算として確定しました。また、ポルトガルの IDF 準会員としての加盟申請が満場一致で承認され、IDF 議事規則の改正案について採決が行われました。

IDF ガバナンス・フォーラム 2026 年 6 月 9～10 日、ブリュッセル（ベルギー）

IDF の中期ガバナンス会議が 2026 年 6 月 9～12 日にベルギーの IDF 本部で開催され、4 日間にわたり、メンバーが一堂に会して対話、考察、将来計画の策定を行いました。ガバナンス・フォーラムは、IDF 会長、SPCC 議長、事務局長による洞察に富んだ最新報告で幕を開け、共通の方向性を確

立するとともに、IDF の優先事項、進捗状況、将来の目標に関する活発な意見交換の土台を築きました。参加者は、IDF の活動の戦略的側面と実践的側面の両方を 2 日間かけて検討し、[リーダーシップ・ワークショップ、戦略に関する最新情報、科学チームからの報告](#)を通して、組織全体における現在の動向を幅広く把握しました。特に重点が置かれたのは、戦略的作業計画の具体化と、新たな専門家の発掘・迎え入れから、彼らの関与を維持し、円滑な後継者計画を支援することまでを含む、専門家育成プロセスの強化でした。各ワーキンググループがこれらのテーマを深く検討した後、報告者が全体会議で主要な考察と成果を共有し、会員全体からのアイデアがガバナンスに関する幅広い議論に確実に反映されるようにしました。フォーラムは、今後開催される IDF ワールドデーリーサミットへの展望を述べ、世界の酪農乳業コミュニティ全体における継続的な協力、知識の交換、そして共同の取り組みの重要性を強調して幕を閉じました。

IDF 各国国内委員会事務局長会議、2026 年 6 月 11 日、ブリュッセル（ベルギー）

恒例のガバナンスおよび運営事項に続き、各国委員会は 1 時間にわたる円卓会議で各国の最新状況を共有し、現在の優先事項、課題、成果について発表と議論を行いました。SPCC サブグループは、特に「人材と文化」の柱に焦点を当てた戦略計画を提示しました。また、メンバーは各国委員会の組織構造に関する事例を交換し、新任の各国事務局長を対象とした円卓会議を開催して、経験やベストプラクティスを共有しました。IDF のコミュニケーション計画が提示され、各国委員会に対し、関与の強化が呼びかけられました。

IDF 科学・計画調整委員会（SPCC）、2026 年 6 月 11 日、ブリュッセル（ベルギー）

SPCC の主な責務の 1 つは、2026-2030 年戦略に基づいて戦略的作業計画を策定することです。これは、IDF の作業計画や常設委員会の活動の計画において、特定された戦略的目標に沿う活動内容に確実に重点が置かれるようにするためです。

過去 6 カ月間、SPCC は理事会および各国委員会の代表者と協力して初稿を最終決定し、ガバナンス会議に提示しました。SPCC は、議論を踏まえて戦略的作業計画（SWP）について検討・改訂を行い、IDF 戦略的作業計画 2026-2030 を活動計画に統合することについても協議しました。各戦略的行動については、主担当機関と支援担当者を明確にし、明確な責任の所在を定める予定です。今年末までに常設委員会とのボトムアップ型の調整段階を設けることで、実現可能性、整合性、主体性を確保します。

新たな戦略に伴い、新しい戦略目標を反映させるために新規作業項目提案書の様式を改訂することとなりました。SPCC はこの機会を捉え、戦略的な整合性、明確性、品質、リソース計画の向上を図るため、専門家からの情報提供と関与のレベルを高めるさらなる変更をしました。SPCC は、年次提出期間を年末の会議に合わせて調整すること、年 2 回の提出期間を設ける可能性についても支持しました。これは、この新規作業項目（NWI）提案がスタッフや NC に課す業務負荷を考慮しつつ、より柔軟性と迅速な対応を可能にするためです。スケジュールについては近日中に通知されます。

専門家およびスタッフのキャパシティが限られていることを踏まえ、業務負荷の管理と優先順位付けについて議論が行われました。SPCC は、2027 年の本サイクルにおける IDF 優先プロジェクトを特定するための現行プロセスを継続することに合意するとともに、優先順位付けよりも IDF の付加価値を伝えることに重点を置くべきであるとの認識のもと、プロセス改善のためのサブグループを設置することとしました。

IDF の研究成果を査読付き学術誌に掲載するための手順が明確化され、今後「作業部会向け IDF ガイダンス」としてさらに正式に策定されることとなりました。

SPCC は、改訂された「規格・表示常設委員会（SCSIL）」の目的、食品衛生常設委員会（SCFH）によるブドウ球菌エンテロトキシンに関するファクトシート、分子手法に関する IDF プリテンを、合意済みの修正を条件として承認しました。修正内容は AT リーダーに伝達されます。

また、SPCC は、栄養・健康常設委員会が、当該分野の関連出版物について議論するために毎月「ジャーナルクラブ」を開催することに合意しました。

SPCC による調整を要する議論のトピックには、以下が含まれます。

- ・ 超加工食品：IDF の複数の常設委員会がこのトピックを IDF による対応が必要な課題として特定したものの、具体的な提案はまだ提出されていませんでした。SPCC はいくつかの提案を抽出し、SPCC のサブグループがこれらを活用して、現在の課題に対応するために IDF が当該分野でどのような行動を取れるかを定義する新たな特別作業部会の設立に向けた目標を策定することとしました。議長の選定も必要となります。
- ・ IDF クラウド上に、生物多様性を最初のテーマとして会員限定のナレッジリポジトリを構築する可能性：具体的な提案は関連委員会によって策定される予定です。
- ・ IDF 理事向けの主要な酪農乳業トピックに関するハイレベルの Q&A 資料：SPCC は内容をさらに検討しますが、詳細度や必要な更新が課題となっており、第一段階ではこの文書をより広く公開することはできない見込みです。

今回の SPCC 会議は、11 月 11 日にニュージーランドのオークランドで開催されることが確定しました。

作業計画

農場管理常設委員会（SCFM）、2026 年 4 月 21 日、オンライン開催

ISO モニタリング：搾乳機および搾乳方法：2022 年に完了した 5 年ごとの見直しに基づいて当該 ISO 規格の改訂作業が進められています。この改訂は、成果ベースのアプローチと搾乳時間試験にさらに重点を置き、いくつかの IDF 情報ブリテンの作成に裏打ちされた規格の近代化を目的としています。現在、専門家の公募が行われており、2026 年を通して草案のさらなる作成が進められる見込みです。

最新の搾乳システムにおけるミルクライン、エアライン、真空ポンプのサイズ選定に関する性能ベースのガイドライン策定アクションチーム：同アクションチームは、最新のシステムを反映する性能ベースの改定ガイドライン策定に向けた作業を引き続き進めています。草案の内容は技術的レビューのために回覧されており、2026 年末までの最終化を目指しています。

6 月 4 日に「次世代酪農家」に関するウェビナーが開催されました（[こちら](#)をご覧ください）。現在、IDF ワールドデリーサミット 2026 における「酪農家円卓会議」の準備が進められています。この会議では、IDF 加盟各国から酪農家が一堂に会し、将来（2050 年）を見据えた視点から、強靱で持続可能な酪農システムに向けた政策の道筋について議論し、主要な優先事項と提言を特定する予定です。

IDF 農場経営ポッドキャスト：ポッドキャスト活動は拡大を続けており、最近では[農場レベルでのメタン問題](#)や「[酪農乳業の未来を牽引する女性たち](#)」をテーマとしたエピソードが公開されました。「酪農乳業における女性農家」シリーズのさらなる展開に向けた作業が進められており、中南米からの講演者をさらに確保することを検討しています。

乳業科学・加工技術常設委員会（SCDSPT）、2026 年 4 月 23 日、オンライン開催

本委員会では、「乳製品の副産物の価値向上」と「持続可能な食品加工技術」という 2 つの新たな取り組みが導入されました。

両アクションチームとも、活動を始めたばかりで、現在プロジェクトの体制整備段階にあります。

2028 年の次回 IDF チーズ科学技術シンポジウムの開催に関する提案が、アイルランドの国内委員会から寄せられました。常設委員会は会議においてこの提案を承認しました。正式なイベント提案書が SPCC に提出され、承認される予定です。

次回会議は、11 月 14 日（土）14:00-18:00、オークランド（ニュージーランド）で開催される IDF ワールドデーリーサミット期間中に開催されます。

食品添加物・汚染物質分析法常設委員会（SCAMAC）、2026 年 5 月 6 日、ベルン（スイス）

ISO 24141 / IDF 262「動物用医薬品の規格における分析証明書の使用に関する指針」に関するプロジェクトが投票段階（ISO/IDF 質問状による DIS 投票）に入りました。IDF アンケートが、2026 年 7 月 9 日を期限とする投票のために各国委員会に配付されています。これは、規格の公表に向けたプロジェクトの最終段階の一つです。

委員長のハンス・クライセン氏（オランダ）と副委員長のジョナサン・ドレイヤー氏（米国）が任期の第 1 期を満了し、第 2 期への再任資格を有していたため、委員会は満場一致で両名の再選を決定しました。

成分分析法常設委員会（SCAMC）、2026 年 5 月 7 日、ベルン（スイス）

前回の SCAMC 会議は、5 月 7 日にスイス・ベルンで開催された IDF/ISO 分析ウィークの期間中に開催されました。

委員らは、牛乳乳製品の組成、品質、正統性、規制順守、貿易を支える IDF/ISO 分析法全般において著しい進展があったことを確認しました。試料前処理、タンパク質の消化率、焦げ付き粒子、尿素、固定灰分、脂肪酸組成、滴定酸度、カゼイン窒素、デュマ法による窒素、pH、脂肪含有量、塩酸の標準化に関する分析法を含め、いくつかの規格が公表または改訂に向けて進展しています。

試験所間共同研究は引き続き重要な優先事項であり、カゼイン窒素、乳脂肪の滴定酸度、遊離脂肪酸、関連する方法に関するプロジェクトが進行中、あるいは準備段階にあります。メンバーに対し、特に追加の参加や主導役を必要とするプロジェクトについて、試験所や専門家を推薦するよう呼びかけられました。

コーデックス関連の活動には大きな注目が集まり、特に、殺菌ラクダ乳および混合乳製品を対象とする策定中の規格に対する分析の支援が取り上げられました。ラクダ乳に関する「脂肪分を除く固形分」および「 β -ラクトグロブリン」の規定案の科学的根拠について懸念が示された一方で、生乳中の脂肪酸との不一致、丸め処理、混合製品の成分要件、ラクダ乳の正統性に関する新たな検討が開始されました。

また、委員会は、AOAC、ICAR、ISO、CCMAS、その他の IDF 機関との連携活動についても検討し、整合性を確保し、重複を回避しました。委員らは、規格における正確な用語の重要性を強調するとともに、低・無乳糖製品、アイスクリームの融解抵抗性、粉乳中の脂肪測定、不純物の同定など、新たな取り組みが必要ないくつかの作業分野を特定しました。

リチャード・ジョンソン氏とケビン・ヴァン・クリーフ氏が満場一致で委員長および副委員長に再選され、さらに 2 年間の任期となりました。次回の「成分分析法常設委員会（SCAMC）」のオンライン会議は 2026 年後半に予定されており、次回の対面またはハイブリッド形式の会議は、2027 年にレーワルデン（オランダ）で開催される「IDF/ISO 分析ウィーク 2027」期間中に予定されています。

試験室統計・品質保証常設委員会（SCLSQA）、2026 年 5 月 6 日、ベルン（スイス）

本会議において、委員会はアクションチーム S01「分析データの統計学 - 他の MAS プロジェクトグループによる試験室間比較試験の結果」の活性化について議論しました。試験室間共同研究のすべてのプロトコルは実施前にこのアクションチームによる審査を受ける必要があるため、同チームは分析分野の常設委員会にとって極めて重要なグループです。残念ながら、現在このグループを支えている専門家はごくわずかであり、主要な貢献者の 1 人がまもなくこの役割を退くことになっています。そのため、委員会は、この重要な業務に貢献していただける追加の専門家を早急に確保す

る必要性を強調しました。統計学の専門知識をお持ちのメンバーは、カジャ・シセ氏 (Kcisse@fil-idf.org) までご連絡ください。

まもなく、IDF 質問状 2 件が各国委員会に配付され、投票が行われる予定です。これらは、ISO 13366「体細胞数の測定」の第1部および第2部の改訂に関するものです。

酪農微生物学的手法常設委員会 (SCMDM)、2026 年 5 月 7 日、ベルン (スイス)

最近発生したセレウリドを含む乳児用調製乳の集団感染およびリコールへの対応として、ISO 18465「食品チェーンの微生物学 – LC-MS/MS を用いた嘔吐性毒素 (セレウリド) の定量」を改訂することが決定されました。IDF は、この作業を担当する委員会である ISO/TC 34/SC 9 との連携を通して、本規格の改訂に貢献します。

現在、2 つのマルチラボ研究への参加募集が行われています。

アクションチーム D18: [ISO 10932 / IDF 223 「乳・乳製品ービフィズス菌、非腸球菌性乳酸菌 \(LAB\)、プロピオニバクテリウムに適用される抗生物質の最小発育阻止濃度 \(MIC\) の測定」](#) の改訂

アクションチーム H23: [ISO 6611 / IDF 94 'Milk and milk products—Enumeration of colony-forming units of yeasts and/or moulds—Colony-count technique at 25 ° C](#) これは、ISO/TC 34/SC 9 における ISO 21527 改訂シリーズ (水平 ISO 規格への改訂) に組み込まれる予定です。

最近の刊行物:

[IDF ブリテン No. 538/2025: ヨーグルト中の特徴的微生物の計数に関する試験所間共同研究 ISO/TS 11059 | IDF/RM 225 - 乳・乳製品ーシュードモナス属 \(Pseudomonas spp.\) 菌の計数法](#)

次回会議: 12 月 3 日 11:00-14:30、オンライン

マーケティング常設委員会 (SCM)、2026 年 5 月 11 日、モントリオール (カナダ)

SCM は、IDF 2026-2030 年戦略の実施への貢献について議論し、特に、科学に基づくコミュニケーションの支援、会員の関与の強化、そして急速に進化する AI 主導の情報環境における乳業の専門知識の確立に焦点を当てました。同委員会は、人工知能プラットフォームによる発見性と引用を最適化するための取り組みや、AI 対応の新しいウェブサイトの開発計画など、IDF の「AI ファースト」コミュニケーションアプローチについて検討しました。

SCM と SCAHW の合同アクションチームは、家畜の健康と福祉に関するコミュニケーション活動を引き続き進めています。消費者向けメッセージに関する世界的な調査に基づき、メンバーは、参加を促進し、エビデンスに基づくコミュニケーションリソースの開発を強化するためのさらなるアウトリーチ活動を支援することで合意しました。

「乳マトリクス」イニシアチブが引き続き進展しています。現在、各国の国内委員会が、国際的なベストプラクティスとの整合性を保ちつつ、地域ごとのコミュニケーションに合わせて活用できる、科学に基づく簡潔なメッセージマップの作成に注力しています。オークランドでの会合に先立ち、その最終化を予定しています。

「植物主体の食事構成における牛乳乳製品の位置づけ」に関する新規作業項目が提示されました。このプロジェクトは、牛乳乳製品を植物主体の食事構成における補完的な要素として位置づける、科学に基づいたコミュニケーションの枠組みを構築することを目的としており、代替ではなく「含めること」に重点を置いています。

SCM と酪農政策・経済常設委員会 (SCDPE) の合同プロジェクトとして、「グローバルマーケティングトレンド」の取り組みを再始動させるための作業が進められています。その目的は、データ収集の近代化を図り、世界の酪農乳業界における変化する消費者行動、市場動向、競争圧力に対する

理解を深めることです。成果は、インドで開催される「IDF ワールドデーリーサミット 2027」で発表される見込みです。

委員会は、学校給食プログラムに関する SCM-SCNH の共同作業の進捗状況を見直ししました。この取り組みでは、各国が学校牛乳や学校給食の取り組みを確立・拡大できるよう、実践的なガイダンスやベストプラクティスの事例を策定しています。最初の成果は 2026 年末までに得られる見込みです。

クリスティン・レイトン氏（南アフリカ）とパメラ・ナレワジェク氏（カナダ）が、SCM の委員長および副委員長として満場一致で再選され、任期が延長されました。

議事録案は[こちら](#)をご覧ください。

国際ミルクプロモーション（IMP）会議、2026 年 5 月 12~13 日、モントリオール（カナダ）

IMP のメンバーは、各国の事例研究やマーケティング・キャンペーンの事例を共有しました。

メンバーは、ネットワーク全体での専門能力開発と知識の交換を強化するための「IMP アカデミー」の設立について議論しました。想定される活動には、スタッフ交換の機会、新たなトピックに関するウェビナー、各国の事例研究やベストプラクティスの共有などが含まれます。この構想をさらに具体化するため、スイス、ノルウェー、オーストラリア、米国の代表者が協力して取り組むこととなりました。

「IMP AI ワーキンググループ」がこれまでの進捗状況を報告し、メンバーは、AI が生成する検索・情報プラットフォームにおいて牛乳乳製品科学やエビデンスに基づく牛乳乳製品情報が正確に反映されるように引き続き協力していくことを合意しました。現在の取り組みでは、持続可能性に関連するコンテンツに重点を置きつつ、栄養、健康、ウェルネスに関するコミュニケーションの機会についても模索しています。

IMP は、グローバル・デーリー・プラットフォーム（GDP）および IDF マーケティング常設委員会との連携強化を目的とする 3 カ年会議計画案について協議しました。メンバーは、2027 年は GDP-IMP 合同会議の形式を維持することを支持し、これとは別に、将来的に IDF/SCM と IMP だけの会議を加盟国で開催する可能性について検討することを支持しました。

食品衛生常設委員会（SCFH）、2026 年 5 月 18 日、オンライン開催

SCFH は、2025 年 10 月の議事録を修正なしで承認しました。

2026 年の主な優先事項は、引き続き水の使用・再利用に関するガイドライン、加工環境のモニタリング、食品培養菌・規制状況です。

合意された主な行動：世界的な水利用調査の開始、第 1 回水に関するブリテンの最終化、ブドウ球菌に関するファクトシートの公表、リステリアおよび食品培養物に関する資料の進捗、年末までの加工環境モニタリングガイダンスの最終化。

コーデックス関連の作業が中心であり、これには水の再利用に関するガイダンス、リステリアに関するガイダンス、アレルゲン表示、ラクダ乳製品、「牛乳および乳製品に関する衛生実務規範」の見直しが含まれます。

リーダーシップおよび計画に関する最新情報：ポール・スミス・バウン氏が水の再利用に関するアクションチームのリーダーとして承認されました。新たに設置されるアクションチームがコーデックスの衛生規範の見直しを行うほか、2026 年および 2027 年のワールドデーリーサミットにおける食品安全セッションの計画が継続されています。

次回会合は、2026 年 11 月 13 日にオークランド（ニュージーランド）にて、ハイブリッド形式で開催します。

規格・表示常設委員会（SCSIL）、2026 年 5 月 27 日、オンライン開催

「コーデックス牛乳乳製品用語使用に関する一般基準（GSUDT）」の保護・推進に関するアクションチーム：現在進行中の作業には、GSUDT に関する改訂版ブリテンの最終化（[こちら](#)を参照）、GSUDT の各国における実施状況に関する IDF の最新グローバル調査の開始（締め切り：7 月 31 日、[こちら](#)を参照）、および影響力と関与を強化するためのウェビナーやツールキットなどの補完的活動の検討が含まれます。

「コーデックス液体殺菌ラクト乳規格」の策定：IDF が技術的知見を提供した同規格の初稿策定に関する進捗が報告されました。まもなく、コーデックスの加盟国およびオブザーバーからの意見募集を目的とするコーデックス回覧書が配布される予定です。CCMMP 会合は、9 月 29 日から 10 月 29 日まで書面による審議形式で開催されます。

食品添加物に関しては、IDF が酪農乳業界向けの「コーデックス食品添加物一般基準」に関するガイダンスを公表しました（[こちら](#)を参照）。次のステップとして、牛乳および乳製品の商品規格における新規添加物に関する IDF の見解を策定する予定です。

トランス脂肪酸に関して、IDF は、今年初めに開催されたコーデックス油脂部会（CCF0）の会合などのコーデックスの動向を引き続き注視しながら貢献しています。同グループでは、次のステップとして IDF の見解文書を作成する可能性について議論しました。

SCSIL は、添加物に関する取り組みを組み込み、整合させる形で、その目的を更新しました。

議事録案は[こちら](#)をご覧ください。

家畜の健康・福祉常設委員会（SCAHW）、2026 年 5 月 28 日、オンライン開催

2026 年版の IDF アニマルヘルスレポートは、人獣共通感染症に焦点を当てています。論文の募集が開始されており、締め切りは 9 月 1 日です。テンプレートは[こちら](#)を参照のこと。

選択的乾乳期療法に関する提言のためのアクションチーム（AT）：実践の検証、課題の特定、責任ある抗菌薬の使用の促進を含め、選択的乾乳期療法に関する世界的に調和のとれたガイドラインの策定に向けた作業が進められています。

「ICAR-IDF 合同センサー・イニシアチブ」における継続的な協力が進展しています。この協力により、「[反芻に焦点を当てた機能的形質に関する『センサーに基づく行動情報』に関する Wiki ガイドライン](#)」が作成され、ICAR-IDF の「[体況スコア評価](#)」ガイドラインの策定にも寄与しました。これらはいずれも ICAR の Wiki ページに掲載されています。2026 年 6 月 1 日にヴェローナでメーカー各社とのワーキンググループ会議が開催され、続いて 6 月 2 日には ICAR 会議の一環として専門ワークショップが行われました（ワークショップで作成された資料は[こちら](#)をご覧ください）。現在の取り組みは、群管理および繁殖におけるセンサーデータの活用に関する検証プロトコルの策定に重点が置かれています。

出生から離乳までの仔牛を対象とする、給餌、飼育環境、抗菌薬の使用、福祉上の考慮事項を取り上げたファクトシートの作成が進められています。

ヤギ乳の体細胞数に関する IDF ブリテンの草案が現在審査中であり、今年後半に発行される予定です。ブリテンの発行に合わせてウェビナーも公開される予定です。

議事録案は[こちら](#)をご覧ください。

酪農政策・経済常設委員会（SCDPE）、2026 年 5 月 28～29 日、ロンドン（英国）

『世界の酪農状況報告書』：2026 年版の作成作業が進められており、各国へ質問状が配付されています。2027 年以降は、同報告書を内部で作成する予定であり、現在、専任のデータアナリストの選考プロセスが進行中です。

各国報告書の作成は、引き続き SCDPE 活動の重要な柱となっています。2026 年以降の各国最新情報をまとめたファクトシートが公開されました（[こちら](#)からご覧いただけます）。

乳業施設登録の概要に関するアクションチームは、各国における乳業施設登録の取り扱い状況に関する内部報告書を完成させました（[こちら](#)からご覧いただけます）。

小売行動規範：牛乳乳製品市場に影響を与える規制の枠組みや慣行に関する分析作業が進められており、年末までに最終的な内部報告書が作成される見込みです。

IDF ウェビナーシリーズ：アクションチームは活動を再開し、現在、IDF ネットワーク全体での経済・政策に関する知見の普及を強化するため、新たなウェビナーの開催を検討しています。

議事録案は[こちら](#)をご覧ください。

環境常設委員会（SCENV）、2026 年 6 月 1 日、オンライン開催

液体および固形廃棄物の処理：アクションチームは、廃棄物管理専用のウェブページの作成を進めています。このページには、インフォグラフィックや、酪農乳業セクター全体における実践的なアプローチを示す一連のケーススタディが掲載される予定です。同ウェブページは今後数カ月以内に公開される見込みです。[こちらのテンプレート](#)を使用した寄稿を引き続き募集しています。

「酪農乳業の持続可能性見通し」第 10 号は、家畜の健康と環境の持続可能性の交差点に焦点を当てます。記事の募集が開始されており、投稿締切は 9 月 15 日となっています。寄稿者は、[記事テンプレート](#)に従ってコンテンツを提出してください。

「IDF 酪農乳業界向けウォーターフットプリント手法ガイド」の更新：最近の方法論の進展を反映し、ISO 14046 に準拠させ、対象範囲を乳業加工分野まで拡大することを目的として、IDF ブリテンの改訂作業が進められています。改訂版ブリテンは、今年の主要な成果物として発表される予定です。

生態系サービスに関しては、アクションチームが酪農乳業システムにおける生態系サービスに関するファクトシートを作成中です。2026 年の IDF ワールドデューリーサミットに先立ち、公開される見込みです。

LCA 関連の作業：LCA 開発モニタリンググループは、GLEAM などの FAO ツールとの連携を含め、方法論の策定や事例研究を引き続き推進しています。乳牛のメタン排出量における遺伝的変動の定量化に関する作業は、科学的検証を通して進展しており、温室効果ガス（GHG）算定手法への統合を支援することを目的としています。「GHG プロトコル：土地セクターおよび除去ガイダンス（LSRG）—酪農乳業セクターのための標準化マス・バランス・チェーン・オブ・カストーディ」方法論に関するアクションチームについては、プロジェクトの第 1 フェーズが完了し、現在見直しをしています。このフェーズでは、酪農乳業に関連する方法論的枠組みの策定に重点が置かれました。第 2 フェーズでは、より複雑なバリューチェーンに取り組み、本プロジェクト全体を通して、温室効果ガス算定ガイダンスに貢献する実質的な成果が得られるものと期待されます。

環境に優しい乳業加工のための革新的な実践—冷媒：冷媒およびエネルギー使用に関連する環境影響と規制動向の新たな取り組み。

酪農乳業界の生物起源炭素循環：酪農乳業システムにおける生物起源排出量および炭素フローを理解するための科学に基づく枠組みを提供する提案を現在作成中です。

議事録案は[こちら](#)をご覧ください。

残留物質・化学汚染物質常設委員会（SCRCC）、2026 年 6 月 19 日、オンライン開催

残留物質・化学汚染物質常設委員会では、残留物、化学汚染物質、分析上のニーズ、コーデックス関連の動向に焦点を当て、世界の酪農乳業界に関連する現在および新たな食品安全上の優先事項について検討しました。

議論された主なトピックには、PFAS、鉱物油系炭化水素、マイクロプラスチックおよびナノプラスチック、マイコトキシン、塩素酸塩、ダイオキシン、セミカルバジド、メタン低減添加物、サリチル酸、グルホシネートなどがありました。

委員らは、これらの物質の発生状況、モニタリング手法、牛乳乳製品への潜在的な影響に関する各国・地域の情報を交換し、SCRCC の今後の優先課題設定に資する情報を提供しました。

「化学汚染物質に関するナレッジ・プラットフォーム」および「酪農場から加工までの過程における新たなリスクの予防的管理に関するガイダンス」の下で、引き続き進展が見られました。完成した成果物には、塩素酸塩、有機塩素残留物、マイクロプラスチック、PFAS に関する IDF のリソースが含まれます。

現在進行中の作業には、鉱物油系炭化水素、メタン低減添加物、有機酸やその他の殺菌剤由来の残留物に関する文書が含まれています。鉱物油系炭化水素に関する文書は作成が大きく進んでいるため、今後数カ月以内に SCRCC のメンバーに共有され、検討が行われる見込みです。

委員会は、硝酸塩および亜硝酸塩、飼料中のアフラトキシン B1、食品包装材における再生プラスチック、牛乳中の動物用医薬品残留物および農薬の最大残留基準（MRL）に関する作業を含め、牛乳乳製品に関連するコーデックスの動向について検討を行いました。

IDF は、これらのコーデックスにおける議論を引き続き注視し、関連文書が公開され次第、意見表明や技術的提言の必要性を評価していきます。

標準化の必要性についてさらに検討を進めるため、会員各位には、グルホシネートのモニタリングプログラム、検出限界、分析法に関する情報の提供をお願いいたします。

次の SCRCC 会合は、2026 年 11 月 13 日（金）、オークランドで開催される「IDF ワールドデーリーサミット 2026」の期間中に、ハイブリッド形式で予定されています。

栄養・健康常設委員会（SCNH）、2026 年 6 月 23 日、ユトレヒト（オランダ）

食品ベースの食事ガイドライン：各国からの最新情報を共有する定期的なウェビナーの支援があり、グローバルデータベースのパラメーターの検証および一貫したデータ収集のための指針策定において進展が見られました。今後のステップには、データの分析と可視化が含まれており、将来的にはインタラクティブなダッシュボードの開発を目指しています。また、アクションチームは、この取り組みを SCNH 内に持続的に統合・維持する方法を定義する予定です。

学校牛乳プログラム：各国が学校牛乳プログラムを設計・実施するのを支援するための総合的な IDF 枠組みの草案作成において、著しい進展が見られました。「世界学校牛乳デー」に向けた専用ウェビナーの準備が進められています。

健康的な加齢における牛乳乳製品の役割：初期のエビデンスマッピングが完了し、優先課題が特定されました。今後のステップには、アクションチームとの連携による方法論の精緻化、研究の質の評価、科学的根拠を強化するための成果物の作成などがあります。

WHO を重点とする栄養に関するアドボカシー：進捗状況としては、WHO の優先課題の特定、関与の枠組みの策定、最初の内部向けブリーフィングペーパーの作成などがあります。今後のステップとしては、各国レベルでの WHO との関与を支援するためのブリーフィングペーパーの最終化と、より効果的なモニタリング・追跡ツールの開発などがあります。

議長（エリカ・ホッキング氏、英国）および副議長（モイセス・トーレス＝ゴンザレス氏、米国）が、さらに 2 年間の任期で再選されました。

特別作業部会

温室効果ガス削減戦略特別作業部会（TF GHGMS）

2026 年 3 月に発足した IDF 温室効果ガス削減戦略特別作業部会は、温室効果ガス削減に関する IDF の完了済みおよび進行中の取り組みの概要を策定し、課題を特定し、将来の優先事項の策定に資することを短期的かつ重点的な任務としています。関連する IDF の取り組みに関する AI を活用した内部レビューは完了しており、調査結果を検証し、さらなる課題を特定するために、IDF のリ

リーダーシップグループを対象とする内部アンケートを配付しました。この分野における他団体の取り組みとの整合性を確保し、重複を避けるために、外部ステークホルダーとの協議が今後行われる予定です。目標は、2026年のIDFワールドデーリーサミットまでに可能な限り進捗を積み重ね、ロードマップを2027年初頭に最終決定することです。

持続可能性の行動・調整・推進に関するデーリー・パリ宣言特別作業部会 (TF PDDS)

当特別作業部会は、本四半期、イニシアチブの認知度を高めるため、専用のコミュニケーション戦略の策定に注力しました。各国委員会に対し、PDDSの枠組みに沿った現地のサステナビリティ・イニシアチブや定量化されたコミットメントを特定・提出し、近日中に更新される「[定量化されたコミットメントの現状把握](#)」文書に盛り込むよう[協力を要請](#)しました。[PDDSのウェブページ](#)には、このプロセスを円滑に進めるためのコミットメントオンライン提出ツールが掲載されています。

タンパク質移行における牛乳乳製品の役割に関する特別作業部会 (TF PDPT)、2026年3月31日、オンライン開催

当特別作業部会は、タンパク質移行に関する既存のファクトシート（[こちら](#)を参照）が技術的に妥当であることから、改訂を行わないことで合意しました。利用率が低かったのは、内容の是非ではなく、適合性によるものと判断されました。

食料システムにおける牛乳乳製品の役割に関する改訂版の概念骨子が、FAOの観点や動物由来食品摂取の別の側面を軸に議論され、組み立てられました。

同グループは、より明確な定義、より強固な科学的裏付け、専門家によるエビデンスの提示など、さらなる精緻化が必要であることを強調しました。

主要な成果物として、主要なテーマ分野に係る複数の作業部会の支援を得て、査読付きの見解論文を作成することで合意しました。

議事録草案は[こちら](#)をご覧ください。

アドボカシー

コーデックスへの貢献

コーデックス食品表示部会 (CCMAS)、2026年5月11～15日、オタワ (カナダ)

コーデックス食品表示部会の前回の会合に関するIDFオブザーバー報告書は、IDFクラウドで閲覧可能です (<https://cloud.fil-idf.org/f/10881099>)。

コーデックス食品表示部会 (CCFL) は、5月11日から15日にかけて、オタワ (カナダ) で第49回会合 (CCFL49) を開催しました。CCFL49には、69の加盟国、1つの加盟組織、29のオブザーバー組織が参加しました。IDFからは、ニック・ガードナー氏 (米国)、マット・モリソン氏 (カナダ)、チャトゥリカ・ダヤナンダ氏 (カナダ)、アナベル・ムレット・カペロ氏 (IDF) が代表として出席しました。

今回のCCFL会合における酪農乳業界に関連する主な成果は以下の通りです。

- ・食品アレルギー表示: CCFLは「予防的アレルギー表示 (PAL) の使用に関するガイドライン」を「包装済み食品の表示に関する一般基準 (CXS 1-1985)」の附属書として提出し、CAC49においてステップ8で最終採択されることに合意しました。
- ・緊急事態における表示規定: 緊急事態において安全かつ適切な表示の柔軟性を支援するための高水準の原則を定めたガイドライン草案が、ステップ5/8での最終採択に向けCAC49に提出されました。
- ・マルチパックおよびジョイントプレゼンテーション: マルチパックおよびジョイントプレゼン

ンテーションに関する表示規定について、「包装済み食品の表示に関する一般基準」の改定案も、ステップ 5/8 における最終採択に向けて CAC49 に付託されました。

- ・ 今後の作業と戦略的方向性： CCFL は、既存の文書の見直し、新たな課題の特定、能力構築活動、今後の作業の優先順位付けを含む戦略的将来計画に関する討議文書を作成し、CCFL50 の検討に付すことに合意しました。
- ・ 小容量包装（栄養表示）： 「栄養表示に関するガイドライン（CXG 2）」における「小容量包装」の定義に関するさらなる作業が継続され、CCFL50 に先立ち、意見募集のために討議文書およびプロジェクト文書の改訂版が回覧されることとなりました。
- ・ 超加工食品の定義に関する新たな作業が、欧州栄養士協会連盟（European Federation of the Associations of Dietitians）から回覧書を通して提案されましたが、裏付けとなる文書の欠如、定義に関する合意の欠如、委任事項との関連性が不明確であることから、作業は時期尚早であると判断されました。このトピックは、CCFL の将来の作業候補一覧表には追加されませんでした。

コーデックス食品添加物部会（CCFA）、2026 年 4 月 13～17 日、重慶（中国）

コーデックス食品添加物部会の前回会合に関する IDF オブザーバー報告書は、IDF クラウドで閲覧可能です：<https://cloud.fil-idf.org/f/10855181>

IDF は、中国・重慶で開催された食品添加物コーデックス委員会第 56 回会合（CCFA56）に参加しました。CCFA56 には、64 の加盟国、1 つの加盟組織、24 のオブザーバー組織が参加しました。IDF からは、クリスチャン・カストラップ氏（デンマーク）、小松恵徳氏（日本）、アナベル・ミュレ氏（IDF）が代表として出席しました。また、IDF の専門家であるキャシー・チャン氏（ニュージーランド）も、ニュージーランド代表団の一員として同席しました。

今回の CCFA 会合において酪農乳業界にとって注目すべき主な成果は以下の通りです。

- ・ CCMAS 第 44 回会合における、チーズおよび類似食品のカテゴリーを含む硝酸塩/亜硝酸塩の数値的基準に関する回答が確認され、さらなる検討のため GSFA EWG に付託されました。
- ・ 乳製品カテゴリーに関連するアスコルビルパルミテート（INS 304）、アスコルビルステアレート（INS 305）、ジェランガム（INS 418(ii)）を含む 4 つの添加物が、GSFA への追加・改訂対象として特定され、GSFA EWG に付託されました。
- ・ ポリグリセリン酸脂肪酸エステル（INS 475）に関する改訂が、JECFA の曝露に関する助言を反映して合意されました。乳製品の規定の大部分は維持され、一部の改訂案は採択のために CAC に送付されました。
- ・ 微結晶セルロース（INS 460(i)）を着色料として分類する提案は、さらなる評価のために GSFA EWG に付託され、その潜在的な影響および必要な GSFA 改正の評価が完了するまで、INS への掲載は延期されることとなりました。
- ・ CCFA の今後の作業： GSFA が最優先事項であることが再確認されました。CCFA は、回覧書を通して食品カテゴリーおよび注記に関する課題を収集し、討議文書を通して二次添加物についてさらに検討することに合意しました。
- ・ 細胞由来食品の製造に使用される細胞培養培地成分の食品安全評価の実施に関するガイドライン策定に向けた新たな作業を開始することについては合意に至りませんでした。代わりに、EWG を通して議論を継続し、範囲と科学的要件を精緻化することとなりました。

次の CCFA 会合は、2027 年 4 月 12 日から 16 日にかけて開催される予定です（開催都市は未定）。

家畜の健康への共同投資アプローチに関する WOA 総会への IDF の参加、2026 年 5 月 18～22 日、パリ（フランス）

第 93 回国際獣疫事務局（WOAH）年次総会が 2026 年 5 月 18 日から 22 日までパリで開催され、

「すべての人の未来を守るための家畜の健康への投資」について議論されました。本総会の一環として開催された家畜の健康フォーラムにおいて、IDF 事務局長のローレンス・ライケン氏が「バリューチェーンにおける費用の公平な配分のための共同投資と利益配分」をテーマとするハイレベル円卓会議（技術パネル 4）に参加しました。議論には、国際的なステークホルダーが一堂に会し、家畜健康システムにおける共同投資および費用分担メカニズムの構築方法について検討が行われました。特に、官民の責任の調整、費用と利益の公平な配分の確保、多様な状況下での持続可能な投資の実現が論点となりました。ローレンス・ライケン事務局長は、酪農乳業バリューチェーンの観点から、小規模農家を統合し、官民パートナーシップを促進し、家畜の健康と福祉の長期的な改善を支援すると同時に、業界全体での拡張性と価値の共有を確保するインセンティブに基づくモデルを構築する総合的なアプローチの重要性を強調しました。

UNFCCC SB64、2026 年 6 月 8~18 日、ボン（ドイツ）

UNFCCC 補助機関の第 64 回会合（SB64）が、COP31（アンタルヤ（トルコ））に先立つ最後の主要な技術会合としてボンで開催されました。本会合は、気候変動に関する公約の実施推進をテーマとしましたが、緩和、適応資金、農業、貿易といった主要分野における政治的対立が継続したため、進捗状況はまちまちでした。

IDF は、農業および畜産が気候政策にますます統合されつつある議論にて、酪農乳業界の代表として参画しました。同組織は、「シャルム・エル・シェイク共同作業」の下で行われている農業および食料システムに関する継続的な意見交換に貢献し、農家の生計、食料安全保障、持続可能な生産性を支える、科学に基づきながら状況に応じたアプローチの重要性を強調しました。

主要な議論では、緩和、適応、資金、技術、公正な移行が取り上げられました。農業は依然としてデリケートなテーマであり、手続き上の成果以外での合意は限定的であったものの、各国の計画における認識は高まりつつあります。酪農乳業分野にとっての主な影響としては、メタン排出に対する継続的な精査、測定・報告に対する期待の高まり、そして緩和、適応、投資準備に関するエビデンスを強化する必要性が挙げられます。また、成果からは、第 6 条のメカニズム、特に非市場アプローチや将来的な方法論の開発への関与の機会も示唆されています。

2026 年ローマ栄養ウィーク、2026 年 5 月 25~28 日、ローマ（イタリア）

イヴァナ・ガンドルフィ氏（イタリア）が IDF を代表して本イベントに参加しました。同氏は、栄養成果が農業・食料システム全体の変革に依存するものとして位置づけられ、食品という視点から食料システムという視点への転換が一貫して強調されていたと報告しました。また、システム的アプローチ、イノベーション、食料システムに基づく食事ガイドライン、学校給食、社会的保護、食品ロス・食品廃棄の重要性を強調しました。

2026 年世界牛乳の日：酪農乳業に携わる女性を称える、2026 年 6 月 1 日、世界規模

「世界牛乳の日」（6 月 1 日）に際し、IDF はグローバル・デリー・プラットフォーム（GDP）との連携キャンペーンに世界中の酪農乳業コミュニティと共に参加し、人々、地域社会、持続可能な食料システムに対する酪農乳業の貢献を強調しました。この世界的な祝賀の一環として、IDF のキャンペーンでは「酪農乳業における女性」を強調し、酪農家や獣医師から科学者、チーズ職人、広報担当者、業界リーダーに至るまで、世界各地の酪農乳業バリューチェーンで活躍する女性たちを紹介しました。この取り組みは、女性のエンパワーメント、栄養、生計、地域社会の発展に対する同業界の貢献を強調するとともに、FAO が主導する「国際女性農家年（IYWF 2026）」の提案を支援するものでした。本キャンペーンでは、リアルなストーリーや多様なロールモデルを通して、酪農乳業が女性に機会を創出すると同時に、農村コミュニティと食料安全保障を強化している実態を示しました。

世界的な酪農乳業コミュニケーションの強化：SCM および IMP-GDP 会議、2026 年 5 月 11～15 日、モントリオール（カナダ）

IDF マーケティング常設委員会（SCM）は、**国際ミルクプロモーショングループ（IMP）とグローバル・デリー・プラットフォーム（GDP）**との合同で、モントリオールで会議を開催し、世界的に科学に基づく酪農乳業に関するコミュニケーションの推進に取り組む組織間の連携を強化する貴重な機会を創出しました。議論は、新たな消費者動向、人工知能、酪農乳業の持続可能性に関するコミュニケーション、当分野に影響を与える重要課題における連携強化の機会を中心に展開されました。参加者らは、知識の共有、専門能力開発、各国の酪農乳業団体を支援できるコミュニケーションリソースの開発に関する今後の協力についても検討しました。会議では、地域の実情に合わせたメッセージ発信の必要性を認識しつつも、グローバルな方向性の統一の重要性が改めて確認され、ますます複雑化するコミュニケーション環境において、酪農乳業界の主張が、信頼性があり、一貫性があり、かつ影響力のあるものであることを確保するのに役立ちました。

ニュース

中国での連携強化：中国乳業協会年次総会（2026 年 5 月 26～28 日、成都（中国））

IDF のジル・フロマン会長が、中国の酪農乳業界全体から 3,000 人以上のステークホルダーが集まったイベントに、連盟を代表して出席しました。会長は演説の中で、科学に基づく基準、イノベーション、持続可能性、グローバルな連携の重要性を強調しました。今回の訪問では、蒙牛（Mengniu）寧夏ライトハウス工場をはじめとする先進的な生産システムの視察や、主要な業界関係者および IDF のステークホルダーとの意見交換も行われました。それらの交流を通して、持続可能性、食品安全、イノベーションに対する共通の取り組みが再確認されました。最も急成長している酪農乳業地域の 1 つであるアジアとともに、中国は今後に向けて酪農乳業界の未来を形作る上で中心的な役割を果たし続けています。

科学の 2026 年の現状サミット：畜産からのメタン排出の削減（カリフォルニア大学デービス校）への IDF 参加、2026 年 6 月 16～18 日、デービス（米国）

畜産セクターは、栄養に優れた食料の供給と農家の生計を支え続けながら、どのようにしてメタン排出量を削減できるのか？この問いが、カリフォルニア大学デービス校が主催した「**科学の 2026 年の現状サミット：畜産からのメタン排出の削減**」の中心テーマでした。

IDF 科学・プログラム調整委員会（SPCC）の元委員長であるジェイミー・ジョンカー氏が、酪農乳業界を代表し、酪農乳業システム全体における温室効果ガス排出量の測定、管理、削減に向けた科学に基づくアプローチを推進するための IDF の継続的な取り組みを紹介しました。議論は、ライフサイクルアセスメント（LCA）やカーボンフットプリントによる堅実な温室効果ガス算定、農場レベルでの実践的な緩和策、環境パフォーマンスの向上において家畜の健康、福祉、生産性が果たす重要な役割が中心となりました。

パネルディスカッションには、国連食糧農業機関（FAO）、国際畜産研究所（ILRI）、グローバル・メタン・ハブ、持続可能な牛肉のためのラウンドテーブル（GRSB）の専門家が出席し、農業が直面する最も差し迫った持続可能性の課題の 1 つに取り組む上で、国際的な協力がいかに重要であるかを強調しました。

議論を通して、有意義なメタン削減には、確かな科学的知見、実践的な実施、業界横断的な協力の組み合わせが必要であることが改めて確認されました。IDF は、活動計画と専門家ネットワークを通して、より持続可能で気候変動に強い酪農乳業システムに向けた信頼性の高い科学に基づく道筋の策定を引き続き支援しています。

ICAR-IDF 共同ワークショップ「酪農動物の健康と福祉のためのセンサーデータ」、2026 年 6 月 2 日、ヴェローナ（イタリア）

「酪農乳業バリューチェーンにおけるセンサーデータの活用に関する ICAR-IDF 共同イニシアチブ」の一環として開催された本ワークショップは、イルカ・クラス氏（SPCC 家畜の健康・福祉担当）が共同議長を務め、酪農乳業界全体のステークホルダーが一堂に会し、センサーを活用したモニタリングにおける最近の動向、機会、課題について検討しました。ピエルクリスティアーノ・ブラザーレ氏（SCENV）が共同司会を務めた双方向型のパネルディスカッションでは、業界がセンサー技術の効果的な活用をいかに加速できるかを中心に議論され、検証、調和、透明性が主要な優先事項として特定されました。ワークショップ全体で、センサーデータを家畜の健康と福祉の向上に効果的に結びつけるためには、堅固な基準、業界横断的な連携、信頼が重要であることが強調されました。詳細は[こちら](#)。

IDF WDS 2026（ASDA 主催）、2026 年 6 月 21～24 日、ミルウォーキー（米国）

共同主催者のシャロン・ミッチェル氏とスティーブ・ホルロイド氏が、米国ミルウォーキーで開催された ASDA 年次総会に出席しました。会議は、酪農乳業の未来を形作る戦略的課題や機会について参加者と意見交換を行う貴重な機会となりました。議論を通して、業界の長期的な成長を推進する上で、イノベーション、持続可能性、グローバルな連携がいかに重要であるかが改めて確認されました。

今後、ニュージーランドのオークランドで開催される IDF ワールドデリーサミットでは、バリューチェーン全体から集まる上級幹部、政策立案者、専門家が集まり、これらの優先課題にグローバルなレベルで取り組む予定です。本サミットでは、当業界にとって最も重要な課題について、有意義な対話、知識の交換、リーダーシップを発揮するための場を提供します。

両者は、ADSA を通して交流する機会を歓迎し、11 月にオークランドで皆様とお会いできることを楽しみにしています。<http://www.idfwds2026.com>

「世界ラクダの日」：持続可能な酪農乳業システムにおけるラクダ科動物の貢献に注目する、2026 年 6 月 22 日

IDF は、ラクダ科動物が食料安全保障や持続可能な生計、強靱な酪農システムの維持において特に乾燥地域および半乾燥地域で果たしている重要な役割の認識に基づいて、「世界ラクダの日」に世界のラクダ関係組織と連携します。

ラクダの乳やその他の非牛種の乳・乳製品への関心が高まり続ける中、科学的知見の深化とベストプラクティスの共有は不可欠です。今年初め、インドのアーナンドで開催された「第 9 回 IDF 羊・山羊・ラクダ・その他の非牛種の乳シンポジウム」では、研究者、業界の専門家、政策立案者が集まり、持続可能性、家畜の健康、乳業技術、製品イノベーションにおける最新の動向について検討しました。

また、IDF は「ラクダ科酪農乳業界における機会と洞察」に関するシンポジウムを開催し、国際的な専門家を集めて、持続可能な食料システム、生物多様性、イノベーション、家畜の健康、乳業技術、変化する消費者動向におけるラクダ科酪農乳業の役割について議論しました。

出版物

内部報告書

IDF ファクトシート No. 49/2026

IDF ブリテン No. 540/2026

[乳業施設登録アプローチの概要](#)

[乳糖の理解：消化から健康への影響まで](#)

[酪農乳業界におけるコーデックス食品添加物一般規格（CXS 192-1995）に関するガイダンス](#)

IDF ブリテン No. 541/2026	牛乳乳製品用語の使用に関するコーデックス一般規格—その性質、意図、影響
ISO 9877 IDF 258: 2026	乳・乳製品—灰分の測定
ISO/TS 27265 IDF/RM 228: 2026	熱処理牛乳および乾燥乳製品—好熱性細菌の耐熱性孢子の定量
ICAR-IDF Wiki ガイドライン	反芻に焦点を当てた機能形質に関するセンサーに基づく行動情報
ICAR-IDF Wiki ガイドライン	体況スコア (BCS)
ファクトシート	IDF 各国最新情報の要約—2026 年 6 月

ウェビナー

2026 年 3 月 31 日	総合的な食料システムの持続可能性に向けて: ライフサイクルアセスメントにおいて栄養はなぜ重要か
2026 年 4 月 13 日	酪農乳業界における AI: 農場から加工までの実践的応用
2026 年 5 月 27 日	オランダにおける食事ベースの食事ガイドライン最新情報
2026 年 6 月 3 日	課題から解決策へ: 世界中で安全な牛乳乳製品の基盤としての殺菌
2026 年 6 月 4 日	酪農家円卓会議—次世代の酪農家
2026 年 6 月 29 日	変化する環境下における牛乳乳製品の信頼性確保

今後の予定

現在、予定されているウェビナーはありません。

過去のウェビナーの録画はすべてこちらからご覧いただけます。

<https://cloud.fil-idf.org/f/10770499>

イベント

IDF/ISO 分析ウィーク 2026、2026 年 5 月 5～7 日、ベルン（スイス）

120 名以上の参加者を集めた今回のイベントは、牛乳乳製品分析の専門家が、業界が直面する課題に関する知見を共有し、ネットワークを築き、連携を強化する重要な場となりました。

乳タンパク質に関するシンポジウムも開催され、定量技術、タンパク質の消化率、関連トピックに関する知見が共有されました。これらは、タンパク質が非常に人気のある食品原材料となっている今、特に重要なテーマです。講演者のプレゼンテーションは[こちら](#)からご覧下さい。

IDF Cloud では、IDF と ISO の連携を紹介する本イベントの[全体会議のスライド](#)もご覧いただけます。

第 6 回 IDF 栄養・健康シンポジウム、2026 年 5 月 21 日、オンライン開催

5 月 21 日、IDF 栄養健康シンポジウムがオンラインで開催されました。テーマは「乳糖 360 度—生物学から新たなベネフィットまで」でした。

- ・ 2 回のセッション: WHO による開会の辞+専門家による講演 4 件+ライブパネルディスカッション
- ・ 参加者数 499 名/登録者数 1,033 名で、世界中から幅広い参加
- ・ 登録者数の多い上位 5 カ国: 南アフリカ、カナダ、日本、イタリア、アルゼンチン

- ・ 多様な参加者層： 酪農乳業セクター以外からの参加が 33%（34%が直接関連、33%が間接的に関連）
- ・ 非常に好意的なフィードバック： 質 8.95/10、形式 8.82/10、98%が「期待通りだった」と回答
- ・ 専門的な認定： 各国の CPD 認定証を取得可能（南アフリカ、ドイツ、カナダ）
- ・ アクセシビリティにおける付加価値： 日本語の同時通訳（セッション 1）
- ・ 成果物： ファクトシート、録画、小冊子（抄録および主要メッセージ）
- ・ インタラクティブな投票により科学的概念の理解度が向上（+30%）

すべての成果物は、[こちら](#)のイベントウェブページでご覧いただけます。

IDF ヨーネ病フォーラム、2026 年 6 月 7 日、ドレスデン（ドイツ）

第 10 回 IDF ヨーネ病フォーラムが、第 17 回ヨーネ病国際討論会とともに 2026 年 6 月 7 日にドイツのドレスデンで開催されました。各国のヨーネ病対策プログラムに直接携わる 15 カ国から 25 名の参加者が集まった本フォーラムでは、プレゼンテーションや体系的な議論によって各国が経験や教訓を交換する機会が提供されました。そして、質の高い技術的対話が交わされ、対策アプローチをさらに洗練させるための重要な知見が得られました。今後の取り組みとしては、新たな共同リーダーが任命されたアクションチーム AHW-2 による活動の継続に加え、ヨーネ病対策プログラムに関する査読付き論文の作成という新たな作業項目が開始されます。本フォーラムでの知見は、IDF が主導するこの査読付き論文に直接活かされ、各国の政策議論やベストプラクティスの実施を支援する総合的な情報源となります。

今後のイベント

IDF ワールドデューリーサミット 2026—2026 年 4 月 1 日より登録受付開始

酪農乳業界を代表する世界的なイベントである **IDF ワールドデューリーサミット 2026** の参加登録が開始されました。本サミットは、2026 年 11 月 15 日から 20 日まで、**ニュージーランド・オークランド**のニュージーランド国際会議センターで開催されます。本サミットでは、「*Healthy People, Healthy Planet, Healthy Economies*（健全な人々、健全な地球、健全な経済）」をテーマに、世界中の酪農家、乳業者、科学者、政策立案者、業界リーダーが集まり、科学、持続可能性、イノベーション、グローバルな協力を通して酪農乳業の未来を探求します。

2026 年 7 月 17 日まで早期割引登録を受け付けており、それ以降は参加費が値上がりします。プログラムや登壇者は現在最終調整中ですが、ハイレベルな全体会議、専門家パネル、技術視察、世界の酪農乳業バリューチェーン全体にわたるネットワーキングの機会が予定されています。

各国委員会には、この情報をステークホルダーと共有し、参加促進にご協力いただくようお願いいたします。詳細および登録については、IDF ワールドデューリーサミット 2026 のウェブサイトをご覧ください。

第 4 回 IDF 酪農福祉フォーラム

第 4 回 IDF 酪農福祉フォーラムが、2026 年 11 月にオークランドで開催される予定であり、現在プログラムの最終調整が行われています。

応募募集

IDF デューリー・イノベーション賞—応募締切を 7 月 17 日まで延長/オンライン応募/授賞セレモニー

IDF デューリー・イノベーション賞は、酪農乳業界における卓越したイノベーションを称え、持続可能性、効率性、栄養、そして社会へのプラスの影響を促進する取り組みを表彰するものです。テ

トラパック社の誇りある協賛のもと、国際酪農連盟（IDF）が主催する本賞は、酪農から乳業加工、製品、人、そして地球に至るまでの酪農乳業バリューチェーン全体にわたる革新的な実践を紹介し、科学、技術、そして協働が世界中の酪農乳業の未来をどのように形作っているかを示します。

2026 年 11 月に開催される IDF ワールドデューリーサミットの開催時期を考慮し、応募期間を 2026 年 7 月 17 日まで延長し、応募に十分な時間を確保するとともに、より幅広い参加を促すこととしました。応募はオンラインで行います。

応募受付を 2026 年 3 月 2 日に開始しました。ファイナリストは 2026 年 10 月 5 日に発表され、受賞者は 11 月 17 日、オークランド（ニュージーランド）で開催される IDF ワールドデューリーサミットの一環として行われる授賞式で発表されます。本アワードに関する詳細は[こちら](#)をご覧ください。

プレス

「ビクトリア・フォールズで酪農乳業会議が開幕」 - NewsDay（ジンバブエ）

<https://www.newsday.co.zw/business/article/200053379/dairy-conference-opens-in-victoria-falls>

「オークランドで『IDF ワールドデューリーサミット 2026』開催、参加登録受付開始」 - Food Processing（オーストラリア）

[2026 年 IDF ワールドデューリーサミットをオークランドで開催、参加登録受付中](#)

「酪農乳業界がニュージーランドに集結、健康が最優先課題に」 - ファーマーズ・ウィークリー（ニュージーランド）

<https://www.farmersweekly.co.nz/news/dairy/health-to-the-fore-as-world-dairy-comes-to-nz/>

「インド、2027 年 11 月にムンバイで IDF ワールドデューリーサミットを開催へ：NDDB」 - 『デイリー・エクセルシオール』（ジャンムー・カシミール州およびラダック地方で最多発行部数の新聞）

<https://www.dailyexcelsior.com/india-to-host-idf-world-dairy-summit-in-nov-2027-in-mumbai-nddb/amp>

「北アイルランド酪農評議会の代表、同業界における人工知能の利点を強調」 - Agriland

[北アイルランド酪農評議会の代表、同業界における人工知能の利点を強調 - Agriland.ie](#)

FG（Federal Government）、酪農乳業バリューチェーンの機会提供に向け、3 万 7,000 人の女性と若者を対象に

[FG、酪農乳業バリューチェーンの機会創出に向け、女性と若者 3 万 7,000 人を対象に掲げる - MSME Africa](#)

なぜ「グローバル・デューリー・パートナーシップ」がアメリカの家族経営農場を守っているのか
[なぜグローバル・デューリー・パートナーシップが米国の家族経営農場を守り抜くのか](#)

大学/研究機関の公開情報

2026 年「科学の 2026 年の現状サミット：畜産からのメタン排出の削減」（カリフォルニア大学デービス校）への IDF 参加

SPCC 元会長のジェイミー・ジョンカー氏が、酪農乳業界を代表し、排出強度の低減に向けた重要な道筋として、科学に基づく測定、酪農場での実践的な解決策、家畜の健康と生産性の向上を推進する IDF の役割を強調しました。

https://caes.ucdavis.edu/sites/g/files/dgvnsk1721/files/inline-files/2026%20SOTS%20High%20Level%20Agenda_20260518_0.pdf

IDF 公式ソーシャルメディア（IDF チャンネル）

IDF LinkedInー「牧草地から地理的表示（GI）へ：実践における伝統、品質、精密さ」

5 月に開催された IDF-ISO 分析ウィークにおけるグリュイエール生産現場への技術視察を特集したエンゲージメントの高いソーシャルメディア投稿。規格、トレーサビリティ、分析管理が品質システムを支え、実際の生産と結びついている様子を紹介しています。

<https://www.linkedin.com/feed/update/urn:li:activity:7457448892943671296>

IDF LinkedInー「世界牛乳の日 2026 | 酪農に携わる女性たちを称えて」

IDF は、「世界牛乳の日」の祝賀に参加し、酪農乳業分野全般において、酪農家、チーズ販売業者、獣医師、科学者、リーダーなどとして女性が果たしている多様な役割に焦点を当てたキャンペーンを展開しました。

<https://www.linkedin.com/posts/idfdairyvoice-worldmilkday-womenindairy-share-7467185185080524800-riiY>

業界・貿易メディア

[Augmented Foresight: How AI Can Make Food Systems Analysis Smarter, Faster, and More Inclusive](#)

公式ページとイベント情報

IDF「世界食品安全デー」ページー「2026 年世界食品安全デー」ウェビナー

「食品安全デー」における IDF の取り組みを記録した公式ページ。世界的な食品安全に対する IDF の科学に基づく貢献の概要を説明し、世界中で安全な牛乳乳製品を確保するための基準策定の推進、エビデンスに基づく解決策の促進、国際協力の支援における IDF の役割を強調しています。

<https://fil-idf.org/world-food-safety-day-science-in-action/>

IDF ワールドデーリーサミット公式ウェブサイト

IDF ワールドデーリーサミット 2026 の専用イベントウェブサイト

<https://www.idfwds2026.com/>

動画視聴

[第 6 回 IDF 栄養健康シンポジウムーセッション 1](#)

[2026 年世界食品安全デーー世界中で安全な牛乳乳製品の基盤としての殺菌](#)

[FIL-IDF 会長のジル・フロマン氏が「世界牛乳の日」を祝う](#)

[BRIN LEAP インドネシア](#)

スタッフの連絡先

ローレンス・ライケン lrycken@fil-idf.org
カジャ・シセ kcisse@fil-idf.org
オーレリー・デュボワ adubois@fil-idf.org
チャールズ・デュケ cduque@fil-idf.org
アポリーナ・フォス afos@fil-idf.org
アンナ・ミルジャム・ハラシュ ahalasz@fil-idf.org
アナベル・ミューレ・カベロー博士 amulet@fil-idf.org
ダニエル・ヌニェス・ディアス博士 dnunezdiaz@fil-idf.org
マリア・サンチェス・マイナー博士 msanchezmainar@fil-idf.org
ラケル・スーザ rsousa@fil-idf.org
イン・ワン博士 ywang@fil-idf.org

あなたの声をお聞かせください！

ご意見、ご提案は事務総長宛 (dg@fil-idf.org) にお寄せください。

IDF をフォロー: [LinkedIn](#) | [YouTube](#) | [X](#) | [Bluesky](#)

IDF の略語

AT	アクションチーム
FSSG	食品規格運営グループ
MSSG	分析法規格運営グループ
NC	各国/国内委員会
NWI	新規活動項目
PG	プロジェクトグループ
PL	プロジェクト・リーダー
PR	プレスリリース
RM	レビュー方式
SC	常設委員会
SPCC	科学・計画調整委員会
SSG	サステナビリティ運営グループ
TF	特別作業部会
SCAHW	家畜の健康・福祉常設委員会
SCAMAC	食品添加物・汚染物質分析法常設委員会
SCAMC	成分分析法常設委員会
SCMDM	酪農微生物学的手法常設委員会
SCDPE	酪農政策・経済常任委員会
SCDSPT	乳業科学・加工技術常設委員会
SCENV	環境常設委員会
SCFM	農場管理常設委員会
SCSIL	規格・表示常設委員会
SCM	マーケティング常設委員会
SCMH	微生物学的衛生常設委員会
SCNH	栄養・健康常設委員会
SCRCC	残留物質・化学汚染物質常設委員会
SCLSQA	試験室統計・品質保証常設委員会

国際機関および地域機関の略称

CAC	コーデックス委員会
CCCF	コーデックス食品汚染物質部会
CCFA	コーデックス食品添加物部会
CCFH	コーデックス食品衛生部会
CCFICS	コーデックス食品輸出入検査・認証制度部会
CCFL	コーデックス食品表示部会
CCGP	コーデックス一般原則部会

CCMAS	コーデックス分析・サンプリング法部会
CCMMP	コーデックス乳・乳製品部会
CCNFSDU	コーデックス栄養・特殊用途食品部会
CCPR	コーデックス残留農薬部会
CCRVDF	コーデックス食品残留動物用医薬品部会
CEN	欧州標準化委員会
CIHEAM	地中海農業研究国際センター
EAAP	欧州畜産協会
EDA	欧州酪農協会
ESADA	東部・南部アフリカ酪農協会
EU	欧州連合
EUROSTAT	欧州統計局
FAO	国際連合食糧農業機関
FEPAL	全米酪農連盟
GDP	グローバル・デリー・プラットフォーム
ICAR	国際動物記録委員会
ICMSF	国際食品微生物規格委員会
IFCN	国際農業比較ネットワーク
ISO	国際標準化機構
IUPAC	国際純正分析化学連合
JEFCA	食品添加物合同専門家委員会（FAO/WHO）
NMKL	食品分析法に関する北欧委員会
OECD	経済協力開発機構
SAI	持続可能な農業イニシアチブ・プラットフォーム
UNEP	国連環境計画
UN	国連
WHO	世界保健機関（国連）
WOAH	世界動物保健機関
WTO	世界貿易機関

2) IDF 質問状の概要と結果

2026 年 2 月～2026 年 7 月に国際酪農連盟日本国内委員会宛に送付された IDF 質問状について、次の通り報告します。当該 IDF 質問状には、大きく分けて「新規活動項目」と「（IDF 出版物等の）発行承認」があります。ここでは、各質問状のご紹介をすることで、IDF がどのような課題に取り組み始めたかあるいは継続しているかをお知らせします。

① 新規活動項目

2026 年 2 月に IDF 事務局から国内委員会宛に 10 件の新規活動項目 (NWI 26/01-26/10) が一括で送付されました。国内委員会事務局は、関係する各専門分科会にて協議し、作成した回答を IDF 事務局に一括回答しました。

家畜の健康・福祉 常設委員会 SCAHW	新規活動項目 NWI 26/01: ヨーネ病コントロールプログラムに関する査読付き論文
酪農政策・経済 常設委員会 SCDPE	新規活動項目 NWI 26/02: 乳製品貿易の重要性、利点、効果に関する研究
環境常設委員会 SCENV	新規活動項目 NWI 26/03: GHG 算定における乳牛メタン排出量の遺伝的変動の定量化
環境常設委員会 SCENV	新規活動項目 NWI 26/04: GHG プロトコル: 土地セクターおよび除去ガイダンスー酪農乳業セクターのための標準化マス・バランス・チェーン・オブ・カストーディ手法

食品衛生常設委員会 SCFH	新規活動項目 NWI 26/05: 口蹄疫ウイルス（FMDV）に関連する乳業加工および輸出貿易への世界獣医機関（WOAH）陸上動物衛生コード適用に関するガイドライン
農場管理常設委員会 SCFM	新規活動項目 NWI 26/06: 現代の搾乳システムにおけるミルクライン、エアライン、真空ポンプのサイジングに関する性能に基づくガイドラインの開発
栄養・健康常設委員会 SCNH	新規活動項目 NWI 26/07: 健康的な加齢における牛乳乳製品の役割
試験室統計・品質保証 常設委員会 SCLSQA	新規活動項目 NWI 26/08: ISO 9622 IDF 141「中赤外分光法の適用に関するガイドライン」の改訂
試験室統計・品質保証 常設委員会 SCLSQA	新規活動項目 NWI 26/09: ISO 707 IDF 50「サンプリングに関するガイダンス」の改訂
マーケティング 常設委員会 SCM	新規活動項目 NWI 26/10: 植物主体の食事における牛乳乳製品の役割の位置づけ

② 発行承認

1. 質問状 0126/SCAMC

当質問状は、「ISO/DIS 24167 | IDF 261 乳・乳製品－タンパク質消化率およびインビトロ消化性不可欠アミノ酸スコア（DIAAS）の分析のためのインビトロ消化プロトコル（Milk and milk products – In vitro digestion protocol for the determination of protein digestibility and in vitro digestible indispensable amino acid score (DIAAS) ISO/DIS 24167 | IDF 261)」と題する ISO/IDF 合同分析法規格原案の発行承認を求めるものです。当会（JIDF）は、規格原案をコメント付きで承認する回答をしました。IDF 全体の回答結果は、11 カ国が回答し、日本を含む 11 カ国が承認したので、本規格原案は ISO/IDF 規格化に向けて前進することになりました（現時点ではまだ出版されていません）。

2. 質問状 0226/SCMDM

当質問状は、「ISO/DTS 27265 | IDF/RM 228 加熱処理乳・粉乳－好熱菌の耐熱性芽胞の計数法（Heat-processed milk and dried milk products – Enumeration of thermoresistant spores of thermophilic bacteria ISO/DTS 27265 | IDF/RM 228）」と題する ISO/IDF 合同技術仕様書原案（2009 年発行版の改訂）の発行承認を求めるものです。当会（JIDF）は、技術仕様書原案を承認する回答をしました。本技術仕様書は ISO/DTS 11059|IDF/RM 225 として既に出版されています。

3. 質問状 0326/SCAMAC

当質問状は、「ISO/DIS 24141|IDF 262 乳・乳製品－動物用医薬品の標準品規格に係る分析証明書の使用と解釈を調和させ、簡素化するための一般要件（Milk and milk products – General requirements for the harmonization and simplification of the use and interpretation of certificate of analysis for standards of veterinary medicines ISO/DIS 24141|IDF 262）」と題する ISO/IDF 合同分析法規格原案の承認を求めるものです。当会（JIDF）は、規格原案を承認する回答をしました（現時点ではまだ出版されていません）。

3) IDF ファクトシートの紹介

前号に引き続いて、下記 IDF サイトに掲載のファクトシートから 2 件を紹介（仮訳を掲載）いたします。2026 年 2~7 月に出版されたファクトシートで、関係する当会専門分科会の委員のご協力を得て仮訳したものです。

<https://shop.fil-idf.org/collections/publications/publication-type-factsheets>

乳糖の理解：消化から健康への影響まで (Understanding lactose: From digestion to health outcomes)

要点

- ・乳糖は、乳に天然に含まれる炭水化物である。その含有量は、加工方法によって牛乳乳製品の種類ごとに異なる。
- ・乳糖は、炭水化物として重要な栄養学的役割を果たしており、グルコースとガラクトースに消化されることでエネルギーを供給する。
- ・栄養面以外にも、乳糖は、プレバイオティクスとして働くことがあり、他の糖類に比べて血糖値の上昇が緩やかであり、齲蝕性は低い、などの健康に関わる特性を有している。
- ・乳糖の消化不良と乳糖不耐症は同じではない。消化不良とは、ラクターゼ活性の低下により小腸で乳糖が完全に消化されないことを指し、不耐症とは、消化不良に伴って生じる臨床症状を指す。乳糖の消化不良があっても、乳糖を含む牛乳乳製品を摂取した後に乳糖不耐の症状が生じるとは限らない。
- ・通常、牛乳乳製品を完全に避ける必要はない。乳糖への耐性には個人差があり、摂取量を調整したり、定期的に少量の乳糖を摂取したり、ヨーグルトやハードチーズなどの忍容性の高い牛乳乳製品を選んだりすることで、多くの場合対処可能である。乳糖不耐症の人の多くは、1日10~15gの乳糖（牛乳約1杯分）であれば、ほとんど症状がでないか、あっても症状は軽度であり、問題なく摂取できる。

背景

牛乳、チーズ、ヨーグルト、その他の発酵乳製品は、体に必須の様々な栄養素を含む栄養価値の高い食品である。牛乳乳製品には、こうした栄養豊富なマトリクスの一部として乳糖を含んでいる。乳糖は、炭水化物であり、乳に天然に含まれる乳に固有の糖である。牛乳乳製品は、カルシウム、ビタミン B2、ビタミン B12、良質なタンパク質といった主要な栄養素の重要な供給源となっているが、乳糖不耐症を自覚していたり、自己診断することで、牛乳乳製品の摂取が妨げられている可能性がある。食事で牛乳乳製品を必要以上に制限したり、避けたりすることで、栄養素が不足するリスクを高め、牛乳乳製品摂取に伴う予防的または有益な健康上のメリットを損なう恐れがある。

牛乳乳製品に含まれる乳糖

牛乳乳製品は、栄養素密度が高い構成成分の一部として乳糖を天然に含んでいる。乳糖は、グルコースとガラクトースからなる二糖類である。世界保健機関（WHO）は、乳糖を、乳の構成成分中に存在する場合は「milk sugar（乳に天然に存在する糖）」として分類している。この場合、乳糖は食品マトリクスに本来そなわっているものとみなされ、遊離糖には分類されない。WHOは、遊離糖を「製造業者、調理者、または消費者が食品や飲料に添加した単糖類および二糖類、ならびに蜂蜜、シロップ、果汁、濃縮果汁に天然に含まれる糖」と定義している（WHO, 2015）。食品規制および政策における糖類に関する詳細情報は、IDF ブリテン 509/2021（IDF, 2021）に記載されている。

乳糖含有量は、乳の種類や製品の製造工程によって異なる。ヨーグルト、バターミルク、その他の発酵乳製品などの牛乳を発酵した製品では、乳酸菌が乳糖を乳酸に変換するため、通常、生乳よりも乳糖含有量は低くなる（Ayivi & Ibrahim, 2022）。ほとんどのチーズは熟成工程によって乳糖含有量が極めて低いか、全く含まれていないが、製造工程の種類によっては例外もある（表 1）。

表 1: 牛乳乳製品の乳糖含有量 (Gille, 2018 を改変)

牛乳乳製品	種類	乳糖含有量 (g/100g)
牛乳		
	全乳 (脂肪分3.5%)	4.7
	低脂肪 (脂肪分1.5%)	4.9
	無脂肪 (0.1%)	4.9
チーズ		
	ハードチーズ	微量
	セミハードチーズ	微量
	ソフトチーズ	微量
	モッツァレラ	0.7
	フレッシュチーズ	0.7-4.6
	カッテージチーズ	1.8
	クリームチーズ	3.6
ヨーグルト/発酵乳		
	低脂肪 (脂肪分1.5%)	2.8
	ギリシャ風 (脂肪分10.0%)	3.0
	全乳 (脂肪分3.5%)	3.3
	無脂肪 (脂肪分0.1%)	3.3

乳糖の健康効果

公衆衛生の専門家の意見は、過剰な添加糖や遊離糖（特に高エネルギーで栄養素をあまり含んでいない食品に含まれている場合）の摂取が体重や歯の健康に悪影響を及ぼし得るという点で概ね一致している。しかし、牛乳乳製品に天然に含まれる乳糖と非感染性疾患のリスクを結びつけるエビデンスはない。WHO（2015年）が述べているように、「食品中にもともと含まれている糖や牛乳に天然に含まれる糖の摂取が有害な影響を与えるという既報のエビデンスはない」。

乳糖のプレバイオティクス効果

ラクターゼ非持続性の人では、乳糖は小腸で完全に消化されず、そのため、小腸下部や近位結腸へと到達する。対照的に、ラクターゼ持続性の人では、乳糖の大部分が消化管の遠位部に到達する前に加水分解される。乳糖の消化は、ラクターゼ活性、摂取した乳糖の量、乳糖の加水分解と吸収の割合といった因子の影響を受ける。その結果、健康なラクターゼ持続性の人であっても、腸内で完全に分解されない乳糖が一部残る可能性がある (Anguita-Ruiz, 2025)。

回腸末端部および（近位）結腸では、乳糖と乳由来オリゴ糖が腸内細菌によって発酵される。この過程でガスや短鎖脂肪酸が産生される。乳酸や酢酸が主で、そこからプロピオン酸や酪酸も産生される (Venema, 2011)。発酵により、2型糖尿病のリスク低減との関連が示されているインドールプロピオン酸の生理活性代謝物も産生される (Luo, 2024)。

短鎖脂肪酸は、腸の健康と全身の健康の両方に関わっている。短鎖脂肪酸は結腸細胞のエネルギーとなり、腸の蠕動運動を促進し、炎症を軽減し、粘膜機能を強化し、腫瘍の進行を抑制する可能性がある (Shin, 2023)。ラクターゼ非持続性の人では、牛乳乳製品を日常的に摂取することで、プレバイオティクスのようなメカニズムによって結腸内の細菌叢の適応が促進され、摂取を続けていくうちに乳糖耐性が改善する可能性がある (Szilagyi, 2015)。

乳糖に対する血糖の反応

低グリセミックインデックス (GI) 食は、1型および2型糖尿病患者の血糖管理を改善させ、2型

糖尿病のリスク低減との関連性があり、さらに体重や体脂肪の管理にも有益な可能性がある (Augustin, 2015)。低 GI 食品は、消化が緩やかなためにグルコースが徐々に放出され、エネルギー供給が持続的に維持される。GI 値は、炭水化物を含む食品をランク付けするもので、グルコースまたは白パンを基準 (GI=100) とする食後血糖応答の大きさによって定める。食品は、低 GI (55 以下)、中 GI (56~69)、高 GI (70 以上) に分類される (Foster-Powell, 2002)。乳糖の GI 値は約 46 であり、低 GI 食品に分類される。これは、乳糖がブドウ糖やショ糖に比べて血糖値の上昇が小さく、糖尿病管理により適していることを示している (Foster-Powell, 2002)。これに従って、天然に乳糖を含む牛乳乳製品は一般的に低 GI 食品に分類されている。Atkinson (2021) は、186 種類の牛乳乳製品の平均 GI 値は 35 であると報告している。

乳糖が歯の健康に及ぼす影響

虫歯は、歯垢内の細菌が発酵性炭水化物から有機酸を産生した際に、歯のエナメル質を脱灰させることによって発生する。炭水化物の齲蝕性は、口腔内でその炭水化物がどれほど容易に発酵されるかという点と密接に関連している (Touger-Decker & van Loveren, 2003, Moynihan & Petersen, 2004)。ショ糖は最も齲蝕性の高い糖と考えられているのに対し、乳糖はプラーク形成の主要な基質ではなく、口腔内微生物による発酵速度も遅いため、齲蝕性が低いとされている (Moynihan & Petersen, 2004, Aimutis, 2012, Shkempi & Huppertz, 2023)。短期研究、長期研究とも、乳糖は、ショ糖、グルコース、フルクトース、マルトースに比べて酸生成性が低く、歯の健康への悪影響も少ないことが示されている (Rugg-Gunn, 1985, Birkhed, 1993, Sheiham, 2001)。

乳糖自体の影響に加え、牛乳や乳製品には、主にミネラル含有量と良質なタンパク質による歯の健康に対する保護効果があることが広く知られている (Shkempi & Huppertz, 2023, Woodward & Rugg-Gunn, 2019)。

乳糖のその他の健康効果

乳糖が消化されると、グルコースとガラクトースに分解される。これら 2 つの単糖類は、エネルギー供給以外にも重要な生理的機能を担っており、神経系や免疫系の構成要素としての役割を果たしている (Szilagyi, 2019, Romero-Velarde, 2019)。ガラクトースは、ガラクトセレブロシドを含むガラクト脂質の合成における重要な基質であり、これらは発達中の神経系において適切な神経伝達を可能にする絶縁層であるミエリンの重要な構成要素である。また、ガラクトースは、免疫機能や細胞間コミュニケーションに関与する糖タンパク質や糖脂質の形成にも寄与している (Szilagyi, 2019, Romero-Velarde, 2019)。

乳糖の消化、消化不良、乳糖不耐症

二糖類の乳糖は、小腸内で消化酵素のラクターゼによってグルコースとガラクトースに分解されることで吸収される。ラクターゼ活性（腸管の刷子縁上の活性を有する酵素の量によって決まる）は出生時には高いが、ほとんどの人では、離乳後に低下する。このような遺伝的プログラムによるラクターゼの減少は、ラクターゼ非持続性（原発性ラクターゼ欠乏症）として知られるもので、世界中の成人の約 2/3 で起こっている (Anguita-Ruiz, 2020, Bayless, 2017, Catanzaro, 2021)。対照的に、ラクターゼ持続性が酪農の長い歴史を持つ集団で進化しており、北ヨーロッパ、北米を始めとする世界のいくつかの地域で一般的となっている (Swallow, 2003)。

乳糖の消化不良と乳糖不耐症は関連しているが、異なる概念であるので、混同して使用すべきではない。乳糖の消化不良は一般的であるが、乳糖摂取後に乳糖不耐症の臨床症状を発現するのは一部の人に限られる (Suchy, 2010)。乳糖不耐症は、乳糖の消化不良の結果として、乳糖摂取後に、腹部膨満感、腹痛、鼓腸、下痢などの胃腸症状が現れることを特徴とする (Forsgård, 2019, Mattar, 2012, Swallow, 2003)。

乳糖不耐症は、乳糖の摂取が特徴的な胃腸症状を引き起こし、典型的で明確な乳糖消化不良（例：呼気水素検査で陽性）が認められる場合に診断される。

乳糖への耐性は個人によって大きく異なる。乳糖を日常的に少量を摂取すると、腸内細菌叢に良い影響を与え、腸内での乳糖への適応が促進されることで、継続するうちに耐性が向上する可能性がある。適応が進むにつれて症状の重症度が軽減することが示されている研究もある。これまでのある研究報告では、乳糖不耐症の人の多くは、1日あたり10~15gの乳糖（牛乳1杯分/約240mLに含まれる量に相当）を単回摂取しても、症状が出ないか、軽度の症状にとどまることが示されている（EFSA, 2010）。1日当たりの摂取量を増やした場合（20~24g）でも、食事と一緒に摂取すれば耐えられることが多い（Heine, 2017, JanssenDuijghuijsen, 2023）。細菌由来のラクターゼ活性が含まれている（Stachelska, 2025）ヨーグルトなどの発酵乳製品、ほとんどのチーズ（乳糖をほとんどあるいは全く含んでいない）、乳糖を低減させた製品や無乳糖製品は、乳糖耐性が低い人でも一般的に忍容される。これらを使用すれば、牛乳乳製品を完全に除外する必要はなく、乳糖耐性が低い人も牛乳乳製品のメリットを受けることが可能となる。

国連食糧農業機関（FAO）、欧州食品安全機関（EFSA）、米国国立衛生研究所（NIH）、全米医師会（NMA）を含む保健当局は、乳糖不耐症でも牛乳乳製品を必要以上に除外することは推奨していない。これは、牛乳乳製品からのカルシウムやその他の栄養素の摂取が不足するリスクを高める可能性があるためである。代わりに、個々の耐性レベルに合わせて乳糖摂取量を調整することを推奨している（EFSA, 2010, Suchy, 2010; Bailey, 2013, FAO, 2013）。

最後に、乳糖不耐症を乳タンパク質アレルギーと混同してはならない。乳糖不耐症は炭水化物の消化不良によって引き起こされる非免疫性の症状であるのに対し、乳アレルギーは乳タンパク質に対する免疫反応によって起こる（Darm, 2024）。

結論

乳糖は牛乳乳製品に含まれる天然成分であり、重要な栄養学的および機能的利点を有している。乳糖の消化不良は一般的であるが、乳糖不耐症を発症するのは一部の人に限られ、その症状は通常、少量の乳糖を日常的に摂取したり、ヨーグルトや熟成ハードチーズなどの忍容性の高い製品を選択するなどの食事調整によって管理可能である。耐性が低い人にとっては、乳糖を含まない牛乳乳製品を利用することで、牛乳乳製品を完全に避けることなく摂取量を維持することができる。牛乳乳製品を必要以上に除外することは、特に主要な微量栄養素の充足を損なう恐れがある。

一般的に世界各国の食事ベースのガイドラインでは、健康的でバランスの取れた食事に牛乳乳製品を含めることが推奨されており、様々な健康上の利点や非感染性疾患のリスク低減との関連性が裏付けられている。

詳細は、IDF ブリテン 509/2021（IDF, 2021）を参照のこと。

主な定義

原発性ラクターゼ欠乏症（ラクターゼ非持続性）

遺伝的に決定するもので、離乳後の成長に伴ってラクターゼ活性が低下し、その結果、乳糖を消化する能力が低下する。

ラクターゼ持続性

遺伝的変異によって成人期もラクターゼの活性が持続し、乳糖を効率的に消化できる。

乳糖消化不良

小腸内のラクターゼ活性の低下によって引き起こされる乳糖の消化不良。

乳糖消化不良は、症状を伴う場合と伴わない場合がある。

乳糖不耐症

乳糖摂取により生じる、腹部膨満感、腹痛、鼓腸、下痢などの胃腸症状を含む臨床症状。乳糖消化不良が存在する場合に、乳糖摂取中または摂取後に症状が現れる。

謝辞

本ファクトシートは、IDF 栄養・健康常設委員会によって作成されました。

引用文献

- Anguita-Ruiz, A., Vatanparast, H., Walsh, C., Barbara, G., Natoli, S., Eisenhauer, B., Ramirez-Mayans, J., Anderson, G. H., Guerville, M., Ligneul, A., & Gil, A. (2025). Alternative biological functions of lactose: a narrative review. *Critical Reviews in Food Science and Nutrition*, 65(31), 7444-7457. <https://doi.org/10.1080/10408398.2025.2470394>
- Anguita-Ruiz, A., Aguilera, C. M., & Gil, Á. (2020). Genetics of Lactose Intolerance: an updated review and online interactive world maps of phenotype and genotype frequencies. *Nutrients*, 12(9), 2689. <https://doi.org/10.3390/nul2092689>
- Atkinson, F. S., Brand-Miller, J. C., Foster-Powell, K., Buyken, A. E., & Goletzke, J. (2021). International tables of glycemic index and glycemic load values 2021: a systematic review. *American Journal of Clinical Nutrition*, 114(5), 1625-1632. <https://doi.org/10.1093/ajcn/nqab233>
- Augustin, L., Kendall, C., Jenkins, D., Willett, W., Astrup, A., Barclay, A., Björck, I., Brand-Miller, J., Brighenti, F., Buyken, A., Ceriello, A., La Vecchia, C., Livesey, G., Liu, S., Riccardi, G., Rizkalla, S., Sievenpiper, J., Trichopoulou, A., Wolever, T., . . . Poli, A. (2015). Glycemic index, glycemic load and glycemic response: An International Scientific Consensus Summit from the International Carbohydrate Quality Consortium (ICQC). *Nutrition Metabolism and Cardiovascular Diseases*, 25(9), 795-815. <https://doi.org/10.1016/j.numecd.2015.05.005>
- Ayivi, R. D., & Ibrahim, S. A. (2022). Lactic acid bacteria: an essential probiotic and starter culture for the production of yoghurt. *International Journal of Food Science & Technology*, 57(11), 7008-7025. <https://doi.org/10.1111/ijfs.16076>
- Bahna, S. L. (2002). Cow' s milk allergy versus cow milk intolerance. *Annals of Allergy Asthma & Immunology*, 89(6), 56-60. [https://doi.org/10.1016/S1081-1206\(10\)62124-2](https://doi.org/10.1016/S1081-1206(10)62124-2)
- Bailey, R. K., Fileti, C. P., Keith, J., Tropez-Sims, S., Price, W., & Allison-Ottey, S. D. (2013). Lactose intolerance and health disparities among African Americans and Hispanic Americans: An updated consensus statement. *Journal of the National Medical Association*, 105(2), 112-127. [https://doi.org/10.1016/s0027-9684\(15\)30113-9](https://doi.org/10.1016/s0027-9684(15)30113-9)
- Bayless, T. M., Brown, E., & Paige, D. M. (2017). Lactase non-persistence and lactose intolerance. *Current Gastroenterology Reports*, 19(5), 23. <https://doi.org/10.1007/s11894-017-0558-9>
- Birkhed, D., Imfeld, T., & Edwardsson, S. (1993). pH Changes in human dental plaque from lactose and milk before and after adaptation. *Caries Research*, 27(1), 43-50. <https://doi.org/10.1159/000261514>
- Catanzaro, R., Sciuto, M., & Marotta, F. (2021). Lactose intolerance: An update on its pathogenesis, diagnosis, and treatment. *Nutrition Research*, 89, 23-34. <https://doi.org/10.1016/j.nutres.2021.02.003>
- Darma, A.; Sumitro, K.R.; Jo, J.; Sitorus, N. (2024). Lactose Intolerance versus Cow' s Milk Allergy in Infants: A Clinical Dilemma. *Nutrients*, 16, 414. <https://doi.org/10.3390/nul6030414>
- EFSA Panel on Dietetic Products N, Allergies. (2010). Scientific opinion on lactose thresholds in lactose intolerance and galactosaemia. *EFSA Journal*, 8(9), 1777. <https://doi.org/10.2903/j.efsa.2010.1777>
- Food and Agriculture Organisation of the United Nations. (2013). Muehlhoff E, Bennett A, McMahon D. Milk and dairy products in human nutrition. <https://openknowledge.fao.org/server/api/core/bitstreams/bf75d4cd-54ed-45a8-bf1b-71606320f596/content>
- Forsgård, R. A. (2019). Lactose digestion in humans: intestinal lactase appears to be constitutive whereas the colonic microbiome is adaptable. *American Journal of Clinical Nutrition*, 110(2), 273-279. <https://doi.org/10.1093/ajcn/nqz104>
- Foster-Powell, K., Holt, S. H., & Brand-Miller, J. C. (2002). International table of glycemic index and glycemic load values: 2002,. *American Journal of Clinical Nutrition*, 76(1), 5-56.

<https://doi.org/10.1093/ajcn/76.1.5>

Gille, D., Walther, B., Badertscher, R., Bosshart, A., Brügger, C., Brühlhart, M., Gauch, R., Noth, P., Vergères, G., & Egger, L. (2018). Detection of lactose in products with low lactose content. *International Dairy Journal*, 83, 17-19. <https://doi.org/10.1016/j.idairyj.2018.03.003>

Heine, R. G., AlRefaee, F., Bachina, P., De Leon, J. C., Geng, L., Gong, S., Madrazo, J. A., Ngamphaiboon, J., Ong, C., & Rogacion, J. M. (2017). Lactose intolerance and gastrointestinal cow's milk allergy in infants and children - common misconceptions revisited. *World Allergy Organization Journal*, 10(1), 41. <https://doi.org/10.1186/s40413-017-0173-0>

International Dairy Federation. (2021). Lactose, an important nutrient: Advocating a revised policy approach for dairy & its intrinsic sugar. Bulletin of the IDF N° 509/2021. <https://shop.fil-idf.org/products/bulletin-of-the-idf-509-2021-lactose-an-important-nutrient-advocating-a-revised-policy-approach-for-dairy-its-intrinsic-sugar>

JanssenDuijghuijsen, L., Looijesteijn, E., Van Den Belt, M., Gerhard, B., Ziegler, M., Ariens, R., Tjoelker, R., & Geurts, J. (2023). Changes in gut microbiota and lactose intolerance symptoms before and after daily lactose supplementation in individuals with the lactase non persistent genotype. *American Journal of Clinical Nutrition*, 119(3), 702-710. <https://doi.org/10.1016/j.ajcnut.2023.12.016>

Luo, K., Chen, G., Zhang, Y., Moon, J., Xing, J., Peters, B. A., Usyk, M., Wang, Z., Hu, G., Li, J., Selvin, E., Rebholz, C. M., Wang, T., Isasi, C. R., Yu, B., Knight, R., Boerwinkle, E., Burk, R. D., Kaplan, R. C., & Qi, Q. (2024). Variant of the lactase LCT gene explains association between milk intake and incident type 2 diabetes. *Nature Metabolism*, 6(1), 169-186. <https://doi.org/10.1038/s42255-023-00961-1>

Mattar, R., Mazo, & Carrilho. (2012). Lactose intolerance: diagnosis, genetic, and clinical factors. *Clinical and Experimental Gastroenterology*, 5, 113. <https://doi.org/10.2147/ceg.s32368>

Moynihan, P., & Petersen, P. E. (2004). Diet, nutrition and the prevention of dental diseases. *Public Health Nutrition*, 7(1a), 201-226. <https://doi.org/10.1079/phn2003589>

Romero-Velarde, E., Delgado-Franco, D., García-Gutiérrez, M., Gurrola-Díaz, C., Larrosa-Haro, A., Montijo-Barrios, E., Muskiet, F. a. J., Vargas-Guerrero, B., & Geurts, J. (2019). The importance of lactose in the human diet: Outcomes of a Mexican consensus meeting. *Nutrients*, 11(11), 2737. <https://doi.org/10.3390/nu1112737>

Rugg-Gunn, A., Roberts, G., & Wright, W. (1985). Effect of human milk on plaque pH in situ and enamel dissolution in vitro compared with bovine milk, lactose, and sucrose. *Caries Research*, 19(4), 327-334. <https://doi.org/10.1159/000260863>

Sheiham, A. (2001). Dietary effects on dental diseases. *Public Health Nutrition*, 4(2b), 569-591. <https://doi.org/10.1079/phn2001142>

Shkempi, B., & Huppertz, T. (2023). Impact of dairy products and plant-based alternatives on dental health: food matrix effects. *Nutrients*, 15(6), 1469. <https://doi.org/10.3390/nu15061469>

Shin, Y., Han, S., Kwon, J., Ju, S., Choi, T., Kang, I., & Kim, S. (2023). Roles of short-chain fatty acids in inflammatory bowel Disease. *Nutrients*, 15(20), 4466. <https://doi.org/10.3390/nu15204466>

Stachelska, M. A.; Karpiński, P.; Kruszewski, B. (2025) Health-promoting and functional properties of fermented milk beverages with probiotic bacteria in the prevention of civilization diseases. *Nutrients*, 17, 9. <https://doi.org/10.3390/nu17010009>

Suchy, F. J., Brannon, P. M., Carpenter, T. O., Fernandez, J. R., Gilsanz, V., Gould, J. B., Hall, K., Hui, S. L., Lupton, J., Mennella, J., Miller, N. J., Osganian, S. K., Sellmeyer, D. E., & Wolf, M. A. (2010). National Institutes of Health Consensus Development Conference: Lactose intolerance and health. *Annals of Internal Medicine*, 152(12), 792-796. <https://doi.org/10.7326/0003-4819-152-12-201006150-00248>

Swallow, D. M. (2003). Genetics of lactase persistence and lactose intolerance. *Annual Review of Genetics*, 37(1), 197-219. <https://doi.org/10.1146/annurev.genet.37.110801.143820>

Szilagyi, A. (2015). Adaptation to lactose in lactase non persistent people: effects on intolerance

- and the relationship between dairy food consumption and evaluation of diseases. *Nutrients*, 7(8), 6751-6779. <https://doi.org/10.3390/nu7085309>
- Szilagyi, A. (2019). Digestion, absorption, metabolism, and physiological effects of lactose. In Elsevier eBooks (pp. 49-111). <https://doi.org/10.1016/b978-0-12-811720-0.00002-7>
- Touger-Decker, R., & Van Loveren, C. (2003). Sugars and dental caries. *American Journal of Clinical Nutrition*, 78(4), 881S-892S. <https://doi.org/10.1093/ajcn/78.4.881s>
- Venema, K. (2011). Intestinal fermentation of lactose and prebiotic lactose derivatives, including human milk oligosaccharides. *International Dairy Journal*, 22(2), 123-140. <https://doi.org/10.1016/j.idairyj.2011.10.011>
- World Health Organization. (2015). Guideline: Sugars intake for adults and children. World Health Organisation. <https://www.who.int/publications/i/item/9789241549028>
- Woodward, M., & Rugg-Gunn, A. J. (2019). Chapter 8: Milk, yoghurts and dental Caries. *Monographs in Oral Science*, 28, 77-90. <https://doi.org/10.1159/000455374>

翻訳作成：守田 俊介（栄養健康専門分科会委員）

② IDF Factsheet 50/2026

IDF カントリー・アップデート要旨-2026 年 6 月 (Executive Summary of IDF Country Updates - June 2026)

シリーズ概要

IDF 酪農政策・経済常設委員会は、同委員会委員 20 カ国における 2025 年の市場実績および状況を、前年同期と比較して更新した。これらの国々は、世界の生乳生産量の半分以上を占めており、乳製品の世界貿易におけるシェアはさらに大きい。

1 市場動向

生産動向

- ・ 世界の生乳生産量 オセアニア地域（生産量の伸びは-2.8%~1.85%）を除き、生産量、供給量とも全般的に増加した。地域別の伸び率は、欧州が 0.7%~5.3%、北米が 2.1%~2.8%、アジアが 0.3%~3.6%、その他の地域が 0.75%~6.2%となっている。
- ・ 価格変動性 生乳価格は地域によって大きく異なる。欧州では、乳価が 1.68%から 16.4%上昇したが、北米では-1.2%から-6.1%の下落、オセアニアでは約-4.5%の下落となり、アジアでは-8.1%から 2%の範囲での変動が見られた。その他の地域では-6.7%から 11%の範囲での変動が見られた。

貿易動向

- ・ 輸入 欧州では輸入額が 0%から 13.8%増加したが、一方で輸入量は-14%から 11.75%の幅が見られた。北米では、輸入額が-14%の減少から 16.4%の増加の範囲で推移し、輸入量は-11%から 5.6%の範囲で変動した。オセアニアでは、輸入額が-19.3%から 16.6%の範囲で変動し、輸入量は 4.5%から 7.6%の範囲で増加した。アジアでは、輸入額が 0%から 66.8%の範囲で増加したが、一方で輸入量は 0%から 24.2%の間で推移した。その他の地域では、輸入額が-1.5%から 17%の範囲、輸入量は-9.2%から 5%の範囲であった。
- ・ 輸出 欧州では相対的な輸出額は-2.1%から 70%の間で推移し、輸出量は-6%から 130.4%の間で推移した。北米では、輸出額は 0.5%から 15%の間で、相対的な輸出量は 4%から

10.2%の間で推移した。オセアニアでは、輸出額が 3.4%から 18.2%増加したが、一方で輸出量は 0.7%から 4.2%の範囲での変動があった。アジアでは、輸出額が-0.2%から 6.1%の範囲で、輸出量は 0%から 136.3%の範囲で変動した。その他の地域では、輸出額は 0%から 24%の範囲、輸出量は 0%から 29.2%の範囲で変動があった。

主な要因

- ・ 世界の生乳生産量 世界的に生産量が堅調であり、このことが輸出量を牽引している。為替レートの変動によってこの傾向が緩和されることもあるが、さらに強まる可能性もある。欧州では、好天候、ブルータング病からの回復、良好な価格により、生産量が大幅に回復した。
- ・ 生乳価格 (FGMP) 乳価には大きなばらつきが見られた。ニュージーランド、米国、オーストラリア、チリなどでは乳価が大幅に下落したが、欧州では乳量が豊富であったにもかかわらず、価格が上昇し続けた。
- ・ 注視すべき要因と予測指標 生産量の縮小、米ドルの高騰、貿易政策の地政学的利用、生産要素価格（労働力、資本、土地などの価格）の上昇、消費者物価全般に対するインフレ圧力など。

2 政策・規制の最新状況

栄養表示とラベル表示

- ・ 規格の見直し（アイルランド）、栄養プロファイリング（英国）、ビタミン D の添加（カナダ）。また、スイスやデンマークでは、若い女性層が食事ガイドラインに沿っていないことが研究で示されている。

家畜の健康

- ・ いくつかの国でランピースキン病が問題となっている。カナダではトレーサビリティ・データベースが構築された。ドイツでは家畜福祉表示に関連して消費者の需要に変化が見られている。

環境と持続可能性

- ・ 多くの国で、特に排出量管理に関連する持続可能性への取り組みが依然として最優先課題となっている。硝酸塩の管理や水質の確保も、いくつかの国で優先事項とされている。

業界再編と貿易

- ・ 業界の再編と統合が進んでいる。アイスランドではEU加盟が再び議題に上っており、EUと英国の間ではSPS協定の締結が模索されている。貿易が様々な形で混乱や課題に直面する中、こうした混乱を緩和するための貿易協定に関する取り組みも活発化している。

3 牛乳乳製品消費動向

- ・ 液状乳 液状乳の消費量は、ほとんどの国で安定しているか横ばい状態にあるが、イスラエルは例外で、消費量が 18%増加している。
- ・ ヨーグルト アジアでは消費が横ばいまたは停滞しているものの、全般的に概ね堅調な伸びを見せている。
- ・ チーズ 欧州や北米などでは緩やかな成長から堅調な成長が見られているが、アジアおよびオセアニアでは緩やかな減少または大幅な減少が見られている。
- ・ バター、クリーム 全体としてはまちまちで、これら2つのカテゴリーにおける市場ごとの相対的な変化率は-3.1%から 10%まで幅がある。

4 その他の課題

- ・酪農および乳業における労働力不足は、多くの市場で依然として課題となっており、酪農家の高齢化や世代交代に関する課題も加わっている。また、現在の国際情勢における紛争や混乱による生産コストの上昇やインフレ圧力も懸念材料となっている。

要約

2025 年の世界の酪農乳業は、地政学的貿易摩擦、インフレ圧力、規制枠組みの変遷、消費者の嗜好の変化などによって特徴づけられる複雑な状況の中を依然として進んでいる。牛乳乳製品の需要は各カテゴリーとも概ね堅調であり、今後も緩やかな成長が続くと予想されるが、多くの課題が残されている。家畜の疾病、生産コストの上昇、環境の圧力といった課題は依然として続いている。成功の鍵は、政策の変化への適応、持続可能性への投資、依然として複雑な供給チェーンとバリューチェーンを持つグローバル市場において、効果的に競争力を維持できるかどうかにかかっている。

翻訳作成：JIDF 事務局

4) IDF ワールドデリーサミット 2026 (オークランド) の予定

昨年のサンティアゴに続き、IDF ワールドデリーサミット 2026 がオークランド（ニュージーランド）で開催されます。サミット専用のウェブサイト (<https://idfws2026.com/>) には、暫定プログラムが掲載されており、本イベントへの参加登録（出席方式を選択可能）も可能です。以下に、開催概要（仮訳）などを掲載します。

日 時： 2026 年 11 月 16 日（月）～18 日（水）
場 所： オークランド（ニュージーランド） ※現地参加形式
会 場： ニュージーランド国際会議センター（NZICC）
テーマ： Healthy People, Healthy Planet, Healthy Economics
「健全な人、健全な地球、健全な経済」（仮訳）

登録・ディナー費用（1NZ ドル＝93 円換算）

		早期登録*	通常登録*	直前登録
登録	フル登録	1,900 NZ ドル (約 176,700 円)	2,300 NZ ドル (約 213,900 円)	2,800 US ドル (約 260,400 円)
	1 日登録**	950 NZ ドル/日 (約 88,350 円/日)		
	同伴者	480 NZ ドル (約 44,640 円)		
ディナー	ファーマーズ・ディナー	200 NZ ドル (約 18,600 円)		
	ガラディナー	250 NZ ドル (約 23,250 円)		

*早期登録は 7 月 31 日まで、通常登録は 9 月 18 日まで

**1 日登録の場合、歓迎レセプションの参加に 100NZ ドルの支払いが必要です

テクニカルツアー費用（1NZ ドル=93 円換算）

ツアー名	日時	料金	主な訪問先
ツアー1 酪農研究施設と酪農場 マナワツ（北島） （定員：40 名）	11 月 19 日 （木） 6:00-20:00 バス・航空	片道640NZ ドル 約 59,520 円 往復830NZ ドル 約 77,190 円	フォンテラ研究開発センター 酪農場 （原生林再生プロジェクト等）
ツアー2 乳製品工場と酪農場 カンタベリー（南島） （定員：30 名）	11 月 19 日 （木） 6:15-20:35 バス・航空	片道600NZ ドル 約 55,800 円 往復660NZ ドル 約 61,380 円	国際教育センター フォンテラ ダーフィールド工場 （粉乳 バター クリームチーズ） 酪農場（灌漑を戦略的に採用）
ツアー3 乳製品工場と酪農場 ワイカト（北島） （定員：50 名）	11 月 19 日 （木） 7:00-17:30 バス	250 NZ ドル 約 23,250 円	フォンテラ テ・ラパ工場 （粉乳 クリームチーズ） 酪農場（自給飼料、効率化生産）
ツアー4 家畜改良公社（LIC） ワイカト（北島） （定員：33 名）	11 月 19 日 （木） 7:00-18:00 バス	250 NZ ドル 約 23,250 円	家畜改良公社（LIC） （農場、研究所、メタン研究牛舎、 最新搾乳技術）
ツアー9 酪農場 カンタベリー（南島） （定員：40 名）	11 月 19 日 （木） 6:30-19:30 バス・航空	片道575NZ ドル 約 53,475 円 往復745NZ ドル 約 69,285 円	イウィ（部族）所有の農業企業酪農場 （再生農業など）
ツアー5 酪農研究施設と酪農場 マナワツ（北島） （定員：40 名）	11 月 20 日 （金） 6:00-20:00 バス・航空	片道640NZ ドル 約 59,520 円 往復830NZ ドル 約 77,190 円	フォンテラ 研究開発センター 酪農場 （原生林再生プロジェクト等）
ツアー6 乳製品工場と酪農場 カンタベリー（南島） （定員：30 名）	11 月 20 日 （金） 6:15-20:35 バス・航空	片道600NZ ドル 約 55,800 円 往復660NZ ドル 約 61,380 円	国際教育センター フォンテラ ダーフィールド工場 （粉乳 バター クリームチーズ） 酪農場（灌漑を戦略的に採用）
ツアー7 乳製品工場と酪農場 ワイカト（北島） （定員：40 名）	11 月 20 日 （金） 7:00-18:30 バス	250 NZ ドル 約 23,250 円	フォンテラ リッチフィールド工場 （WPC・WPI・各種チーズ） 酪農場（自給飼料、効率化生産）
ツアー8 酪農場（2 カ所） （ワイカト、北島） （定員：50 名）	11 月 20 日 （金） 7:00-18:00 バス	250 NZ ドル 約 23,250 円	酪農場（自給飼料） 酪農場 （環境保全 肉牛から乳牛の転換）

サミット 2026 プログラム一覧表（時刻は現地時間、暫定）

11 月 15 日（日）	
14:00-16:00	ニュージーランドの酪農科学・技術革新の 100 年
18:00-21:00	歓迎レセプション
11 月 16 日（月）	
8:30-10:00	開会式/式典
10:00-10:30	休憩
10:30-12:00	全体会議：デーリー・リーダーズ・フォーラム
12:00-13:15	昼食
13:15-14:45	全体会議：世界の酪農状況の最新情報と見通し

14:45-15:15	休憩
15:15-16:45	全体会議：IDF フォーラム
16:45-17:30	全体会議：トランスフォーメーションのユニークな側面

11月17日（火）				
8:30-10:00	全体会議：地政学、食糧、貿易			
10:00-10:45	休憩			
10:45-12:45	温室効果ガス（GHG）削減公約の達成	バイオセキュリティの経済性	将来の食の選択を左右する要因	温帯の放牧システム：牧草から市場へ
12:45-14:00	昼食			
14:00-15:30	自然に基づく解決策：市場から農場へ	乳業加工における資源効率：脱炭素化、包装、アップサイクリング	加工食品をめぐる変化する物語をナビゲートする	乳製品貿易障壁と歪みの動向：市場への影響と対応
15:30-16:00	休憩			
16:00-17:30	IDF デーリーイノベーション賞およびIMP賞	パベル・イエレン若手科学者賞、ポスター口頭発表	変動性の管理とレジリエンスの構築	農場における技術とイノベーション
18:30-21:00	ファーマーズディナー			

11月18日（水）				
8:30-10:00	全体会議：将来の食料システムにおける牛乳乳製品の役割			
10:00-10:45	休憩			
10:45-12:45	将来の農業に向けた適応	乳脂肪の旅	信頼、信用、確信のためのコミュニケーション	既知および新出の汚染物質の概況
12:45-14:00	昼食			
14:00-15:30	IDF によるコードックスへの関与の価値	人生の各段階における牛乳乳製品の潜在的可能性	牛乳乳製品のサプライチェーンの進化：子牛の機会	活気あるコミュニティを支える牛乳乳製品
15:30-16:00	休憩			
16:00-17:00	全体会議：閉会の辞			
18:30-23:00	ガラディナー			

IDF ビジネスミーティングー覧表（10月11日（水）～15日（日）、時刻は現地時間、暫定）

11月11日（水）

11:00-18:00: SPCC（IDF 科学・計画調整委員会）

11月12日（木）

8:30-13:00: IDF 理事会

14:00-18:00: SCDPE（IDF 酪農政策・経済常設委員会）

11月13日（金）				
8:30-10:30	SCFH（IDF 食品衛生常設委員会）	SCFM（IDF 農場管理常設委員会）	Joint SCDPE/SCM（IDF 酪農政策・経済常設委員会/マーケティング常設員会合同会議）	タンパク質移行における乳製品の位置づけ特別作業部会（TF PDPT）
10:30-11:00	休憩			

11:00-13:00	SCFH	SCFM	Joint SCDPE/SCM	持続可能性の調整、行動および推進に関するデーリー宣言特別作業部会（TF DDS）	
13:00-14:00	昼食				
14:00-16:00	IDF 各国委員会/ 全専門家調整会議				
16:00-18:00	IDF 各国委員会事務局 局長会議（1）	IDF 全専門家調整会 議			
11月14日（土）					
8:30-10:30	IDF 各国委員会事務局 局長会議（2）	IDF アニマルヘルス フォーラム	SCM （IDF マーケティング 常設委員会）	SCRCC （IDF 残留物質・化 学汚染物質常設委 員会）	
10:30-11:00	休憩				
11:00-13:00	IDF 各国委員会事務局 局長会議（2）		SCM	SCSIL （IDF 規格・表示常 設委員会）	
13:00-14:00	昼食				
14:00-16:00	IDF 酪農家および酪 農乳業における女 性円卓会議	SCAHW （IDF 家畜の健康・ 福祉常設委員会）	IDF 国際ミルクプロ モーション（IMP） 会議	SCSIL	SCDSPT （IDF 乳業 科学・加 工技術常 設委員 会）
16:00-16:30	休憩				
16:30-18:00	IDF 酪農家および酪 農乳業における女 性円卓会議	SCAHW	IMP 会議	SCSIL	SCDSPT
11月15日（日）					
8:30-10:30	GA （IDF 総会）	SCNH （IDF 栄養・健康常 設委員会）	SCENV （IDF 環境常設委員 会）		
10:30-11:00	休憩				
11:00-13:00	GA	SCNH	SCENV		
13:00-14:00	昼食				
14:00-16:00	GA	IDF 酪農乳業におけ る女性特別作業部 会（TF WID）	温室効果ガス削減 戦略特別作業部会 （TF GHGMS）		

ソーシャルイベント (時刻は現地時間、暫定)

	歓迎レセプション	ファーマーズ ディナー	ガラディナー
日時	11月15日 (日) 18:00-21:00	11月17日 (火) 18:30-21:00	11月18日 (水) 18:30-23:00

オークランド (ニュージーランド) の一般情報

現地通貨

ニュージーランドドル (NZ\$) で、補助通貨はセント (¢) です。2026 年 7 月現在、1NZ\$=約 93 円です。紙幣は 5~100NZ ドルで 5 種類、硬貨は 10¢~2NZ ドルで 5 種類あります。1 万 NZ ドル以上の現金を所持する場合は、出入国時に現金報告書の提出が必要です。

ほとんどの店でクレジットカードやデビットカードが使えます。現金を使用する場合は、旅行前に為替レートを確認してください。GST (Goods and Services: 日本の消費税のようなもの) と呼ばれる、税率 15% の税金が商品やサービスにかけられています。

ホテル

宿泊施設を各自で手配する必要があります。ホテルのリストはサミットのホームページ (<https://www.idfwds2026.com/registration/accommodation>) にも掲載されています。サミットのホームページからの予約の場合、9 月よりキャンセル料がかかる設定になっているようなので、キャンセルポリシーなど、十分にご確認下さい。

ニュージーランドへの渡航に必要なビザについて

現在、日本国籍の方はニュージーランド入国に際し、観光や出張などの報酬を伴わない 90 日以内の短期滞在に限り、ビザの取得なしの渡航が認められていますが、**NZeTA (電子渡航認証) と IVL (国際観光税) の申請・支払いが必要**で、NZeTA 申請の際にオンラインで IVL も合わせて支払う形になります。これはビザ免除国からの訪問者全員に適用されるもので、入国前に済ませておく必要があります。移民局 NZeTA 情報ページ (<https://www.immigration.govt.nz/visas/new-zealand-electronic-travel-authority-nzeta/>) またはモバイルアプリから手続きを進めれば、通常、手続きに大きな手間はかかりません。

NZeTA 料金: 17NZ ドル (専用モバイルアプリから支払いの場合)

23NZ ドル (ニュージーランド移民局 HP から支払いの場合)

IVL 料金: 100NZ ドル

有効期間: NZeTA、IVL とも 2 年間

モバイルアプリ: Apple App Store または Google Play

ニュージーランド渡航申告書の提出について

ニュージーランド旅行者申告書 (NZTD) システムでは、旅行、税関、入国管理、生物保安に関する情報を収集します。**ニュージーランドに入国するすべての方 (ニュージーランドパスポート所持者を含む) が申告書を提出する必要があります (無料)**。手続きは、専用サイト (TravellerDeclaration.govt.nz) か、NZTD アプリをダウンロードして行ってください。なお、旅行者は 1 人ずつ申告書を提出する必要があります。

申告内容はパスポートと紐づけられるので、ニュージーランド行きのフライト前にデジタル申告を済ませると、空港で紙の申告書を記入する必要がなくなり、到着時の手続きがスムーズになります (eGate の使用が可能)。ニュージーランドビザ所持者である場合も、必ず NZTD を提出してください。**ニュージーランドへの便が発着する 24 時間前から NZTD の提出が可能です**。ニュージーランドのパスポートコントロールを通過するまでに提出する必要があります。

言語

ほとんどの場では日常的に英語が使われますが、公用語としては、英語、マオリ語、ニュージーランド手話があります。

オークランドの交通手段

バスを中心に交通機関が発達しています。市内を走るバスの中で最も利用しやすいのが 4 種類のリンクバス (Link Bus) です。シティ・リンク、インナー・リンク、アウター・リンク、タマキ・リンクの 4 種類の Link Bus が市内の見どころのほとんどの場所をカバーしています。

詳細はオークランド交通局の公式サイトをご確認下さい。

<https://at.govt.nz/bus-train-ferry/bus-services/link-bus-service/>

また、中心部と近郊を結ぶオークランド・トランスポート（鉄道）や上記以外の市バスもあります。運賃は電車・バス共通で使える AT HOP カードという IC カード購入し、チャージするのが便利です。

観光情報

サミットの公式サイトでは、ツアー会社のソーシャルツアーや 1 日ツアーの申し込みも可能です。

<https://travefy.com/website/hgfwxgdxbdfrnnq326ux6n-ywtar32qdqn7zq2>

<https://travefy.com/website/hgfwxgdxbdfrnnq326ux6n-jgfr6-bgrr6-ywtar32qctb2wq2>

電気

ニュージーランドのコンセントは 0 型です。日本からは、0 型変換プラグの持参が必要です。標準電圧は 230/240V で、周波数は 50Hz を採用しています。

治安

治安は外国の中では比較的良い方ですが、スリや置き引き、車上荒らしなどの軽犯罪は多く、日本と同レベルの感覚では危険です。特に中心部であるクイーンズストリート周辺は、夜は酔客が増えるため、夜遅くの 1 人歩きは避けるべきです。

緊急時の電話番号

緊急事態（警察、消防、医療）のときは「111」をダイヤルしてください。電話をかけると、適切な救急サービスにつなげてくれます。

空港から会場までのアクセス

オークランド国際空港からニュージーランド国際会議センター周辺までは、車で約 30~40 分かかります。タクシーやバン、バスなど、さまざまな交通機関をご利用いただけます。

オークランドの天候と時差

オークランドは南半球にあるため、東京とは夏季と冬季が逆です。朝晩の寒暖差は比較的少ない方です。11 月のここ数年の平均気温は、最高 19℃、最低 13℃で、東京とほぼ同等の気温です。天気は変わりやすいため、天気予報などをこまめに確認して下さい。

5) その他国際会議の報告・予定

下記の通り、2026 年 3 月から 2026 年 8 月に開催された IDF 常設委員会、IDF 事務局長会議および IDF 総会等に、国際酪農連盟日本国内委員会（JIDF）より当該委員等が出席（現地参加またはオンライン参加）いたしましたので、お知らせいたします。

① IDF ビジネスミーティング（常設委員会、IDF 総会、事務局長会議等、2026 年度前半）

開催日	開催地/開催時間 （日本時間）	総会、事務局長会議、常設委員会、分析ウィーク等 （JIDF からの出席数）
3 月 10 日（火） ～13 日（金）	ストックホルム （スウェーデン）	IDF 乳房炎および搾乳技術合同シンポジウム* ¹ （現地 1 名）
4 月 21 日（火）	11:00-12:30 （18:00-19:30）	IDF 農場管理常設委員会 （オンライン 1 名）
4 月 23 日（木）	14:00-16:00 （21:00-23:00）	IDF 乳業科学・加工技術常設委員会 （オンライン 1 名）
4 月 28 日（火） ～29 日（水）	ロンドン （英国）	IDF 酪農政策・経済常設委員会 （現地 1 名）

5月5日(火) ～7日(木)	ベルン (スイス)	IDF/ISO 分析ウィーク*2 (現地3名)
5月6日(水)	15:30-18:00 (22:30-25:00)	IDF 食品添加物・汚染物質分析法常設委員会 (オンライン2名)
5月6日(水)	ベルン (スイス)	IDF 試験室統計・品質保証常設委員会 (現地1名)
5月7日(木)	ベルン (スイス)	IDF 成分分析法常設委員会 (現地1名、オンライン1名)
5月7日(木)	ベルン (スイス)	IDF 酪農微生物学的手法常設委員会 (現地1名)
5月11日(月)	モントリオール (カナダ)	IDF マーケティング常設委員会 (現地1名)
5月12日(火) ～13日(水)	モントリオール (カナダ)	GDP-IMP 会議 (現地1名)
5月18日(月)	12:00-14:00 (19:00-21:00)	IDF 食品衛生常設委員会 (オンライン2名)
5月21日(木)	7:00-9:00 (14:00-16:00)	IDF 栄養健康シンポジウム*3 (オンライン1名)
5月27日(水)	11:00-14:00 (18:00-21:00)	IDF 規格・表示常設委員会 (オンライン2名)
6月1日(月)	13:00-15:30 (20:00-22:30)	IDF 環境常設委員会 (オンライン1名)
6月9日(火)	13:30-15:30 (20:30-22:30)	IDF 総会 (オンライン2名)
6月11日(木)	9:00-15:00 (16:00-22:00)	IDF 国内委員会事務局長会議 (オンライン2名)
6月23日(火)	10:00-17:00 (17:00-24:00)	IDF 栄養・健康常設委員会 (オンライン1名)

今後の予定は、⑤にて IDF ビジネスミーティングの予定を掲載していますので、ご参照ください。
なお、上記*1~3 の出席者および講演演題は以下②～④のとおりです。

② IDF 乳房炎および搾乳技術合同シンポジウム 2026

開催日： 2026 年 3 月 10 日 (火) ～3 月 13 日 (金)

開催地： スtockホルム (スウェーデン)

出席者： 菊 佳男 (酪農学園大学)

概 要：

IDF 乳房炎および搾乳技術合同シンポジウム 2026 は、2026 年 3 月 10-13 日、スウェーデンのストックホルムにあるストックホルム・ウォーターフロント・コンgresセンターにて開催されました。この刺激的な 3 日間のイベントには、世界中から多数の専門家が集結し、搾乳技術、泌乳生物学、乳房衛生、乳房炎管理における最先端の研究と進歩を紹介しました。研究者、業界リーダー、獣医師、酪農家による深い議論、ネットワーキング、協働の場を創出する場です。

会議では、次の 5 つの主要テーマの講演がありました。

- 1) 乳房の健康管理と乳房炎対策
- 2) 抗菌薬の適正使用と持続可能な代替策

- 3) 高度な診断技術とデジタル統合
- 4) 農家の意思決定と導入科学
- 5) 搾乳機器の最適化と効率化

詳細は今年度の国際会議出席報告書に掲載する予定です。

③ IDF/ISO 分析ウィーク

開催日： 2026 年 5 月 5 日（火）～5 月 7 日（木）

開催地： ベルン（スイス）＋オンライン

出席者： 横田 有生（（株）明治）、田中 直子 坪井 悦子* 久保田 哲夫*（森永乳業（株））、
木川 正裕 大野 みほ（雪印メグミルク（株））

*オンライン参加（同時開催の常設委員会を含む）

概 要：

IDF/ISO 分析ウィーク 2026 は、2026 年 5 月 5 日から 7 日まで、IDF スイス国内委員会の主催で、ベルン（スイス）にあるアグロスコープ・リーベフェルトにて開催されました。

本分析ウィークは、乳・乳製品規格に関する IDF/ISO 共同プログラムを開発する乳業専門家による年次会合です。酪農乳業検査室管理者、酪農乳業科学者、分析専門家が交流し、業界のニーズや課題について議論し、試験機器メーカーと最新動向を情報交換する重要な場となります。

次のシンポジウムと 4 つの常設委員会が開催されました。

- 1) シンポジウム：乳タンパク質の世界的展望：分析技術とその先

セッション 1：世界の乳タンパク質セクターの現状と将来の方向性

セッション 2：乳タンパク質定量化技術

セッション 3：タンパク質品質を測定する様々な現代的手法

パネルディスカッション

- 2) 食品添加物・汚染物質分析法常設委員会

- 3) 試験室統計・品質保証常設委員会

- 4) 成分分析法常設委員会

- 5) 酪農微生物学的手法常設委員会

詳細は今年度の国際会議出席報告書に掲載する予定です。

④ IDF 第 6 回栄養・健康シンポジウム 2026

開催日： 2026 年 5 月 21 日（木）（オンライン開催）

出席者： 前田 和可子（協同乳業（株））

概 要：

IDF 第 6 回栄養・健康シンポジウム 2026 は、2026 年 5 月 21 日にオンラインで開催されました。

今年度のテーマは、「乳糖 360 度－生物学から新たなベネフィットまで」で、生理学、臨床実践、最新の研究、実践的な食事指導にわたる健康の観点から乳糖について科学に基づく総合的な考察を行うことで、これらの問題を解明することを目指したものでした。本シンポジウムでは、国際的な専門家によるエビデンスに基づく知見を共有することで、栄養と健康に関する情報に基づく意思決定を支援するとともに、バランスの取れた文化的に多様な食事において牛乳乳製品が果たす重要な役割を強調しました。

次の4つのテーマの講演があり、パネルディスカッションで議論を深めました。

- 1) 栄養における乳糖：骨の健康、エネルギー、その先
- 2) 乳糖の健康への影響：反栄養作用、健康への有益作用、あるいはその両方か？
- 3) 乳糖消化能が消失した成人における乳糖の役割を再考すべきか
- 4) 乳糖不耐症の食事療法

詳細は今年度の国際会議出席報告書に掲載する予定です。

⑤ IDF ビジネスミーティング（常設委員会、IDF 総会、事務局長会議等、2026年度後半）

開催日	開催場所	総会、事務局長会議、常設委員会等
11月12日（木）	オークランド （ニュージーランド）	IDF 酪農政策・経済常設委員会
11月13日（金）	オークランド （ニュージーランド）	IDF 食品衛生常設委員会
11月13日（金）	オークランド （ニュージーランド）	IDF 農場管理常設委員会
11月13日（金）	オークランド （ニュージーランド）	IDF 酪農政策・経済常設委員会/マーケティング常設委員会合同会議
11月13日（金）	オークランド （ニュージーランド）	IDF 各国委員会および全専門家調整会議
11月13日（金）	オークランド （ニュージーランド）	IDF 全専門家調整会議
11月13日（金） ～14日（土）	オークランド （ニュージーランド）	IDF 各国委員会事務局長会議
11月14日（土）	オークランド （ニュージーランド）	IDF 残留物質・化学汚染物質常設委員会
11月14日（土）	オークランド （ニュージーランド）	IDF マーケティング常設委員会
11月14日（土）	オークランド （ニュージーランド）	IDF アニマルヘルスフォーラム
11月14日（土）	オークランド （ニュージーランド）	IDF 規格・表示常設委員会
11月14日（土）	オークランド （ニュージーランド）	IDF 乳業科学・加工技術常設委員会
11月14日（土）	オークランド （ニュージーランド）	IDF 家畜の健康・福祉常設委員会
11月14日（土）	オークランド （ニュージーランド）	IDF 酪農家および酪農乳業における女性 円卓会議
11月15日（日）	オークランド （ニュージーランド）	IDF 総会
11月15日（日）	オークランド （ニュージーランド）	IDF 栄養・健康常設委員会
11月15日（日）	オークランド （ニュージーランド）	IDF 環境常設委員会
12月3日（日）	オンライン	IDF 酪農微生物学的手法常設委員会

II GDP 関連

1) GDP 見解書、ウェビナー



GLOBAL DAIRY PLATFORM

① GDP 見解書 (Perspective Papers)

GDP は、酪農乳業および牛乳乳製品の意義や価値に関する最新の科学的エビデンス情報と GDP の見解をまとめた「GDP 見解書 (GDP Perspective Paper)」を定期的に発表しています。以下に、2026 年 1 月号～6 月号の要約を紹介します。

1 月号: 「加工食品、牛乳乳製品、食事構成」

- ・ 食事に関連する非感染性疾患は、公衆衛生上の主要で重要性を増している課題です
- ・ 牛乳乳製品は多彩で、多くは健康的な食事構成や栄養充足に寄与し、一部のものは食事構成全体の中でどのような位置づけなのかによって公衆衛生的な影響が変化することがある
- ・ 超加工食品の摂取を削減する政策は、健康への逆効果を回避するために、栄養充足、手頃な価格、健康的な食事への公平なアクセスを保護しなければならない

原文は、[こちらをクリック](#)

2 月号: 「栄養を犠牲にせず糖を減らす: 政策の一貫性の必要性」

- ・ WHO は「課税による遊離糖低減」を促しており、課税措置を食品ベース/食事全体の戦略にも組み込まねばならないとしている
- ・ 単一の栄養素に固執すると食事や健康の改善が限定的になる（飽和脂肪酸の例）
- ・ 遊離糖低減による健康増進は、栄養や食料システムなどの一連の政策の一貫性が必要で、食品・飲料業界の関与も必要

原文は、[こちらをクリック](#)

3 月号: 「栄養が重要なとき: 食料システムの持続可能性の再考」

- ・ 食料システムの持続可能性は、環境、栄養、社会経済の全ての評価が必要
- ・ 持続可能性の評価に栄養を含めると、各食品の価値が違うものに変化する
- ・ 複合視点による評価方法は、食料システムを本来の「健康をもたらすもの」にする

原文は、[こちらをクリック](#)

4 月号: 「酪農場の門を超えて: 乳業の生産効率と気候への影響」

- ・ 乳業加工には、排出、生産効率、資源効率を改善できる余地がある
- ・ 最近、商用利用可能な技術で液体乳加工ラインの排出を最大 49%削減し、水の使用と製品ロスも削減できることが示唆されている
- ・ 既存加工設備の更新が、気候目標と酪農乳業セクター全体での強靱性の両方の助けとなる実用的で即効性のある手段になる可能性がある

原文は、[こちらをクリック](#)

5 月号: 「給食の未来: 学校給食での酪農乳業の事業機会」

- ・ 学校給食制度は、栄養に関する世界最大級の公共投資で、健康と経済効果をもたらす食品に対する長期的な機会となっている
- ・ 適切な学校給食制度は、栄養、教育、学習、労働人口を改善し、健康的な食習慣をもたらす、農業や食料システムを支える、という科学エビデンスがある
- ・ 酪農乳業は、健康的な学校給食に貢献できる立場にある

原文は、[こちらをクリック](#)

6月号：「個々の指標の先へ：食料システムの最適化のための総合的なエビデンス」

- ・食料政策は単純な指標に基づいて策定されているが、食料システムは根本的に複合的なもので、カーボンフットプリント、栄養素プロファイリング、食品加工度分類などから一定の示唆は得られるものの、食料の栄養的、環境的、経済的、社会的な貢献を完全に捉えることはできない
- ・科学は、単一の指標を評価する段階から進んでおり、食事の最適化やモデリングの手法の進歩によって、栄養、健康、手頃な価格、環境の持続可能性、消費者の受容性などの複数の指標をまとめて評価できるようになっている
- ・課題はもはや、食料が複合的であることを証明することではなく、複合的評価をする科学を意思決定に用いることになっている
- ・食料システムをより良くするための意思決定において協力することでチャンスが生まれるため、産業界、研究者、政策立案者は、食料システムを最適化するための連携体制を構築するよう協力すべきである

原文は、[こちらをクリック](#)

② GDP ウェビナー

GDP は年数回のウェビナーをオンラインにて開催しています。

ウェビナー「AI：酪農乳業のためのグローバルプレイブック」

開催日： 2026 年 6 月 8 日（月）、6 月 9 日（火）

概 要：

Ketchum 社（国際コミュニケーションコンサルタント企業）との提携によるウェビナーが開催されました。消費者や顧客が検索した際に正しい酪農乳業の情報が提示され、信頼性が強化されるように民間企業や業界団体が協力することを促すことが目的のウェビナーで、「GDP グローバル AI プレイブック」を用いながら、酪農乳業の GEO（Generative Engine Optimization: AI が生成する回答に、望ましい情報を含ませる操作/手法）インパクトを作り出す方法論についての説明がされました。

2) 国際会議の報告・予定

① GDP-IMP グローバルコミュニケーションマーケティング会議

開催日： 2026 年 5 月 10（日）、12（火）～13 日（水）

開催地： サブート社（モントリオール・カナダ）

概 要：

GDP-IMP グローバル会議コミュニケーションマーケティング会議は、GDP と IDF のインターナショナル・ミルク・プロモーション・チームが毎年 5 月頃に合同開催する会議で、グローバルな酪農乳業企業や業界関係組織からの参加者が効果的なコミュニケーション活動について議論をします。2026 年 5 月の会議は、「AI、GLP-1、その他：酪農乳業のコミュニケーションの未来」がテーマで、栄養科学、アニマルケア、人工知能などの分野で国際的に著名な講演者が登壇しました。また、会議の前の 5 月 10 日には近隣の酪農場を視察しました。日本からは 4 名が参加しました。



「酪農乳業のイノベーションのコミュニケーション」

講演

ケリー・ライトン氏（フード・インテグリティ・センター）

GHGを減らす飼料添加剤のような「イノベーション」は、酪農乳業セクターが繁栄し、増加する世界人口に地球の許容内で栄養を供給するために必要不可欠であるが、一般消費者に納得してもらう伝え方がしばしば課題となる。納得してもらうには、信頼関係の構築が重要であるが、「理解」を得るには情報が不十分であり、科学も進歩しているものの不十分である。さらに、「理解」と「受容」は別なので、「何を重要と考えるのかの「価値観」」と「何を真実だと思うかの「信念」」に合致することが必要となる。ところが、エデルマン社の調査では、「世界の 70%の人は強固な信頼の考え方を持っており、価値観や信念、背景が異なる人を信頼しようとしなない」ことが示されている。

フード・インテグリティ・センターが行った 50,000 以上の観点での受容性の調査では、人々は、日常的な情報入手源の違いや、世代の違いに関係なく、5つのグループに分けられるが、いずれのグループも社会的利益と価値観が重なったときに受容することが示された。その際の重要ポイントは、安全性、利益がリスクを上回ること、透明性、価値観の合致であった。つまり、科学的根拠だけでは不十分であり、イノベーションを人々の関心に結びつける必要がある。

こうしたコミュニケーションにおいては、食料システムの一部であり、食料システムにおける信頼の中心でもある酪農家が重要であり、酪農家自身がまずイノベーションやその意図や背景を信頼しなければ、消費者が受容することはない。したがって、初めに酪農家をコミュニケーションの対象にしなければならないが、実際には過小評価されており、必要なプロセスに関与する時期が遅い傾向にある。

イノベーションの導入の成功には、製品レベルや事例ごとで防御的な対処をするのではなく、カテゴリーレベル、セクターレベルでの信頼構築が必要である。コミュニケーションでは、技術的な詳細情報ではなく、「価値」や「ベネフィット」から始め、イノベーションを人々が持つ関心に結び付けることが重要である。そして、外部からの圧力によって後手に回る前に、バリューチェーン内部で連携して事前に信頼の構築をすることも重要である。危機的な状況になってからでは信頼を構築するのは困難になる。

ディスカッション

マルティーン・サンヴィクトール氏（エデルマン・モントリオール）

カナダでは、酪農乳業に信頼感を持つ人の割合が 80%と高く（世界全体では 76%）、メディアやソーシャルメディアに対する信頼感が非常に低いのは対照的である。科学者や業界の専門家に対しても信頼感が高いので、科学者にコミュニケーションのスキルを習得してもらい、画面上に登場してもらうことが効果的であると思われる。一方で、酪農乳業に対する信頼感は 10 代で最も高いが、牛乳乳製品の購入者の半数以上は 55 歳以上となっている。10 代の 40%は TikTok で情報を得ているので、TikTok で 55 歳以上に伝えられるメッセージを発信し、10 代に家族内のインフルエンサーとして 55 歳以上に伝えてもらうことが必要となる。

グレイニス・ズッコ氏（デーリー・オーストラリア）

オーストラリアで酪農乳業に信頼感を持つ人の割合は、2018 年には 68%であったが、現在は 87%まで上昇している。組織としての重点項目は、① 価値観の共有点の特定（アニマルケア、環境、価格、健康等）、② 透明性、③ 信頼できる人（酪農家、栄養士、獣医、環境保護主義者）の活躍（酪農場大使プログラムなど）となっている。

ジュディス・ブライアン氏（デリー・UK）

2026年1月5日に保健省が、脂質や塩分などが高いHFSS（High in Fat, Salt, or Sugar）食品のテレビCMや広告を禁止する制度を開始した。HFSS食品には、砂糖添加ヨーグルト、アイスクリーム、ピザなどが含まれている。また、保健省は、「高タンパク質」の強調表示の基準値を現行の「 $\geq 5\text{g}/100\text{kcal}$ 」から下げる考えであり、実現すると、乳の「高タンパク質である」特長が目立たなくなる。こうした状況から、酪農乳業界では保健省に対する信頼感が大きく後退している。

「GLP-1 時代における牛乳乳製品の健康効果」

講演

コニー・ウィーバー氏（サンディエゴ州立大学）

GLP-1薬は、食欲や胃の働きを抑えることで減量させる作用がある、肥満や糖尿病に対して処方される薬で、米国では使用者が12%に達している。使用時には、体重が年間で15~20%減少し、筋肉量が年間で25~40%減少する。筋肉量減少への対処としてタンパク質（特にアミノ酸組成が良いタンパク質）を多く摂ることが重要となり、少ない食事量で必要な栄養素を摂るためにエネルギー当たりの各種栄養素の量が多い食品の摂取が重要となる。各種栄養素の効率的な摂取に関して、牛乳乳製品は世界中での各種栄養素の摂取源としての寄与度が高く、特に、カルシウムは約50%の寄与をしている。他にも多くの栄養素が、エネルギーの寄与率の7%よりも高い寄与率となっている。

一方で、牛乳乳製品は太りやすいので避けた方が良い、と認識している人も多い。この点については、大規模な調査による有名なエビデンスがある。各種の食品を、毎日1サーブ分を多く摂取することで4年間で体重がどれだけ変化するか、というもので、ヨーグルトは400g減少、全脂肪乳は32g減少、チーズ、低脂肪乳、無脂肪乳などは変化がなく、バターでも、4年間で体重増加は100~200g程度であることが示されている。

カルシウムに関しては、前年のGDP-IMP会議で講演したユリアーノ氏が、高齢者では牛乳乳製品の摂取量を増やすことで骨折を33%減らすことができることを示している。GLP-1薬使用者も、食事量が減る状況においてカルシウムを積極的に摂ることが重要になる。肥満の治療として胃の部分切除をした人では、胃の働きが弱まっている影響により、カルシウムの吸収率が術前の33%から術後は7%まで大きく減少することがわかっている。GLP-1薬の影響については今のところ未確認であるが、同様の現象が起こる可能性もあり、カルシウムを効率的に摂ることができる食品が重要になる可能性がある。

その際に、同じ成分組成の食品でもそれぞれの栄養素の消化吸収や働きが異なるという現象の「乳マトリクス」が重要になる。牛乳乳製品は、見た目だけでも多様であるように、種類ごとでマトリクスも異なると考えられるが、詳細は今後の研究課題となっている。

最近、食品ごとで、カルシウムの含有量や、カルシウムの吸収を高める成分や阻害する成分の含有量などからカルシウムの消化吸収量を算出する計算式を作り、各食品の1サーブ分から吸収されるカルシウムの量の算出値を比較したところ、牛乳乳製品が突出して高いことが示された。世界各国のカルシウム摂取の状況の評価にも計算式を利用したところ、カルシウムの供給量（カルシウム含有食品の生産量+輸入量-輸出量）で評価した場合と「計算式」によって吸収率を掛け合わせて評価した場合で結果が大きく異なることが確認された。結果からは、世界の多くの地域で牛乳乳製品の摂取量を摂ることでカルシウムの摂取量を増やす必要があることが示唆される。

米国での過去20年間のカルシウム摂取量の実態の経年推移は、単純な摂取量だけで見ると増加しているように見えるが、「計算式」によって吸収率を考慮した「吸収量」を見ると、

逆に減少している。一方で、骨折率や骨粗鬆症の発生率が過去 10 年間で増加しており、「吸収量」の推移と連動した動きになっていることから、カルシウムの実質的な「摂取量」の減少が原因になっている可能性が示唆される。カルシウムに関して「乳マトリクス」は非常に重要で、特に GLP-1 薬使用者では牛乳乳製品を摂取することの意義が高いといえる。

ディスカッション

エイミー・デリシオ氏（デーリー・カウンシル・オブ・カリフォルニア）

アンドレアス・ブッフ・メラー氏（アーラ・フーズ）

イザベル・ナイデラー氏（デーリー・ファーマーズ・オブ・カナダ）

マージー・クヌスト氏（デーリー・ファーマーズ・オブ・アメリカ）

GLP-1 薬

GLP-1 薬の使用者は食事量が減るが、食事の構成内容は維持しながら全体の量を減らすことが多い。胃腸の不快感を訴える使用者が多いという特徴もある。食品としては、エネルギー当たりの栄養素密度が重要となり、カルシウム、ビタミンD、カリウムなどのもともと不足傾向にある栄養素は特に要注意となる。

GLP-1 薬使用者を対象とする牛乳乳製品の設計

食欲が減り、胃の働きも弱くなることで食事量が減るため、小さめのサイズのものが食べやすくなる。商品特徴としては、タンパク質が良質で多いことを優位点として軸にし、機能性が付与されていることが望ましい。タンパク質の含有量が多すぎると強い満腹感を誘導するため、注意が必要。食欲が減退しているため、脂肪分の多い食品に比べて牛乳乳製品は食べやすい可能性がある。

コミュニケーション

GLP-1 薬処方時に医師や病院の栄養士によって栄養指導がされることはまれで、胃切除のような術後ケア期間がないことも影響している。GLP-1 薬使用者を対象とする教育的なウェブサイトでも、牛乳乳製品を推奨する記述は見当たらない。

牛乳乳製品を推奨する際の成分特長の候補としては、まずタンパク質が挙げられる。DIAAS を活用することが考えられるが、強調表示に DIAAS を用いることは現状では困難である。カルシウム、カリウム、乳糖なども候補となるが、乳糖については研究が必要。消化吸収性などの説明が必要になってくるが、消費者にとっての利点につながるような伝え方をするには工夫が必要。一方で、牛乳乳製品は太りやすいという誤解から避けられる可能性があるため、その点の対処も必要である。

酪農家からの情報発信も有効だと考えられるが、支援が必要だろう。

カナダの食事ガイドライン（2019 年版）のカルシウム摂取への影響

2019 年版において、牛乳乳製品の枠やカルシウムやカルシウムを含む食品の重要性を強調する説明が削除された。そのことの一般消費者への直接的な影響はないが、それ以降、医療専門家がカルシウムについて話すことがなくなってしまっている。食事ガイドラインの変更の影響かはわからないが、カナダでは現在、高齢者の 90%以上、成人女性の 75%がカルシウム摂取不足の状態にある。最近の研究では、20 代の参加者 13 人全員が「骨量減少」の状態であることを確認している。こうした現状を、政府や専門家に認識させる必要がある。

「持続可能性における「効率性」についてのコミュニケーション」

講演

ジョアン・スラビン氏（ミネソタ大学、酪農家、栄養・食品の専門家）

持続可能性における「効率性」とは、新たに使い始めているワードで、環境だけでなく栄養や社会経済などとともに総合的に見たときの「効率の良さ/価値の高さ」のことであり、

様々な分子/分母の組み合わせによって見出される「効率や価値」を意味する。「効率性」の概念から、食料システムの決定には、環境、栄養、社会経済への影響を同時に考慮する必要がある。考慮するには、栄養適性、環境への影響、価格、文化的受容性を評価する食事モデリング手法が必要となるが、少なくとも、動物由来食品を避けることは世界の持続可能な栄養への道筋とはならない。なお、植物タンパク質の質を乳タンパク質に近づけるには「超加工」の加工プロセスが必要となる。

牛乳乳製品の「効率性」を伝える方法の 1 つとして、シリアルのような「キャリアー・フード」の概念を取り入れることも有効だろう。日常的にシリアルを食べている人の 9 割は、シリアルを牛乳とともに食べており、その人たちの 1 日の牛乳摂取量の 2/3 はシリアルと摂っている。シリアル摂取者は、1 日の牛乳の摂取量が 4 割ほど多いというデータもある。市販のシリアルの 2/3 は全粒粉が主成分であるため、全粒粉の摂取量も多い。また、果物も同時に摂る人が多く、1 日の果物摂取量の 1/3 を朝食でシリアルと摂っており、1 日の果物摂取量も多い。シリアル摂取者は、カルシウム、リン、鉄、葉酸、食物繊維の摂取量が多く、塩分は少なく、飽和脂肪酸は変わらないという特徴も確認されている。このうちのカルシウムとリンは、牛乳乳製品の寄与が大きい。シリアル摂取者は、心血管疾患や 2 型糖尿病の死亡リスク、肥満や過体重のリスクが低く、食事の質が高い、という観察結果も報告されている。

「カナダの酪農乳業市場の概要」

講演

アニー・アクムーディ氏（デーリー・ファーマーズ・オブ・カナダ）

カナダの酪農は、供給管理制度によって価格安定と需給調整が図られている点が特徴的である。液体乳の消費が減少する中で、ヨーグルトやチーズなど付加価値商品の需要は伸びている。近年のタンパク質需要の高まりが消費動向に影響している一方で、植物由来代替食品は拡大後に成長が鈍化している傾向が観察されている。消費者が食品の中身や健康・環境への影響、家畜福祉などの面に強い関心を示していることから、これらに対する透明で一貫した情報提供が市場維持に不可欠となっており、業界全体として信頼構築に取り組む必要がでてい

酪農場の数:	9,048	2.2%減 (2024 年比)
乳牛頭数/戸:	107	2.7%増
乳業工場数:	519	5.5%減
生乳生産量:	97 億 L	1.2%増
酪農場の収入:	約 1.14 兆円	2.7%増
平均収益:	約 118 円/L	1.5%増



「AI と「評判」の未来」

講演

ロブ・バーンスタイン氏（オムニコム/ケッチャム）

AI の普及により、消費者の情報取得行動は検索から直接回答取得へと変化している。企業や業界の評価は、検索結果ではなく、AI が生成するナラティブに依存するようになってきており、そのナラティブは過去の情報や報道、特にネガティブな内容を長期的に維持する性質を持つため、一度の問題が持続的な評判リスクとなる可能性がある。構造化された長文コンテンツや信頼性の高い情報を継続的に発信することで AI に引用される機会を高めることも可能であり、従来の SEO (Search Engine Optimization: 検索エンジン最適化) や PR 中心の戦略から、AI による情報再構成を前提と



する「評判」の設計へと転換する必要がある。

「これまでに AI について学んだことー酪農乳業セクターの展望」

パネルディスカッション

司会: ボブ・ムジンスキー氏 (GDP)

ジツキ・ヨンクマン氏 (ロイヤル・フリースランドカンピーナ)

これまでは人々の「会社のイメージ」を調査してきた。今年から、AI そのものをステークホルダーとして扱い、「フリースランドカンピーナという会社について AI はどのように理解しているのか」を調査した。AI 監査 (AI Audit) として、一般消費者に行うのと同じ質問を、ChatGPT や Gemini など複数の生成 AI に対して 75 回ずつ実施した。



人は時間が経つと過去の問題を忘れたり、企業の改善を評価したりするが、AI は忘れることなく、過去のニュース記事や報道内容を長期間保持し続け、過去の問題をいつまでも語り続ける。こうした特性を理解し、AI を単なる情報検索ツールではなく、新しい情報媒介主体として扱う必要がある

ヘザー・オルダニ氏 (デーリー・マネジメント・インク)

人々は検索結果のリンクをクリックしなくなり、AI から直接答えを得るようになってきている。そのため、2年前から「ゼロクリック・フューチャー」を意識するようになった。そして、AI に引用してもらうことを目的に、自社サイトを構造化し、専門家インタビュー記事、家畜福祉、食事ガイドラインなどの長文の解説記事を日付を付けて多数作成した。その結果、AI による引用は大幅に増加した。サイト全体のトラフィックは減少傾向にあるが、AI 経由で来た訪問者は滞在時間が長く、記事を深く読むという特徴があり、新しい機会だと考えている。

そこでデーリー・マネジメント・インクでは、Communications Intelligence System という仕組みを構築した。主な要素は、モニタリング: AI 空間で何が起きているか監視する、AI 監査: LLM (Large Language Model) の中で牛乳乳製品がどのように扱われているかを調査する、シナリオ分析: どのような論点が成長しそうかを予測する、ナラティブ: 望ましいナラティブの形成を支援する、の 4 点。

パメラ・ナレワジェク氏 (デーリー・ファーマーズ・オブ・カナダ)

AI が酪農乳業をどのように説明しているのかを把握することを目的として、各国共通で AI 上の酪農乳業関連情報を分析するパイロットプロジェクトを実施した。

持続可能性を重点テーマに選び、各国で何が AI に引用されるか、出典は何か、否定的か肯定的か、などを分析した。重要なのは、国単独ではなく、世界全体で取り組むことだと認識している。

全体の議論

経営層の AI についての理解が重要であり、また、会社内で、サステナビリティ部門、マーケティング部門、広報部門が異なることを言っているのは対応できない。AI は企業全体を見ているため、全組織で同じストーリーを語る必要がある。企業単独での対応では限界があるので、業界全体で協調することが重要である。また、世界共通メッセージを地域ごとで翻訳・適用する必要がある。AI 評価は一度作れば終わりではなく、継続的なモニタリングが必要である。やるべきことは、「科学に基づく一貫したストーリーを業界全体で発信し続ける」ことと、「情報共有の段階から協働してナラティブを作る段階へ移行する」こと。

「アニマルケアのコミュニケーションのリスクと効果」

パネルディスカッション

司会： マーシャル・フォン氏（フォンテラ）

デビッド・ケルトン氏（ゲルフ大学）

ケリー・バラット氏（サプート）



家畜福祉は、過去 20 年間で品質保証プログラムの中心テーマになってきており、各国、各酪農場によって段階は異なるものの、科学的知見を共有しながら前進している。そして、従来の「5 つの自由/解放」から、より積極的な「5 つの提供（Five Provisions）」という考え方へ進化している。家畜福祉は、「ゴール」ではなく、「継続的な改善の旅」だといえる。しかし、家畜福祉は、酪農業界の信頼を支える重要な基盤である一方で、社会的な批判を受けやすいテーマでもある。そのため、業界は「完璧である」と主張するのではなく、「継続的に改善している」という姿勢を自信を持って伝えることが重要である。

消費者が抱く「昔ながらの牧場（牧歌的）」のイメージと、現代の酪農現場でのロボット搾乳や牛舎での飼育との間には認識ギャップがある。業界は、現在の飼養方法の科学的根拠を丁寧に説明する必要がある。

消費者からの関心が高いテーマとして、母牛と子牛の接触期間延長（分離問題）がある。酪農家もその価値を認めているが、疾病伝播や安全面の課題もある。オランダやドイツなどではこの点についての研究が進められている。

SNS で発信する「Farmer Tim」や地域住民対象の酪農場ツアーの事例が紹介され、酪農家による情報発信の重要性が述べられた。酪農家自身がストーリーを語ることは信頼形成に有効であり、「牛を大切にしている」というメッセージで理解が深まる。

虐待映像に対する炎上への対応に関しては、「問題行為を隠したり正当化したりしてはいけない」という議論がされ、問題発生時は、速やかな認知と透明な説明、改善策の提示が不可欠であると述べられた。

AI は、フェイク動画を作成されるリスクもあるが、一方で、跛行検知などの牛の健康状態のモニタリング、体調観察や家畜の不適切な取り扱いの自動検出など、家畜福祉向上に貢献する可能性がある。従業員教育ツールとしても有効活用できる。

質疑応答では、「そもそも感情を持つ動物から食品を得ることは倫理的なのか」という根本的な問いが今後強まるという意見が出された。これに対し、パネリストは、「全ての人を説得することはできない。しかし、多くの消費者は判断に迷っている。共通価値（栄養、家族、地域、思いやり）を軸に対話することが重要である」と述べた。

「持続可能性についての話し方を変えるべきか？」

パネルディスカッション

司会： ジョージ・モリソン氏（アーラ・フーズ、前英国外交官）

エレヌ・モリセット氏（サプート）

クルード・ブルトン氏（FGS ロングビュー、前カナダ国立銀行、ESG 戦略専門家）

エリザベス・カツアドゥロス氏（カンター）



「持続可能性」は、終わったのではなく、米国政治環境の変化、グリーンウォッシュ規制強化、2025 年目標の評価時期到来によって、現実的な実行重視へと移行している。これにより、ESG は、後退ではなく、「再調整」をする段階になっている。

消費者意識の調査結果では、83%がより持続可能な生活を望んでおり、59%が環境配慮ブランドを評価しており、49%が環境負荷の高いブランドを避ける、となっている。しかし、実際に行動を変えているのは 31%という「価値観と行動のギャップ」が存在している。行動を妨げる要因としては、情報不足、持続可能な商品の品質への不安、価格上昇などが挙げられている。

ESG コミュニケーションの課題としては、企業は従来、大きな目標や将来ビジョンを語ってきたが、今後は、データ、実績、エビデンスが重要になってくる点が挙げられる。サステナビリティ部門・マーケティング部門、経営陣が同じメッセージを発信することも重要。そして、「語ること」から「証明すること」で消費者との信頼を構築することが重要になる。また、投資家は、マテリアリティ分析、ガバナンス体制、一貫した情報開示を重視しており、AI を使って企業の説明内容の変化も分析している。

近年は環境だけでなく、食料安全保障、供給力の強靱性、地域生産基盤維持が重要テーマになっている。酪農乳業は栄養供給と安定供給の両面で社会的役割が大きい。

「酪農家パネル：酪農の未来について前向きに語るには」

パネルディスカッション

司会： パメラ・ナレワジェク氏（デリー・ファーマーズ・オブ・カナダ）

クロエ・ラッセル氏（ケベックの酪農家）

デリー・ファーマーズ・オブ・カナダの広報活動に参画、若手酪農家インフルエンサーとして酪農の価値や魅力を TikTok など発信。

ミレーヌ・ベガン氏（ケベックの酪農家）

カナダ最大の酪農協アグロプールの若手リーダー育成プログラムに参加、SNS やラジオで酪農の魅力や持続可能性の取り組みを発信。

ユージェニー・レインヴィル氏（ケベックの酪農家）

大学でマーケティングを専攻する学生で、デリー・ファーマーズ・オブ・カナダにインターンとして勤務。

ディスカッション

カナダの若手女性酪農家 3 人が、ソーシャルメディアを活用してどのように農業や酪農の魅力を消費者へ伝えているかについて議論した。

酪農の未来を前向きに語るためには、酪農家自身による情報発信や本物の声で消費者と対話することが重要。そして、酪農家の日常、牛との関係、失敗や苦勞、家族の暮らしをありのままに伝えることが、消費者の理解と信頼につながる。ソーシャルメディアは広報ではなく、対話の場である。コメントのやり取りは教育の機会と捉えて、批判的なコメントにも丁寧に対応することが重要である。活動家の誤解や批判への対応は避けたいが、専門家の知見を活用して説明すると良い。

消費者からは、子牛の管理方法や牛の暮らし方についての質問が多い。酪農家にとっては「牛が最も大切な資産」であり、牛の健康は経営そのものである、という家畜福祉の考え方を説明する重要な機会となる。最近の若者は、環境への関心が高く、気候変動や環境問題への対応に関する質問も増えている。回答では、正しい情報を伝えることを意識している。

Instagram は 30 代前後の子育て世代の利用が多いが、TikTok は若年層の利用が多く、短時間動画でトレンドやユーモアを重視すると良い。最初の 10 秒が特に重要で、面白いシーンを冒頭にもってくる工夫が必要。本物らしさ（Authenticity）、楽しさ（Entertainment）、教



育/正しい知識 (Education)が良い投稿だと言える。

ソーシャルメディアの運営上の苦勞としては、撮影よりも企画や編集の方が大変であるという点が挙げられる。トレンドの変化が速いこと、コメント対応が大変であること、農場経営との両立もうまくする必要がある。楽しめないなら、やらない方が良い。

「世代」の認識は間違っているかもしれないーどう対処するか

講演

ドン・メイヨー氏 (IMI インターナショナル)

世代論の多くは誤解に満ちており、「Z世代」「ミレニアル」などの世代分類だけでは消費者を正しく理解することはできない。世代よりも年代や実際の行動を見ることが重要である。例えば、Z世代も他の世代と大きくは変わらず、好きな飲料や食品を見ると似た行動を取る。つまり、世代差よりも人として共通のニーズの方が大きく影響する場合が多い。

消費者の関心は、家族、仕事、物価、将来など多岐にわたっており、商品や栄養のことばかり考えて生活しているわけではない。なので、自社商品の話ばかりのマーケティングでは失敗をする。また、消費者は「健康が大事」と言いながら実際の行動ではファストフードも利用する。つまり、意識調査だけでなく、実際の購買行動を分析する必要がある。購買を動かす主要な要因としては、「健康」もあるが、「信頼」、「気分が良くなること」などもあるので、機能訴求だけでなく、感情的価値も重要である。

購買決定は店頭で行われることが多く、SNS よりも、陳列、POP、試食などの施策が効く場合があるので、デジタルに過剰投資する必要はない。実際に試してもらうことは、新規購入の大きな後押しになり、特に食品では体験が信頼形成につながる。また、「Made in ○○」や地域貢献は消費者の共感を得やすいため、他国進出の際は、その国や地域の一員であることを示すことがブランド価値を高めることにつながる。今後は、消費者が AI によって商品や情報を探すようになるので、AI に参照される信頼性の高い情報資産を整備することも重要になる。

牛乳乳製品は、信頼、健康、親しみの面で有利な立場にある。その強みを継続的な情報発信と体験提供で維持し、強化すべきである。

「生成 AI の世界に向けた世界的な統合メッセージの発信」

パネルディスカッション

司会: ベス・ブラッドリー氏 (GDP)

リチャード・ウォルトン氏 (明治)

リア・ファン・デル・マース氏 (ロイヤル・フリースランドカンピーナ)

牛乳乳製品の価値は、個別の栄養素ではなく、食品全体としての構造や相互作用を含めた「乳マトリクス」として捉える必要がある。この視点は各国の栄養政策や科学的議論においても重要性が高まっている。AI 時代においては、国ごとに異なるメッセージを発信するよりも世界中で一貫した科学的ストーリーを構築することがより強い影響力を持つため、業界全体として統合的なメッセージ設計を進めるとともに、消費者が情報を取得するチャネルを適切に活用する必要性がある。

「メッセージ (科学的事実)」と「コミュニケーション (共感を呼ぶストーリーテリング)」は全く異なるもので、橋渡しすることが重要である。メッセージについては、科学者がメッセージを吟味した作成し、コミュニケーターがそれをインパクトのある「物語」に変換



する作業を進めてきた。これまでに、世界の酪農乳業セクターのコミュニケーションを一貫させて強化させるための統合的メッセージとしては、「酪農乳業のナラティブ（物語）と世界的なメッセージ伝達 2026（統合メッセージ集）」を完成させている。「酪農乳業ファクト一覧（Fact on a Page）」、「解決型メッセージ伝達（Solution-Focused Handouts）」も整合性を持って作成しているので活用可能である。これらは、地域の事情に合わせて修正変更することも可能である。

6月のウェビナーでは、「AI ツールキット（プレイブック）」を発表し、説明する予定である。昨今は、ウェブで検索をしても、列挙されたリンクをクリックすることなく先頭に出てくる「AI による概要」を見て終わるようになってきているので、「AI が生成する「回答」に、望ましい情報を含ませる操作・手法」を活用することが必要となっている。その手法を酪農乳業に関して進めるためのガイド「AI ツールキット（プレイブック）」に従って、世界各地で「統合メッセージ」を発信する活動を進めてもらいたい。

酪農乳業セクターには、100年以上の歴史を持ち、多くの国が加盟する IDF があり、ファクトシートなどの信頼性の高い情報を出版している。また、世界中の大企業が会員として参加し、活動の柱の1つをコミュニケーションとしている GDP があり、「ファクト一覧」や「統合メッセージ集」を作成している。AI の時代にあって、世界的なリーチを持ち、世界的な専門知識を持ち、信頼もされている IDF と GDP が、同じ場所に立って同じ方向に向かい、科学に基づくメッセージを協力して活用しなければならない。

「持続可能性の取り組みの事例紹介」

遠藤 雅人 氏（森永乳業）

森永乳業では「社会とともに持続的に成長すること」を基本的な考え方としており、「酪農生産基盤の維持」と「GHG 排出削減」の両立を重視している。

その観点から、サプライチェーンのリスク要因分析として、原料が不足して入手できなくなる状況と牛乳乳製品の市場が縮小する状況を2大リスクとして、気候変動対策やアニマルウェルフェア、人権問題などの様々な課題やリスク要因をそれぞれにつなげることで全体の関係図を作成した。サプライチェーンに関する様々なリスクは、個別に見るとどのような意味があるかわかりにくいことがあるが、関係図を整理したことで、原料不足の大きなリスク要因としては「生産者の減少」が特に重要で、対応の取り組みが必要であることが見えてきた。日本では、酪農家が減少する要因として高齢化や後継者不足の課題があるため、次世代が酪農を継ぎたいと思える産業にすることが不可欠であり、酪農家とともに実行可能な解決策を作ることが重要であると考えている。



「明治栄養プロファイリングシステムの紹介」

リチャード・ウォルトン氏（明治）

明治栄養プロファイリングシステムは、食品の栄養・健康価値を複合的な栄養組成として評価するもので、製品開発においてより良い栄養組成の設計をするために活用したり、消費者へのコミュニケーションツールとして、また、消費者の健康増進のために活用することを想定している。欧米では、糖質や脂質、特に飽和脂肪酸の摂取量を減らすことが大きな課題であるが、日本人では、タンパク質や脂質、特に高齢者では飽和脂肪酸も摂取量を増やす必要がある実態であり、一方で塩分は摂取量が多いので減らしたい状況になっている。また、カルシウム、ビタミンD、鉄も今より多く摂取する必要がある。日本人の性別や年代別の栄養摂取実態に基づいてそれぞれの対象者層に合わせてスコア化するのが特徴であるため、同

じ食品でも性別や年代別でスコアが異なったり、欧米のスコアと大きく異なる場合がある。

酪農場視察

Ferme J.G.L. Rainville (デリー・ファーマーズ・オブ・カナダ所属)

モントリオール市街地から車で東に 50 分程度移動したところに位置する酪農場を見学。ケベック州内の平野部では、土地が高価格であることから放牧はせず、フリーバーン（牛が自由に移動可能）の畜舎飼い方式が一般的であるとのこと。生乳は、デリー・ファーマーズ・オブ・カナダが買い取るため、どの乳業会社のどの工場に行くかは酪農家は把握していない。乳価は月ごとに変動する。



② GDP ナリッシュ会議（2026年）の予定

開催日： 2026 年 11 月 13 日（金）8:30-17:30

開催地： パーク・ハイアット・ホテル（オークランド・ニュージーランド）

③ GDP 年次総会（2026年）の予定

開催日： 2026 年 11 月 14 日（土）13:30-17:30

開催地： パーク・ハイアット・ホテル（オークランド・ニュージーランド）

④ GDP-IMP グローバルコミュニケーション会議（2027年）の予定

開催日： 2027 年 5 月または 6 月

開催地： 未定（オスロ・ノルウェー）

Ⅲ DSF 関連

DSF（デリー・サステナビリティ・フレームワーク）は、世界の酪農乳業セクターの持続可能性への取り組みについて進捗の観測と報告を組織的に行う取り組みで、日本では J ミルクがデータの取りまとめを行う集計会員（統括会員）となっています。



1) 年次進捗報告

① DSF への2005年の日本の年次進捗の報告

集計会員は、DSF の 11 の持続可能性の評価項目から自身の地域での優先項目（マテリアリティ）を指定してその測定値を DSF に毎年報告することになっており、DSF は、世界全体の測定値を集計した[年次進捗報告書](#)を毎年作成し、発表しています。

Jミルクでは、「7つのマテリアリティ」のうちの3項目をDSFの優先評価項目（「GHG排出」、「飼養管理」、「労働条件（酪農場）」）として選定しており、2026年3月に、初めての進捗報告をしました。報告の概要は以下の通りです。

日本の酪農乳業に関する一般統計値 酪農家戸数・人数、乳牛頭数、乳業工場数などを。農林水産省の統計値などをもとに報告しました。

GHG排出に関する事例報告 農林水産省の「GHG簡易算定シート」を用いて試験調査を進める予定であることと、「GHG排出削減の重要性と必要性の認知拡大」のために講演会や研究会での情報提供活動を積極的に実施していることを報告しました。

飼養管理に関する報告 「各農場での「家畜の健康・福祉計画」の整備（実施）率」が測定項目となっているため、農林水産省の「乳用牛の飼養管理に関する技術的な指針」の実行を促すためのJミルクの「アニマルウェルフェアポリシー」のパートナーシップへの参加率を「計画の整備率」として報告しました。

労働条件に関する報告 「農場安全計画の実施率」が測定項目となっているため、「JGAP」認証を取得している酪農生産者の数を報告しました。

2) 国際会議の予定

① DSF 年次総会（2026年）の予定

開催日： 2026年11月3日（火）21:00-24:00（日本時間）

開催地： オンライン

IV IFCN関連

1) 国際会議の報告・予定

① IFCN デーリーカンファレンス 2026

開催日： 2026年6月10日（水）20:30-23:30（日本時間）

2026年6月11日（木）20:30-23:30（日本時間）

開催： オンライン

概要：

第27回「IFCNデーリーカンファレンス」が、「酪農乳業の未来を創る：変化する世界におけるイノベーションと持続可能性」をテーマとして、オンラインで2日間開催されました。

世界各国から50名を超えるIFCNリサーチャー等が参加し、2025年の世界の酪農状況を振り返るとともに、酪農乳業界の今後について議論を行いました。日本からは、酪農学園大学の日向貴久教授とJミルクから1名が参加しました。



1日目「研究ネットワークと世界の動向」

「2025年は世界の生乳供給にとって際立った一年」

IFCNより、2025年の世界の酪農市場を特徴づけた主な動向が報告された。

2025年の世界の生乳生産は、前年比で2.6%増加し、固形分補正乳（SCM）ベースで10億tを突破した。特に後半の半年は供給の増加ペースが増した。欧州、北米、中南米など、幅広い地域が生産拡大に貢献したが、地域差も見られた。

需要も増加しており、主な要因として、所得の増加、都市化、外食産業の回復に伴う消費パターンの変化などを背景とする1人当たり牛乳乳製品消費量の増加が挙げられた。供給拡大と堅調な需要を背景に生乳価格も上昇し、IFCN国際乳価指標は2024年と比べて11%上昇

した。各地域の乳価や酪農場の利益率は、市場環境、飼料価格、生産システムなどによる違いが見られた。

IFCN は、2025 年を、生乳供給の拡大、堅調な需要、乳価の改善を特徴とする、世界の酪農乳業にとって総じて力強い 1 年であったと評価した。一方で、酪農場の大規模経営への集約化、地域間の不均衡、需要を支える要因の変化などが、今後も成長を維持できるかを左右する重要な課題になると指摘した。

「生乳生産、乳価、牛乳乳製品需要」

グループワークセッション

生乳生産 2025 年の生産動向を左右した要因として、農場経営、飼料事情、天候、構造的な制約などが挙げられた。また、今後の成長戦略として、生産拡大を目指すのか、それとも乳脂肪や乳タンパク質などの乳成分を高めるのか、についても議論が行われた。

乳価 国際市場の動きが生産者に強い価格シグナルを与えた地域があるが、一方で国際価格の上昇が生産者乳価に反映されにくい地域もあることが共有された。2026 年についても、生産供給の変動、投入コスト、需要構造の変化などにより、乳価の不安定性が続く可能性がある」と指摘された。

牛乳乳製品需要 消費習慣、所得水準、市場の熟成度などの要因によって、地域ごとの差が一層左右される状況が共有された。需要が引き続き拡大している地域もあるが、一方で市場の飽和や消費者の嗜好変化が見られる地域もある。

「世界の酪農市場」

パネルディスカッション

アンドレア・レンデヴィヒ氏 (IFCN)

マシュー・ニューマン氏 (AbacusBio ニュージーランド)

エヴァ・コウォシチ氏 (西ポメラニアン大学 ポーランド)

ベルタス・ファン・ヘールデン氏 (生乳生産者団体 (MPO) 南アフリカ)

ニュージーランド、ポーランド、南アフリカの IFCN リサーチャーが、それぞれの国における生乳供給、需要、乳価などの動向について知見を共有した。

ニュージーランドでは、酪農家のおよそ 25~30% (2025 年) が仮想的な放牧区域を設定する「バーチャルフェンス」の首輪型端末を利用している。この技術は、放牧管理の柔軟性を高め、牧草地管理の改善にも役立っている。肉牛価格は大幅に上昇しており、2026 年も高値が続くと見込まれている。フォンテラは、事業戦略の見直しを行い、乳原料をこれまで以上に重視する方向へ転換している。乳価が酪農家の収入を大きく左右するが、乳価が上昇しても以前ほど生産量が大きく増加する状況ではなく、酪農家は規模拡大よりも効率性や生産性の向上を重視するようになっている。

ポーランドでは、2025 年の生乳生産量が 2024 年比で約 3%増加した。背景には、酪農家が、技術、機械、農場施設などへの投資を積極的に行ってきたことがある。年末にかけて乳価が下落したが、比較的低い投入コストも支えとなり、生乳生産は引き続き増加した。乳質の向上が重要な課題とされており、多くの乳業企業が、乳質の高い生乳を生産する酪農家に対して乳質に応じた上乗せ乳価（プレミアム）を支払っている。こうした仕組みが、各農場における継続的な投資や乳質改善を後押ししている。

南アフリカでは、2025 年と 2026 年に発生した口蹄疫が酪農乳業セクターに影響を及ぼしている。乳牛へのワクチン接種を進めるとともに、2回目の接種に必要なワクチンの確保をするなど、対応は進んでいる。同国の農業は比較的開放された経済の中で運営されているため、酪農生産者は乳製品や農産物の国際市場の影響を受けやすい状況にある。輸入関税は設けら

れているものの、保護効果は限定的であり、国際価格や市場環境の変化に大きく左右される。

2 日目「農場経済」

「良好な経済環境が 2025 年の酪農経営の改善を支える」

IFCN より、2025 年の酪農経営の経済性と最近の動向が報告された。

乳価は、北米、中南米、アフリカ以外の世界の多くの地域で上昇した。生乳生産コストも上昇し、特に欧州でその傾向が顕著であったが、乳価の上昇が収益性の改善に寄与した。廃用牛価格は約 20% 上昇し、牛の販売による収益も増加した。総じて、乳価の上昇と個体乳量の増加により、多くの地域で 1 頭当たりの収入が増加した。また、飼料効率（飼料摂取量に対する生乳生産量の比率）が改善したことも、生乳生産コストの削減に繋がった。

2025 年の経済成績は良好であったが、酪農家は将来の投資に対して慎重な姿勢を維持している。長期的な見通しへの不確実性が影響し、投資意欲は全体として積極化には至っていない。2026 年に向けては、市場の不安定性、経済情勢の不確実性、生産コストの高止まりなどが課題となる。

「効率性、投資、コスト」

グループワークセッション

効率性 収益性と経営の強靱性を高める上で「効率性」が最も重要な改善分野であるとの認識が共有された。特に、飼料効率と飼料管理が農場成績を左右する重要な要因であること、技術や自動化の導入が生産性や労働効率を改善する上でますます重要になっていること、遺伝的改良、繁殖管理、精密農業技術に大きな可能性があることが強調された。

投資 短期的な効率性の向上と長期的な競争力の維持を両立させる必要性が強調された。優先分野には、給餌システム、農業機械、自動化、アニマルウェルフェア、環境管理が挙げられた。今後は、先進技術、データ管理、センサー、ロボット、農場インフラなどへの投資が一層重視されると見込まれている。

コスト 多くの国で飼料費が最大の費用項目となっており、人件費、エネルギー費、法令遵守費が続いている。賃金の上昇、労働力不足、規制要件の厳格化は、今後も農場収益を圧迫すると考えられる。そのため、省力化や効率性を高める手段として自動化やデジタル技術の導入がさらに進むと予想される。

「酪農経営の経済性と変動性」

パネルディスカッション

ミリカ・コチッチ氏 (IFCN)

リゴベルト・ベセラ氏 (Agropecuaria Ribepin メキシコ)

マリア・ファデーエワ氏 (Dimedium エストニア)

キャサリン・ローランド氏 (Kite Consulting 英国)

各国の典型的な酪農経営形態の特徴、過去 3~5 年間の主要なコスト要因、今後 5 年間に想定される経済的な機会について議論が行われた。

エストニアでは、小規模な家族経営と大規模で効率性の高い企業的経営が混在している。酪農場の約半数は 1~100 頭の小規模経営であるが、乳牛は 60~300 頭の規模の大きい酪農場に集中する集約化が進んでいる。主なコスト上昇要因としては、飼料費、電気や軽油などのエネルギー費、加えて地政学的な情勢の影響が挙げられた。人件費も上昇しており、気候変動やアニマルウェルフェアへの対応として、牛舎や換気システムなどへの投資も必要となっている。同国では、経営管理に優れ、収益性を確保している酪農場が、効率性を重要な成長要

因として重視しながら牛群規模の拡大を含む投資を続けている。

英国では、ニュージーランド型に近い季節分娩・放牧主体の経営から、3,000頭を超える大規模な完全舎飼い経営まで、多様な飼養形態が存在している。こうした飼養形態の多様性に加え、気候の変動も大きいため、さまざまな変動に対応することが継続的な課題となっている。また、エネルギー費と人件費が主な経営圧迫要因となっているが、飼料価格は5年前と比べると比較的安定している。過去3年間は乳価が堅調であったが、前年10月以降の乳価下落によってキャッシュフローが悪化し、利益率も低下している。生乳の供給過剰が乳価の下落にさらなる圧力を加えているが、秋には市場の需給バランスが回復することへの期待もある。

メキシコでは、地域によって飼養規模が大きく異なっている。同国の生乳生産量の約25%を占めるラ・ラグナ地域では、大規模な企業経営や生産・加工・流通を一貫して行う経営が中心で、飼養頭数が2万頭に達する酪農場もある。中央地域では、50~5,000頭規模の酪農経営が多いのに対し、南部地域では20頭未満の小規模な家族経営が中心となっている。飼料費は引き続き最大のコスト要因であり、今後も最大の費用項目となることが見込まれている。また、大規模農場が引き続き規模を拡大している一方で、中小規模農場は現在の生産水準を維持する傾向にある。今後もし乳価がさらに下落した場合には酪農経営の集約化が加速することが予想される。

詳細は、[こちらをクリック](#)

② IFCN カンファレンス 2026

IFCN カンファレンス 2026 は、「世界の酪農乳業の未来：不安定な市場における効率化、イノベーション、協調」をテーマに、2026年9月27日～9月30日の4日間、パルマ（イタリア）にて開催される予定です。当会議では、研究者、企業、関係機関の代表者が一堂に会し、議論と交流が行われます。

詳細は、[こちらをクリック](#)

V ISO（乳・乳製品）関連

1）国際会議の開催および質問状の発行

乳および乳製品に係る ISO/TC34/SC5 委員会は、IDF と合同で乳・乳製品の分析方法（ISO/IDF 合同分析法規格）を策定しています。ISO/TC34/SC5 委員会は、IDF の分析関連の常設委員会（SC: Standing Committee）と合同で会議を開催しており、単独では開催していません。分析方法策定に係る質問状は合同作成手順に従って SC5 および IDF それぞれが発行し、回答結果を合同で検討、分析方法の策定を進めています。また、原則として5年に1回発行する「当該分析方法が有効かどうか」を確認する定期見直しの質問状により、維持・改正・削除を検討しています。日本政府は ISO の TC34/SC5 委員会の P メンバーに登録し、その業務を当会が受諾しています。

前号（2026年2月27日発行第10号）でお知らせした以降に開催した ISO/TC34/SC5 の国際会議および本誌13ページに記載した SC5 の質問状について、以下に紹介します。

① ISO/TC34/SC5 国際会議の開催

次の4つの合同会議（IDF ビジネスミーティング③IDF/ISO 分析ウィークと同じ内容）が、2026年5月にベルン（スイス）にて開催されました。これらの合同会議に、J ミルクから登録している IDF 常設委員会委員が出席しました。

- 1) SC5/酪農微生物学的手法常設委員会合同会議 11月5日（火）
- 2) SC5/食品添加物・汚染物質分析法常設委員会合同会議 11月7日（木）
- 3) SC5/成分分析法常設委員会合同会議 11月13日（土）、19日（金）
- 4) SC5/試験室統計・品質保証分析法常設委員会合同会議 11月19日（金）

② ISO/TC34/SC5 質問状の発行

SC5 の質問状は、主として分析法規格作成段階順に次の 1~6 の質問状に分類されます。1、4、6 の質問状は、IDF においても日本も含む IDF 加盟国に質問されます。

- 1) 新規活動（NP: New Project）
- 2) 作業原案（WD: Working Draft）
- 3) 委員会原案（CD: Committee Draft）
- 4) 国際規格案（DIS: Draft International Standard/DTS: Draft Technical Specification）
- 5) 国際規格最終案（FDIS: Final DTS/FDTS: Final DTS）
- 6) 定期見直し（SR: Systematic Review）

2026 年度（2026 年 4 月 1 日～2027 年 3 月 31 日）内に投票期限のある ISO/TC34/SC5 質問状は次のとおりです（12~13 ページの ISO/TC34/SC5 国内審議委員会活動報告を参照）。

新規活動（NP: New Project）

	ISO 資料番号	標 題	投票日
1	ISO/NP 25859	乳・乳製品－好熱性菌の計数法	3 月 30 日
2	ISO/NP 26189	連続フローアナライザーによる乳中の尿素の定量法	4 月 20 日

作業原案（WD: Working Draft）

なし

委員会原案（CD: Committee Draft）

	ISO 資料番号	標 題	投票日/ 投票期限
1	ISO/CD 25754 (ISO/TC336)	ラボラトリー的设计－スマートラボラトリー的设计－ 乳製品に係る要件	6 月 8 日
2	ISO/CD 5544 IDF 89	カゼイン・カゼイネート－「固定灰分」の測定	9 月 21 日 (未投票)

国際規格案 (DIS: Draft International Standard/DTS: Draft Technical Specification)

	ISO/IDF 番号	標 題	投票日/ 投票期限
1	ISO/DIS 24141 IDF 262	乳・乳製品－動物用医薬品の標準品規格に係る分析証明書の使用と解釈を調和させ、簡素化するための一般要件	6 月 22 日
2	ISO/DIS 13366-2 IDF 148-2	乳－体細胞数の測定法－パート 2: フローサイトメトリ－法	9 月 7 日 (未投票)
3	ISO/DIS 13366-1 IDF 148-1	乳－体細胞数の測定法－パート 1: 直接鏡検法 (標準法)	9 月 8 日 (未投票)

国際規格最終案 (FDIS: Final DTS/FDTS: Final DTS)

なし

定期見直し (SR: Systematic Review)

	ISO/IDF 番号	標 題	投票日/ 投票期限
1	ISO 21543:2020 IDF 201	乳・乳製品－近赤外分光法の適用に関する指針	5 月 18 日
2	ISO 22184:2021 IDF 244:2021	乳・乳製品－糖分含有量の測定－パルスアンペロメトリック検出法を用いた高速陰イオン交換クロマトグラフィー (HPAEC-PAD)	5 月 18 日
3	ISO/TS 17996:2023 IDF/RM 205	チーズ－一定変位速度下での一軸圧縮によるレオロジー特性の測定	5 月 18 日
4	ISO 21187:2021 IDF 196	乳－微生物学的品質の定量分析－代替法の結果と基準法の結果との間の換算関係の確立および検証に関する指針	5 月 18 日
5	ISO 14501:2021 IDF 171	乳・粉乳－アフラトキシン M1 含有量の測定－イムノアフィニティークロマトグラフィーによるクリーンアップおよび高速液体クロマトグラフィーによる測定	9 月 2 日 (未投票)
6	ISO 6091:2010 IDF 86	粉乳－滴定酸度の測定 (標準法)	9 月 2 日 (未投票)
7	ISO/TS 17193:2011 IDF/RM 208	乳－ラクトペルオキシダーゼ活性の測定－光度法	9 月 2 日 (未投票)
8	ISO 11870:2009 IDF 152	乳・乳製品－脂肪含有量の測定－ブチロメーター法使用に関する全般的な手引き	12 月 2 日 (未投票)
9	ISO 23970:2021 IDF 252	乳・乳製品・乳児用調製乳－液体クロマトグラフィーおよびタンデム質量分析法 (LC-MS/MS) によるメラミンおよびシアヌル酸の定量	12 月 2 日 (未投票)

10	ISO 3976:2006 IDF 74	乳脂肪－過酸化値の測定	12月2日 (未投票)
11	ISO 8968-4:2016 IDF 20-4	乳・乳製品－窒素含有量の測定－パート4: タンパク質および非タンパク質の窒素含有量の測定ならびに真タンパク質含有量の算出 (標準法)	12月2日 (未投票)
12	ISO 9874:2006 IDF 42	乳－総リン含有量の測定－分子吸収分光法を用いた方法	12月2日 (未投票)
13	ISO/TS 4985:2023 IDF/RM 255	乳・乳製品－アルカリホスファターゼ活性の測定－蛍光測定法によるマイクロプレート法	12月2日 (未投票)

2) AOAC情報の収集・提供

国際委員会の活動計画に記載している「AOAC 情報の収集・提供」の目的は主に2点あります。

- ・乳・乳製品に関する分析法の検討を ISO に先駆けて実施する AOAC International の動向を関係者で共有することで、ISO への初動対応を早め、意見反映機会を確保する。
- ・コーデックス規格の乳・乳製品・乳児用調製乳に関する分析法で AOAC 法が採用されていることに基づき、AOAC の分析法関連情報を国際規格の検討や整合化推進の一助とする。

Jミルクでは、AOAC International の会員に配信される資料から乳・乳製品を中心とする分析法の情報を関係委員に毎月提供しています（2024年10月～2026年7月に22回）。

- ・ AOAC Spectrum Email Newsletter: AOAC の OMA (Official methods of Analysis) の動向、最新の分析科学、イベント、トレーニングなどに関する最新情報が配信される（毎週金曜日）。
- ・ Journal of AOAC INTERNATIONAL (オンライン版): 食品、食品添加物、サプリメント、汚染物質、毒素、有害物質、農薬、飼料、肥料、環境などに関する分析法を紹介する目的で、化学、生物学、毒物学の分析化学分野における論文が掲載される（隔月）。
- ・ 情報提供先: ISO/TC34/SC5 国内審議委員会、分析技術・衛生専門分科会、微生物・衛生専門分科会、分析関連 IDF 常設委員会の委員およびオブザーバー。

① AOAC情報の提供

Journal of AOAC の 2026 年 1~4 号から情報提供した報文は次の通りです。

- ・ [携帯型ラマン分光法と機械学習の組み合わせによる植物由来乳代替品の迅速同定](#)
- ・ [乳・乳製品中のウシ免疫グロブリン G の分析: 液体クロマトグラフィー・タンデム質量分析法とアフニティ液体クロマトグラフィーの比較](#)
- ・ [米国食品医薬品局 \(FDA\) の「食品および飼料中のパーフルオロアルキル物質およびポリフルオロアルキル物質の検出法」の妥当性確認: ファースト・アクション 2025.06](#)
- ・ [複雑な食品マトリクスにおけるプロバイオティクスの定量に関する新たな知見: フローサイトメトリー法とプレートカウント法の相関](#)
- ・ [各種牛乳乳製品中のウシラクトフェリンのヘパリン親和性に基づく定量法の精度向上のための抽出緩衝液の最適化](#)

3. 国際会議等の日程および出版物の紹介

I 国際会議等の日程一覧表

今後開催される IDF 国際会議、GDP 国際会議、DSF 国際会議、IFCN 国際会議、コーデックス関連会議等の日程は次のとおりです（IDF TIMETABLE OF MEETINGS 2026.04 などを参照）。詳細情報をご希望の方は、国際委員会事務局までお問い合わせ下さい。

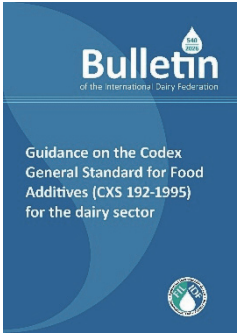
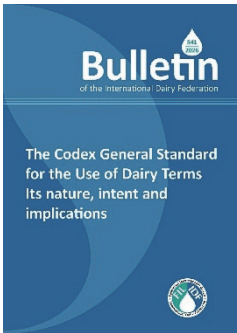
	年 月 日	国際会議	コーデックス 関連会議	開催場所
1	2026 年 8 月 29 日（土） ～9 月 2 日（水）	AOAC インターナショナル年次会議および展示会		インディアナポリス （米国）
2	2026 年 9 月 7 日（月） ～12 日（土）		第 57 回コーデックス 残留農薬部会（CCPR）	北京 （中国）
3	2026 年 9 月 27 日（日） ～9 月 30 日（水）	IFCN カンファレンス		パルマ （イタリア）
4	2026 年 10 月 12 日（月） ～17 日（土）		第 28 回コーデックス 食品輸出入検査・認証 制度部会（CCFICS）	パース （オーストラリア）
5	2026 年 10 月 19 日（月） ～23 日（金）		第 19 回コーデックス 食品汚染物質部会 （CCCF）	未定
6	2026 年 10 月 19 日（月） ～23 日（金）	世界食品安全委員会 全体会議		ローマ （イタリア）
7	2026 年 10 月 25 日（日） ～29 日（木）	国際食品科学技術連合 （IUFoST） 2026 年世界食品会議		香港
8	2026 年 11 月 2 日（月） ～5 日（木）	世界子ども 栄養フォーラム		ルサカ （ザンビア）
9	2026 年 11 月 2 日（月） ～6 日（金）		第 45 回コーデックス 栄養・特殊用途食品 部会（CCNFSDU）	ニュルンベルク （ドイツ）
10	2026 年 11 月 3 日（火）	DSF 年次総会		オンライン
11	2026 年 11 月 9 日（月） ～20 日（金）	国連気候変動会議 （UNFCCC COP31）		アンタルヤ （トルコ）
12	2026 年 11 月 11 日（水） ～15 日（日）	IDF ビジネス ミーティング		オークランド （ニュージーランド）

13	2026 年 11 月 13 日 (金)	GDP ナリッシュ会議		オークランド (ニュージーランド)
14	2026 年 11 月 14 日 (土)	GDP 年次総会		オークランド (ニュージーランド)
15	2026 年 11 月 15 日 (日) ～20 日 (金)	IDF ワールドデューリー サミット 2026 ^{*1}		オークランド (ニュージーランド)
16	2027 年 4 月 10 日 (土) ～16 日 (金)		第 57 回コーデックス 食品添加物 部会 (CCFA)	未定
17	2027 年 5 月 10 日 (月) ～14 日 (金)		第 46 回コーデックス 分析・サンプリング法 部会 (CCMAS)	(ハンガリー)
18	2027 年 5 月 25 日 (火) ～28 日 (金)	IDF 分析ウィーク 2027		レーワルデン (オランダ)
19	2027 年 7 月 12 日 (月) ～16 日 (金)		第 50 回コーデックス 委員会 (CAC)	ローマ (イタリア)
20	2027 年 11 月 1 日 (月) ～5 日 (金)		第 50 回コーデックス 食品表示部会 (CCFL)	(カナダ)
21	2027 年 11 月 15 日 (月) ～19 日 (金)		第 57 回コーデックス 食品衛生部会 (CCFH)	(米国)
22	2027 年 11 月 16 日 (火) ～19 日 (金)	IDF ワールドデューリー サミット 2027		ムンバイ (インド)
23	2028 年 10 月 1 日 (日) ～5 日 (木)	IDF ワールドデューリー サミット 2028		ケベックシティ (カナダ)

^{*1} 詳しい情報は[ウェブサイト](#)を参照。

II 国際組織関連の出版物

① IDF ブリテン

出 版 物	標 題お よ び 概 要
1 IDF ブリテン 540 2026 年 4 月 	酪農乳業界における「食品添加物に関するコーデックス一般基準（CXS 192-1995）」に関する指針 本ガイダンス文書の目的は、酪農乳業界が『コーデックス食品添加物一般基準（GSFA）』（CXS 192-1995）を活用し、牛乳および乳製品における食品添加物の使用許可を評価するのを支援することである。本文書では、GSFA の構成を説明し、主要な部分・節について詳述するとともに、GSFA を活用するための段階的な手順を提示する。 (25 ページ)
2 IDF ブリテン 541 2026 年 6 月 	牛乳乳製品用語の使用に関するコーデックス一般基準：その性質、意図および影響 牛乳乳製品の栄養価値、機能性、官能特性は、市場におけるその良好な地位に寄与している。一方で模倣品は健康リスクをもたらす潜在的な可能性があるため、牛乳乳製品の名称の誤用によって消費者が誤解されないようにすることが重要である。「コーデックス牛乳乳製品用語の使用に関する一般基準（GSUDT）」の目的は、牛乳乳製品用語がどこで、いつ、どのように使用できるか、また使用できない場合について明確にすることである。本号では、WTO の「貿易の技術的障害に関する協定（TBT）」との関係における現状を含め、国内、地域、国際貿易の文脈における GSUDT の性質、意図、考えられる影響について情報を提供する。 牛乳乳製品用語の適用に関する原則について、牛乳乳製品、複合乳製品、その他の食品を例に挙げて解説する。また、組成が変更された牛乳乳製品（例えば、低脂肪化、高タンパク質化など）への適用についても、具体例を交えて取り上げている。付録として、GSUDT の本文が掲載されている。本文全体を通じて、コーデックス「包装済み食品の表示に関する一般基準（GSLPF）」の関連規定にも言及している。 本報告書は、国内、地域、国際的な文脈において表示問題に取り組む立法者やこれらの問題に関与する食品企業や業界団体の法律専門家を対象としている。 本会報は、以前の IDF ブリテン第 397/2005 号および IDF ブリテン 第 507/2020 号に代わるものである。 (47 ページ)

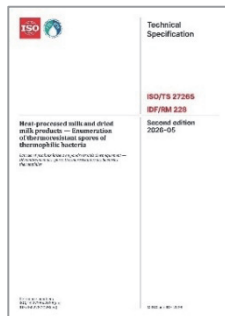
② ISO/IDF スタンダード・技術仕様書 (TS)

出 版 物	標 題 お よ び 概 要
1 スタンダード 231:2026 ISO 16958 IDF 231: 2026 	乳・乳製品・乳児用調製乳・成人用栄養食品－脂肪酸組成の定量－キャピラリーガスクロマトグラフィー法 本規格は、長鎖多価不飽和脂肪酸（LC-PUFA）を豊富に含む油脂が添加されているか否かを問わず、乳脂肪および/または植物油脂を含む、牛乳、乳製品、乳児用調製乳、成人用栄養食品に含まれる個々の脂肪酸および/または全脂肪酸の含有量を定量するための方法を規定する。これには、脂肪酸群（トランス脂肪酸（TFA）、飽和脂肪酸（SFA）、一価不飽和脂肪酸（MUFA）、多価不飽和脂肪酸（PUFA）、オメガ-3 脂肪酸、オメガ-6 脂肪酸、オメガ-9 脂肪酸）および/または個々の脂肪酸（リノール酸（LA）、α-リノレン酸（ALA）、アラキドン酸（ARA）、エイコサペンタエン酸（EPA）、ドコサヘキサエン酸（DHA））も含まれる。 本測定法は、事前の脂肪抽出なしに食品マトリックス中で直接エステル交換法により実施するため、総脂肪分が 1.5%以上（質量分率）の液体試料または水で再構成した粉末試料に適用可能である。 脂肪含有量が 1.5%未満の製品から抽出された脂肪や酸度が$\leq 1\text{mmol/脂肪 } 100\text{g}$のソフトチーズやハードチーズなどの乳製品は、第 2 項の方法での予備的な脂肪抽出の後に、同じ方法で分析することができる。 魚油または藻類由来の多価不飽和脂肪酸（PUFA）が添加または強化された製品は、これらの熱に弱い脂肪酸を回収するために溶媒の蒸発を可能な限り低い温度（例：最大 40℃）で行う。 この第 2 版は、ISO 16958 IDF 231: 2015を廃止し、これに代わるものである。 (52 ページ)
2 スタンダード 258:2026 ISO 9877 IDF 258: 2026 	乳・乳製品－灰分の測定 本規格は、牛乳、粉乳、ホエイパウダー、ホエイタンパク質濃縮物、乳児用調製粉乳、乳パーミエートパウダー、乳タンパク質濃縮物の灰分含有量を測定するための方法を規定する。 注記： カゼインおよびカゼイネートの灰分（固定灰分）の測定については、ISO 5544 IDF 89を参照のこと。 (8 ページ)

技術仕様書
228:2026

ISO/TS 27265

| IDF/RM 228: 2026



熱処理牛乳・乾燥乳製品—好熱性細菌の耐熱性胞子の計数

本規格は、試料を 106℃または 100℃で加熱した後に 55℃でコロニー計数法を用いることで熱処理牛乳および乾燥乳製品中の好熱性細菌の耐熱性胞子を計数する方法を規定する。

本規格の適用範囲は、低温殺菌乳、超高温（UHT）処理乳、滅菌乳を含む加熱処理乳、乾燥全脂乳、乾燥脱脂乳、乾燥バターミルク、乾燥ホエイ製品に限定される。

この第2版は、[ISO/TS 27265 | IDF/RM 228: 2009](#)を廃止し、これに代わるものである。

(10 ページ)

編 集 後 記

昨年（2025 年）10 月に森永乳業（株）から J ミルク国際グループにまいりました、秋山 正行 と申します。国際グループでは、国際委員会や分科会長・広報委員会議等の運営や、国際 Dairy レポート、インテリジェンス等の国際情報提供事業を主に担当しております。本誌「国際委員会ニュースレター第 11 号」では、国際委員会をはじめとする各種委員会の活動状況と国際情報提供事業に関する記事を担当いたしました。

私はこれまで、牛乳・乳飲料等の飲料製品の開発研究に長年携わってまいりました。生乳や乳製品原料を扱う立場から、世界の酪農乳業情報を収集し、発信する立場へと変わりましたが、酪農や生乳生産、世界の酪農情勢といった生産現場に近い分野については、国内外から学ぶべきことの多さを日々実感しております。

「国際委員会ニュースレター」では、「国際委員会活動報告と主な国際情報提供」「国際組織（IDF、GDP、IFCN 等）の活動報告」「国際会議等の日程および出版物の紹介」など、半期の活動内容を整理して報告しております。普段は触れる機会の少ない国際的な議論や潮流を把握する上で、本誌は有用な情報源となります。私自身も国際活動全体の把握や、気になるテーマの入口として活用しておりますので、皆様にも必要な情報を拾い上げるツールとしてご利用いただければ幸いです。

現在、世界の酪農乳業組織は、環境・気候対策やバイオセキュリティ等の重要テーマに関する情報を積極的に発信しています。こうした最新動向を収集・整理し、世界の潮流を的確に捉えることは、日本の酪農乳業界にとって欠かせません。得られた知見を「現場で使える情報」として国内の関係者の皆様に届け、浸透させていくことが私たちの役割であると考えております。そして、日本の酪農乳業の現状や優れた取り組みを世界へ発信し、双方向のコミュニケーションを強化することも重要であると考えております。

日本の酪農乳業界の持続可能性を左右する課題の 1 つが「牛乳乳製品の消費拡大」です。開発者としての経験を活かし、消費者が何を求め、どのように製品を選ぶのかという視点から、牛乳乳製品の価値の見える化や新たな魅力の発信にも取り組み、従来にない需要の創出に少しでも貢献したいと考えております。

まだまだ至らぬ点多々ございますが、「国際委員会ニュースレター」を通して国際委員会活動をお伝えし、酪農乳業関係者の皆様と世界をつなぐ架け橋となれるよう努めてまいります。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



令和 8 年（2026 年）8 月 28 日発行

発 行 J ミ ル ク 国 際 委 員 会

(J-milk International Committee)

東京都千代田区神田駿河台 2-1-20
御茶ノ水安田ビル 5F 一般社団法人 J ミルク
TEL: 03-5577-7495（国際グループ共通）
FAX: 03-5577-3236

J ミ ル ク 国 際 委 員 会

J-milk International Committee

東京都千代田区神田駿河台 2-1-20

御茶ノ水安田ビル 5F 一般社団法人 J ミルク

TEL: 03-5577-7495 (国際グループ共通) FAX: 03-5577-3236